松本市文化財調査報告　№165

長野県松本市

AGATAMACHI

県町遺跡XII

―― 緊急発掘調査報告書 ――

慶應大学附属図書館
寄贈刊行物

2003.3

松本市教育委員会

長野県松本市

AGATAMACHI

県町遺跡XII

―― 緊急発掘調査報告書 ――

2003.3

松本市教育委員会

序

県町遺跡は松本市の中央部に位置し、市街地へ向かって流れる薄川の右岸、県一帯に拡がる遺跡です。本遺跡は昭和55年のあがたの森公園整備に伴う発掘調査に始まり、それぞれの開発に先立って過去11回の調査が行われております。

今回は長野県松本県ヶ丘高等学校の体育館建替え工事が計画されたため、松本市が同校から委託を受け、埋蔵文化財を記録する目的で緊急発掘調査を実施したもので、同校内の調査としては5か所目となります。

発掘調査は平成13年11月から14年3月にかけて行われました。冬期間の厳しい調査となりましたが、関係の皆様のご尽力により無事終了することができました。発掘調査の結果、弥生時代から中世にかけての、さまざまな時代の生活跡を発見することができました。中でも緑釉陶器や硯などの出土は特筆されます。これらは今後、地域の歴史を解明するうえで、大変重要な資料になることと思われます。

しかしながら、発掘調査をして記録保存することは、遺跡を破壊しているという側面があることも事実です。開発により私たちの生活が豊かになる一方、それにともない歴史遺産が失われてしまうのは残念なことですが、発掘調査により当時の生活が明らかとなり、私たちの郷土松本が歩んできた歴史が一つずつでも解き明かされるのは大変貴重なことだと思います。

最後になりましたが、厳しい寒さのなか発掘調査にご協力をいただいた参加者の皆様、また調査に際しては多大なご理解とご協力をいただいた、長野県松本県ヶ丘高等学校の皆様、地元関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成15年3月

松本市教育委員会　教育長　竹淵公章

例　言

1　本書は、平成13年11月19日から平成14年３月25日にかけておこなわれた、松本市県２丁目１番１号に所在する県町遺跡の発掘調査報告書である。

2　本調査は松本県ヶ丘高校が体育館を建替えするのに伴って松本市教育委員会がおこなったものである。

3　本遺跡は平成13年度に発掘調査を行い、平成14年度に報告書の作成を実施した。

4　本書の執筆分担は次の通りである。

第１章：事務局
第２章第１節：森　義直
第３章第２節：清水　究
第３章第３節第２項：太田圭郁
第３章第３節第３項：内堀　団
上記以外：澤柳秀利

5　本書の作成・編集にあたっての作業分担は次の通りである。

遺物洗浄接合：五十嵐周子、内澤紀代子、百瀬二三子
土器・陶磁器実測：竹内直美、竹平悦子、松尾明恵、八板千佳
土器・陶磁器トレース：太田万喜子、久保田瑞恵
石器実測：太田圭郁、堀　久士
石器トレース：太田圭郁
金属製品保存処理：洞澤文江
金属製品実測：内堀　団
金属製品トレース：内堀　団
遺構図調整・整理：石合英子、澤柳秀利、清水　究
遺構図トレース：太田万喜子、久保田瑞恵、澤柳秀利
図版組み：石合英子、澤柳秀利、清水　究
写真撮影：（現場写真）澤柳秀利、清水　究
（遺物写真）宮嶋洋一
（航空写真）株式会社 共同測量社
総括・編集：澤柳秀利

6　本書の中で使用した遺構名の呼称は次の通りである。

第１号住居址→１住　第１号掘立柱建物址→１建　第１号土坑→１土　第１号ピット→ Ｐ１
第１号竪穴状遺構→１竪　第１号溝址→１溝　第１号流路址→流路１　第１号集石→集石１
遺物包含層調査におけるグリッド番号の呼称は、そのグリッド北西隅の座標を用いている。

7　土器･陶磁器の実測図において断面図の白抜きは弥生土器及び土師器で、（古）は古墳時代土器を表す。スミ塗りは須恵器、陶器、磁器で、（緑）は緑釉陶器、（青）は青磁、（白）は白磁、（ＮＳ）は軟質須恵器、（Ｋ）は灰釉陶器、（陶）は陶器を表し、表示のないものは須恵器である。

8　本遺跡の調査及び本書の執筆・作成にあたって松本県ヶ丘高等学校風土研究会にご教示、ご協力をいただいた。記して感謝申し上げる。

9　本調査における出土遺物及び現場で作成した測量図、写真等の諸記録は松本市教育委員会が管理し、松本市立考古博物館に保管･収蔵されている。（松本市立考古博物館　〒390-0823　長野県松本市大字中山3738番地１　Tel0263-86-4710）

目　次

序
例言
目次
第１章　調査の経緯 …… 4
　１．調査に至る経過 …… 4
　２．調査体制 …… 4
第２章　遺跡の環境 …… 6
　第１節　遺跡の立地と地形・地質 …… 6
　第２節　歴史的環境 …… 7
第３章　調査結果 …… 10
　第１節　調査の概要 …… 10
　第２節　遺構 …… 13
　１．竪穴住居址 …… 13
　２．掘立柱建物址 …… 17
　３．土坑 …… 17
　４．ピット …… 18
　５．竪穴状遺構 …… 18
　６．集石 …… 18
　７．溝・流路址 …… 18
　第３節　遺物 …… 29
　１．土器・陶磁器 …… 29
　２．石器 …… 48
　３．金属器 …… 50
第４章　調査のまとめ …… 61
写真図版

図・表目次

図目次

第１図　土層概念図 …… 6
第２図　遺跡の範囲と周辺遺跡 …… 8
第３図　調査範囲図 …… 9
第４図　遺構配置図（１・２面） …… 11
第５図　遺構配置図（３・４面） …… 12
第６～10図　竪穴住居址図 …… 21
第11図　竪穴住居址・掘立柱建物址・竪穴状遺構・溝 …… 26
第12～13図　土坑 …… 27
第14～21図　遺物実測図（土器・陶磁器） …… 40
第22図　出土石器 …… 49
第23図　金属器実測図 …… 50
第24図　基本土層（東トレンチ西面、136住周辺部分） …… 62

表目次

第１表　県町遺跡住居址一覧表 …… 19
第２表　県町遺跡竪穴状遺構一覧表 …… 19
第３表　県町遺跡溝址・流路址一覧表 …… 20
第４表　県町遺跡土坑一覧表 …… 20
第５表　出土土器観察表 …… 35
第６表　遺構主要諸元一覧 …… 48
第７表　遺物主要諸元一覧 …… 48
第８表　遺構略号一覧 …… 48
第９表　実測図掲載固体属性一覧 …… 48
第10表　器種一覧 …… 48
第11表　石材略号一覧 …… 48
第12表　石材単位器種組成 …… 48
第13表　遺構単位石材組成 …… 49
第14表　遺構単位器種組成 …… 49
第15表　主要諸元一覧 …… 50
第16表　遺構金属種別単位所謂器種 …… 50

第１章　調査の経緯

１　調査に至る経緯

平成12年度に実施した公共事業照会の中で、長野県松本県ヶ丘高等学校において大体育館の建替え事業が計画されていることが明らかとなった。同校を含む一帯には、周知の埋蔵文化財包蔵地である県町遺跡があり、過去11回の発掘調査が行なわれ、多数の遺構遺物が発見されている。そこで、松本市教育委員会では同校並びに長野県教育委員会高等教育課と県町遺跡の保護について協議した。その結果、既存体育館が解体された後、事業に先立って緊急発掘調査を実施し記録保存を図ることとなった。

発掘調査の実施にあたっては、同校から松本市が委託を受け、現場での発掘調査、整理作業及び調査報告書の刊行等の業務は松本市教育委員会が行うこととした。委託契約は平成13年８月27日付で締結し、同年11月19日に発掘調査を開始した。本調査は生活面が複数である上、遺構密度が高い集落であったため、長期間の調査となったが、平成14年３月25日をもって現場作業を終了した。

整理作業及び調査報告書の刊行については、平成14年４月15日付で前年度と同様に委託契約を締結し、平成15年３月20日をもってすべての業務を終了した。

２　調査体制

(1)　調査団

調査団長　竹淵公章（松本市教育長）

調査担当者　澤柳秀利、清水究（文化課）

調　査　員　松尾明恵、宮嶋洋一、森義直

協　力　者　飯田三男、五十嵐周子、石合英子、井上直人、今村克、入山正男、内澤紀代子、久保田登子、河野清司、清水陽子、下島和代、竹内直美、竹平悦子、田中一雄、中村恵子、中村美ゆき、林和子、廣田早和子、福島勝、布野行雄、布野和嘉夫、布山洋、洞沢文江、待井敏夫、宮田美智子、百瀬二三子、八板千佳、矢﨑寛子、山崎照友、渡辺順子

(2)　事務局

松本市教育委員会教育部文化課

有賀一誠（課長）、熊谷康治（課長補佐）、松井敬治（同、～平成14年３月）、田口博敏（同、平成14年４月～）、直井雅尚（主査）、武井義正（主任）、久保田剛（同）、渡邊陽子（嘱託）、塚原祐一（同）

第２章　遺跡の環境

第１節　県町遺跡の地形・地質

調査地の立地

本県町遺跡は松本盆地の南東部にあり、東部山地から西流する薄川によって形成された扇状地上で北西に緩く傾斜しており標高598m～602mの間にある。位置は旧松本市街の東端で薄川へは南へ400m、女鳥羽川の清水橋へは北西へ約700mの地点にある。東には２～３㎞で美ヶ原から続く第三紀層の筑摩山地があり、西側は奈良井川、梓川を越えて15㎞ほどで西山の中古生層から成る飛騨山地に至る。県町遺跡の発掘は既に第11次まで行われており、今回の発掘は今迄の発掘のうち最も東端の標高600～602mの間である。

周辺の地形・地質

本調査地を含む広大な松本盆地は、洪積世中期に起きた造盆地運動で誕生した構造性の盆地で、糸魚川～静岡構造線とほぼ平行な東・西の山麓線沿いの大断層と、それを横切る東西方向の断層により生じた南北に長い盆地であり、西と南は飛騨山地の中古生層とそれに貫入した火成岩類よりなっている。東部～東北部は1000m～2000mのほぼ南北に連なる筑摩山地で、第三紀層とそこに貫入や噴出した火成岩類よりなっている。

調査地に関係のある盆地の南半分を占める主な堆積物は、飛騨山地を解析し南西方向から流入する鎖川・奈良井川・田川などによる扇状地堆積物であり、これ等が合して複合扇状地を形成し、緩く東北東に傾斜している。

梓川系の砂礫層の東端は、清水付近まで到達していることがボーリングの結果判明している。

一度誕生した盆地の中に、その後洪積世後期になって松本市の旧市街地付近に局部的な構造（断層）性盆地の形成が始まり、同時にその西部が傾動しながら隆起を始めて、それまで大口沢方面へ流れていた女鳥羽川が城山方面に流れをかえ、砂礫を第三紀層の上に載せ更に隆起の進行によりそこは城山となり、流路は東へ押しやられて現在に至っている。

この旧市街地付近に誕生した局部的盆地を埋める主役は、北からの女鳥羽川と東からの薄川である。

女鳥羽川は三才山峠(1500m)から流れ出す本沢を始め、幾つもの沢と合して西に向かって流れ、稲倉付近で流れを南にかえ、流路の首振りにより稲倉を扇頂として南に広がる扇状地を形成している。薄川は市街地の東部、三峰山や扉峠付近を源流として幾つかの沢と合流して西流し、入山辺地区の西端付近を扇頂として西に広がる扇状地を形成している。この両者は湯川付近で接し、市街地方面に複合扇状地を形成している。この局部的盆地は沈降による沼地の時代があり、そのため、その影響を引き継ぎ停滞水地特有のヨシやガマなど、湿地性植物の腐食に富む漆黒色の粘土層が、地下30mまでの間に何層も存在していることが、過去のボーリングの結果知られている。

伊勢町及びその周辺の発掘から、1.6㎜／年～1.7㎜／年の速さで土砂が堆積しており、これは新村～穂高にかけての松本盆地の中心部での堆積速度が1㎜／年ほどであるので、現在も松本駅前付近から松本城付近にかけてゆっくりと沈降が続いているものとみられる。

県町遺跡の地形・地質の変化について

県町遺跡は薄川扇状地の中程にあり、扇状地は流路が周期的に首を振ることによって形成されるので、弥生以後県町の遺跡の遺存状態と堆積状態を見ると、およそ次の３通りに分類できる。

[1] 本流まで遠く、洪水に対して安定な時期

この様な環境では腐食土層ができる。県町遺跡の弥生時代がこれに該当する。Ⅰ～Ⅲ次発掘地点では弥生の鍵層である腐食土層が多く残っているがⅣ次以降の発掘地点は、本流又は支流などで弥生の腐食土層の多くは流出している。

[2] 本流又は支流に洗われた時期

この場合は、流理構造を有する砂層または、ふるい分けのよい砂礫層となっており、その場にあった遺構の上部又は全てが下流に運ばれている。

[3] 本流が近くを流れており、しばしば大洪水による堆積物の入れ代り（今まであった土層は下流に流され、上流にあった土層が新たに堆積）が行われた時期

県町遺跡では、この[3]が最も多く、ふるい分けの極めて悪い汚い塊状の堆積物である。

県町の古墳時代以後の遺構は、[2]と[3]によってできた小起伏の激しい地形から、雨水や小流によって洗い出されて凹部を埋め、緩い起伏を形成しそこに各時代の生活が営まれたとみられる。

今次発掘地点の地形・地質の変化について

県町遺跡の最東端、標高600～602mのごく緩やかに西傾斜した建築物跡である。土層は今迄の発掘のうちで最も激しく複雑に変化しており、中々全体像がつかみにくいので、土層概念図でおよその状態を示すと第１図のようになる。

土層の堆積は上層においては、およそＳ－60°－Ｅ方向からＮ－60°－Ｗ方向に向かってドミノ倒し状に、西側が古く東ほど新しく重なっており、洪水時には上流の地表面で風化しサビた砂礫を押し流しながら本地点を襲い、堆積物や遺構を多かれ少なかれ削って下流（西方）に送り、代って上流からふるい分けの悪い礫土が堆積している。多少の安定期には洪水層から洗い出された砂土が凹部をレンズ状に埋め、そこに９Ｃ以後の生活面や遺構が存在する。

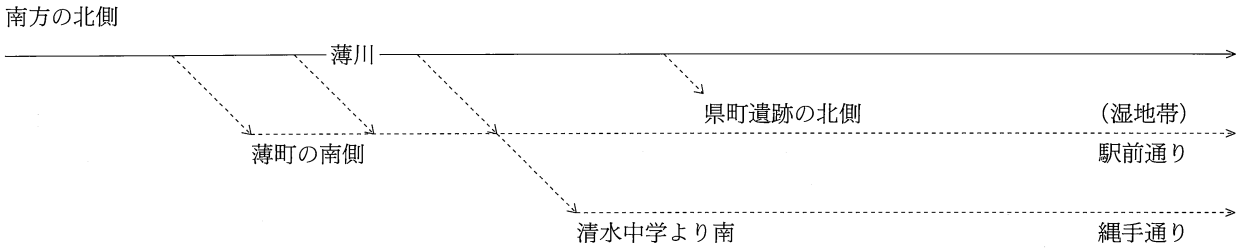
発掘地点の西側隅の微高地は、度重なる洪水にも削り残され、弥生の遺物が存在し、弥生時代この微高地は住居以外何等かの目的で使われた可能性がある。

礫の岩質

第三紀のフォッサマグナ堆積物とそれに貫入した火成岩類から成る筑摩山地を侵食、運搬してきた礫であるので、安山岩、玢岩、石英閃緑岩、石英斑岩、砂岩などであり、山地で多い泥岩はこの地点に達するまでに風化して土壌化している。泥岩についで風化しやすいのは、砂岩と安山岩であり、砂土やシルト質土層となっている。

居住地としての本遺跡について

薄川のような出水率の大きな河川は、洪水時土砂の流出が多いため、短年月のうちに天井川化し、より低いほうへ流路が移りこのため必然的に流路が首を振り、奈良時代以後の薄川主流を、今迄の県町遺跡の発掘調査や現在残っている微地形などから推定すると下記のようになり、度重なる洪水で土砂が堆積し自然堤防ができると、入山辺地区南方付近やそれより下流で流れを北側の流路に変え、県町遺跡の北側をかすめて、当時低湿地であった駅前通り付近で川幅を広げ、田川に流入することもあったとみられる。



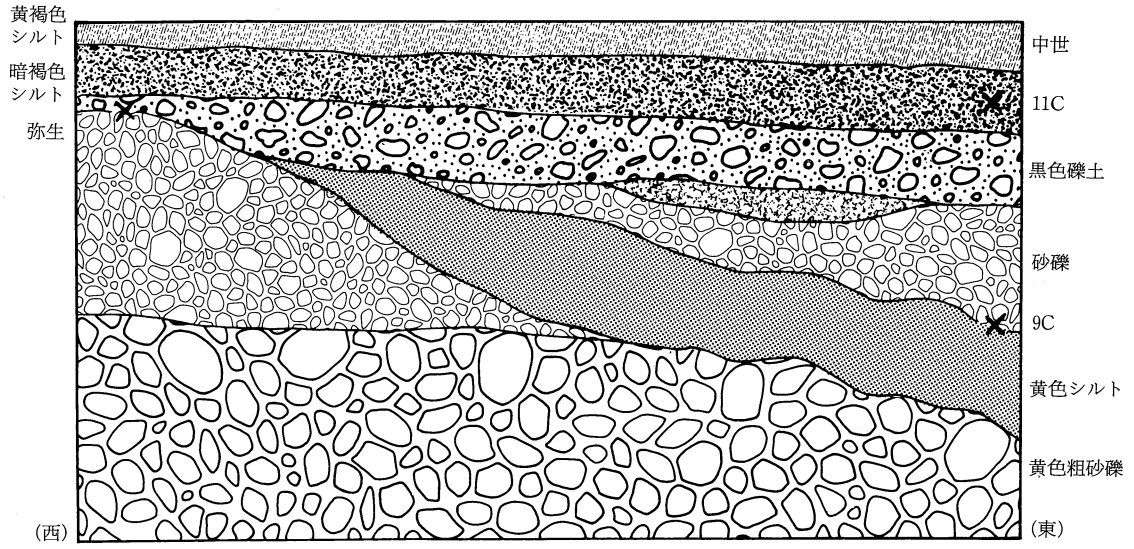
このような場合立地上県町遺跡は、大なり小なり洪水の洗礼を受けざるを得なかったことになる。このようにしばしば洪水の害のある所に、何故住居を作ったかという点については、

① 西に行く程低湿地で住居に適さないため。

② 近くに重要な役所？があり居住せざるを得なかった。

③ 数十年以上洪水の安定期があれば、被害の恐ろしさを忘れるため。

などいろいろ推定はできるが、②が気になるところである。



第１図　県町遺跡12次 土層概念図

第２節　歴史的環境

県町遺跡は、現在の行政区画では松本市県、中央、埋橋及び大字里山辺にかけて存在する遺跡である。

前節でも述べた通り、この地区の歴史を語る上で欠くことの出来ない要素として薄川がある。この薄川は、現在でこそしっかりした堤防によって治水されているが、古来より知られる暴れ川で、戦後にいたるまで氾濫を繰り返してきている。したがってこのあたりでは縄文時代及びそれ以前の遺跡はほとんど確認されていない。この上流の林城山西麓の林山腰遺跡では、縄文時代中期の集落が確認・調査されている。

弥生時代については、県町遺跡は著名な遺跡である。昭和54年度以降行われている11次にわたる調査の、主にあがたの森公園造成に伴うものからは住居址44軒の他、多くの遺構が確認されており、遺物の量も多く、この地域を代表する弥生時代の遺跡として知られている。今回の調査でも、薄川の影響を受けながらも、少しではあるが弥生時代の遺構・遺物が確認されている。

古墳時代には、律令制度以前の地方行政の首長としての県首（あがたのおびと）に関連すると考えられている県という地名に関わる可能性や、県塚古墳（１～２号）との関連について考える必要もあるが、現在までの調査では、当該期の住居址は４軒確認されているだけである。この地域の古墳時代を解明していく上では主要な遺跡であると考えられるわけであるが、不明な点が多いといわざるを得ない。

奈良・平安時代になると、この遺跡は緑釉陶器を多く出土する遺跡として知られてくる。本格的な調査は先述の昭和54年度まで行われないが、それ以前にも古くは大正期に、旧制松本高等学校や県ヶ丘高校（旧制松本二中）建設に伴って遺物が出土していることが知られ、その中には緑釉陶器も多く含まれている。また戦後には、松本県ヶ丘高校の校舎などの建替えに伴って緑釉陶器が出土している。調査によるものとしては、42軒の住居址、１軒の掘立柱建物址が確認されている。また県ヶ丘高校の西、大蔵省（現財務省）公務員宿舎建設に先立つ11次調査では風字硯の他、皇朝十二銭の一つ隆平永寶が出土している。こうしたことから、奈良・平安時代には、このあたりに有力な集落が存在していたことを示し、今回調査の結果出土した緑彩文陶などは、更にそれを裏付ける資料であるといえる。またこの地域の周辺には、古くから研究者によって信濃国府が存在したとされる推定地がいくつかあり、それとの関連についても考えていかなければならない遺跡であるといえる。

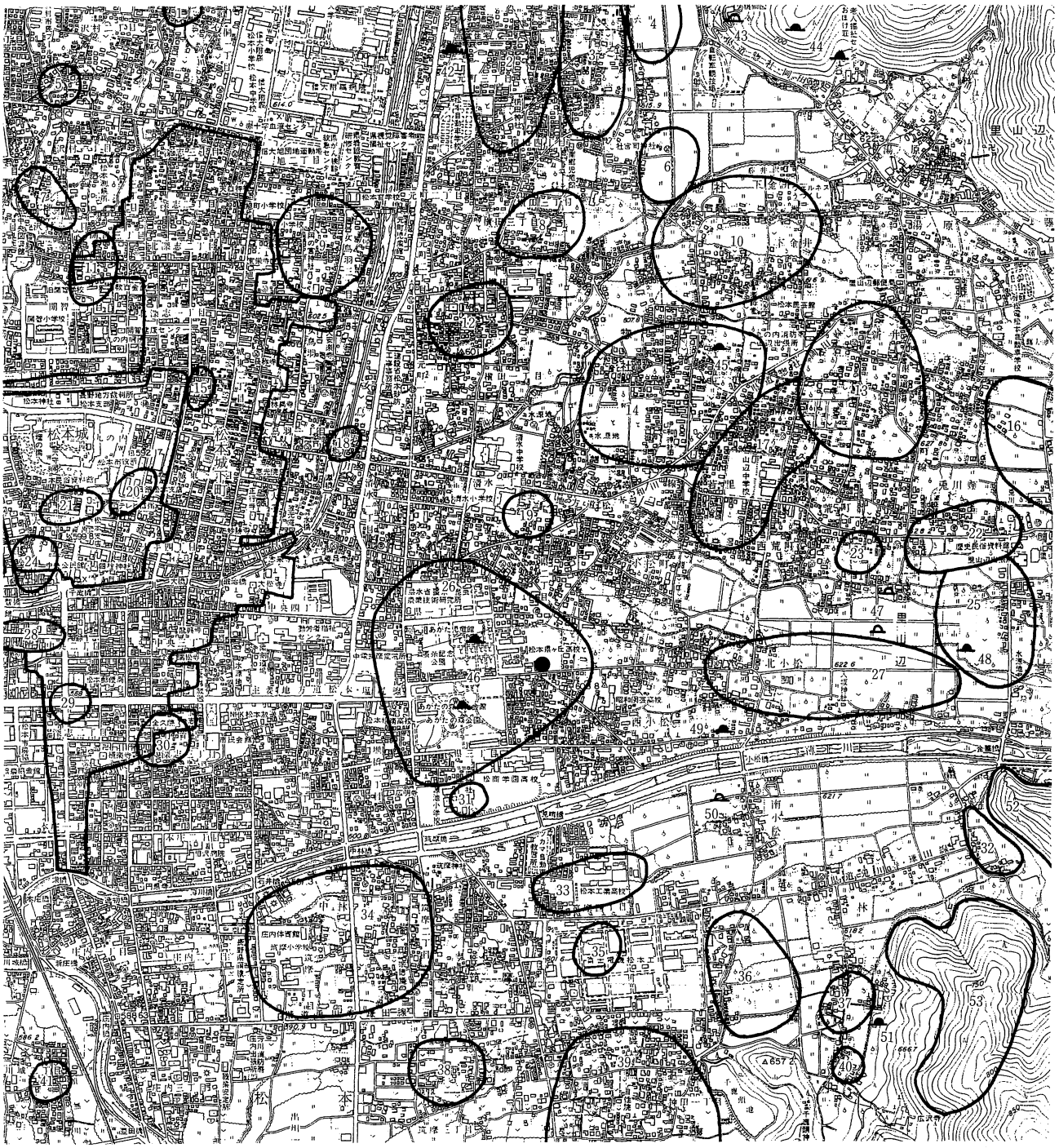
中世になると、律令制度の衰退とともに、古代には有力な集落であった県町も衰退していったと考えられている。鎌倉・室町時代については文書資料も少ないため、この辺りについての様相は不明な点が多い。しかし今回の調査では、建物址などの具体的な遺構こそ見つからないものの、渡来銭（北宋）や卸皿を出土する土坑などの他、区画溝とみられる直線状の溝も検出されていることから、後世の整地などによって多くは失われているが、中世においても何らかの形で生活の痕跡があったと考えられる。

近世以降、このあたりは松本藩領として、庄内組埋橋村に組み込まれる。この県の地名に関わるともされる県明神がこの村内の県塚（県塚１号古墳）を境内に含む形で置かれる。また県ヶ丘高校の北側には、通称お塚と呼ばれる、近世松本城主であった戸田家の廟所が造られており、現存している。

近代になり、この辺りは大正期には文教地区として変貌を遂げてくる。大正８年に旧制松本高等学校（信州大学の前身）が招致され、県明神は南に移転（現在地県３丁目４番）し、境内は県塚を除いて造成され、高校敷地に変わった。その造成に際して土師器などが出土したことは先に触れた。また大正12年に旧制松本第二中学校（現松本県ヶ丘高校）がその北東に建設された。この工事に際しても土器がたくさん出土しているようである。

戦後の学制改革により、旧制松本高等学校は信州大学となり、市内北部の旭へと移転した。その跡地は大学寮、旧校舎以外は空き地となっていたが、昭和54年にあがたの森公園として整備され、現在に至っている。またこれらの周辺は、松本市内郊外の住宅地として、宅地化が進んでいる。

参考文献：松本市 1993 『松本市史　－第二巻　歴史編１－』
：松本市 1993 『松本市史　－第四巻　旧市町村編１－』
：東筑摩郡 松本市 塩尻市 郷土資料編纂会　1973『東筑摩郡 松本市 塩尻市誌 第二巻 歴史上』

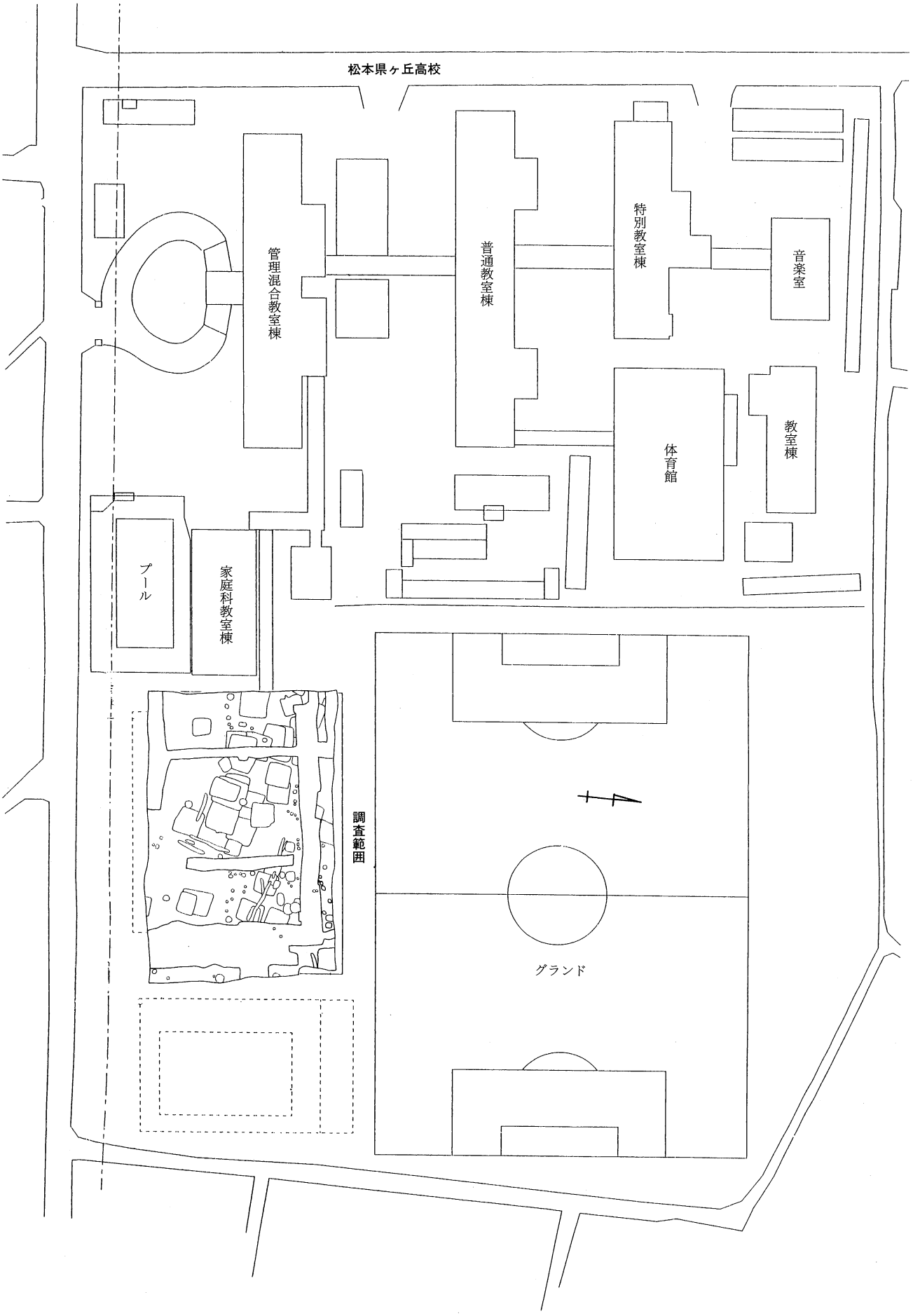


0　1000(m)

●印：今回調査地点

1：元原遺跡　2：大輔原遺跡　3：大村立石遺跡　4：大村前田遺跡　5：沢村北遺跡　6：塚田遺跡　7：沢村遺跡　8：横田遺跡
9：岡の宮遺跡　10：惣社遺跡　11：田町遺跡　12：横田古屋敷遺跡　13：新井遺跡　14：宮北遺跡　15：片端遺跡
16：堀の内遺跡　17：下原遺跡　18：女鳥羽川遺跡　19：四ッ谷遺跡　20：丸の内遺跡　21：大名町遺跡　22：兎川寺遺跡
23：荒町遺跡　24：土居尻遺跡　25：針塚遺跡　26：県町遺跡　27：北小松遺跡　28：伊勢町遺跡　29：本町南遺跡
30：天神西遺跡　31：埋橋遺跡　32：林山腰遺跡　33：筑摩北川原遺跡　34：筑摩遺跡　35：筑摩南川原遺跡
36：千鹿頭北遺跡　37：御符遺跡　38：三才遺跡　39：神田遺跡　40：林遺跡　41：小島遺跡　42：国司塚遺跡　43：桃仙園古墳
44：御母家(1～2)古墳　45：車塚古墳　46：県塚(1～2)古墳　47：大塚(1～2)古墳　48：針塚古墳　49：北川原古墳
50：巾上古墳　51：御符古墳　52：林城(大城)　53：林城(小城)

第2図　遺跡の位置と周辺遺跡


松本県ヶ丘高校
管理混合教室棟
普通教室棟
特別教室棟
音楽室
体育館
教室棟
プール
家庭科教室棟
調査範囲
グランド

第3図　調査範囲

第３章　調査結果

第１節　調査の概要

１　調査地

今回の調査地は松本市県２丁目１番１号の松本県ヶ丘高校の敷地内にある体育館予定地で、現況は旧体育館解体後の更地である。県町遺跡は、前述のとおり現在までに11次にわたる調査が昭和54年度以来おこなわれており、今回は第12次調査となる。調査対象は、新体育館の床面積1400㎡であるが、そのうち北側はグラウンド崩壊などの恐れがあるため、その部分を除いた約1200㎡について調査を実施した。

２　調査方法

今回の調査にあたっては、まず重機を使用して整地層を除去している。排土置き場の関係上西側と東側と２回に分けて掘り下げた。まだ若干の旧体育館の基礎捨石が残っていたため、それらを除去し、土層及び遺構確認のためのトレンチとした。東側部分では４面の生活面を確認し、日程の都合上全体ではないが、一部については掘り下げ、調査を実施した。西側部分は、一部２面の生活面を確認したが、遺構を明瞭に捉えることが困難であったため、グリッド調査を実施した部分もある。磁北を基準とし、全体図 のN、S、E、Wは方位を表す。また数字は基準点からの距離を示している。遺構番号は、住居址、掘立柱建物址については第11次調査の番号を継承し、竪穴状遺構、土坑、溝については12次調査ということで1201から付している。ピット、集石遺構、流路は１から付している。

３　遺構

住居址37軒、土坑49基、ピット69個、掘立柱建物址１棟、竪穴状遺構２基、集石遺構３ヶ所、溝址５条、流路址４条が検出されている。

住居址を含む多くの遺構が平安時代に属すると考えられるが、中世に属する遺構も確認されている。一部弥生時代の遺物が出土する遺構もみられる。土坑の用途については不明であるが、ゴミ穴的に使用されたとみられるものもある。ピットは、掘立柱建物址を構成するもの以外についての用途は不明である。流路は、薄川の氾濫及び一時的な本流とみられる。溝は、何らかの区画溝とみられる。

４　遺物

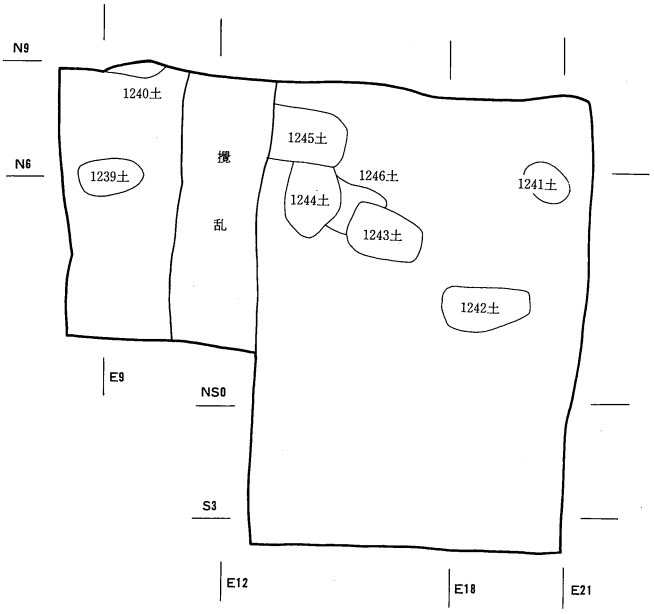
弥生時代から平安時代、中世にかけての遺物が出土している。弥生時代の遺物は、甕或いは台付甕を中心に、101住より出土がみられ、あがたの森公園造成に伴う調査によって確認されている弥生時代の遺構がこの辺りまで広がっていたことを示唆する資料となりうるものである。平安時代以降の遺物は、土器・陶磁器では須恵器・土師器・黒色土器・灰釉陶器の杯・椀といった食膳具、土師器甕・小型甕・甑といった煮炊具、また緑釉陶器、白磁といった高級陶磁器片が出土している。金属製品は、北宋からの渡来銭を主体とした銅銭、苧引金具、紡錘車といった生活具、また刀子、釘、鉄鏃が出土している。石器では磨製石鏃などがみられる。特殊遺物としては緑彩文陶、緑釉陶器三足盤、白磁といった高級陶磁器の他、水晶製銙帯、風字硯といった官衙などに関連するとみられる遺物が出土している。

５　基本土層（62ページ第24図：東トレンチ西面、136住周辺部分）

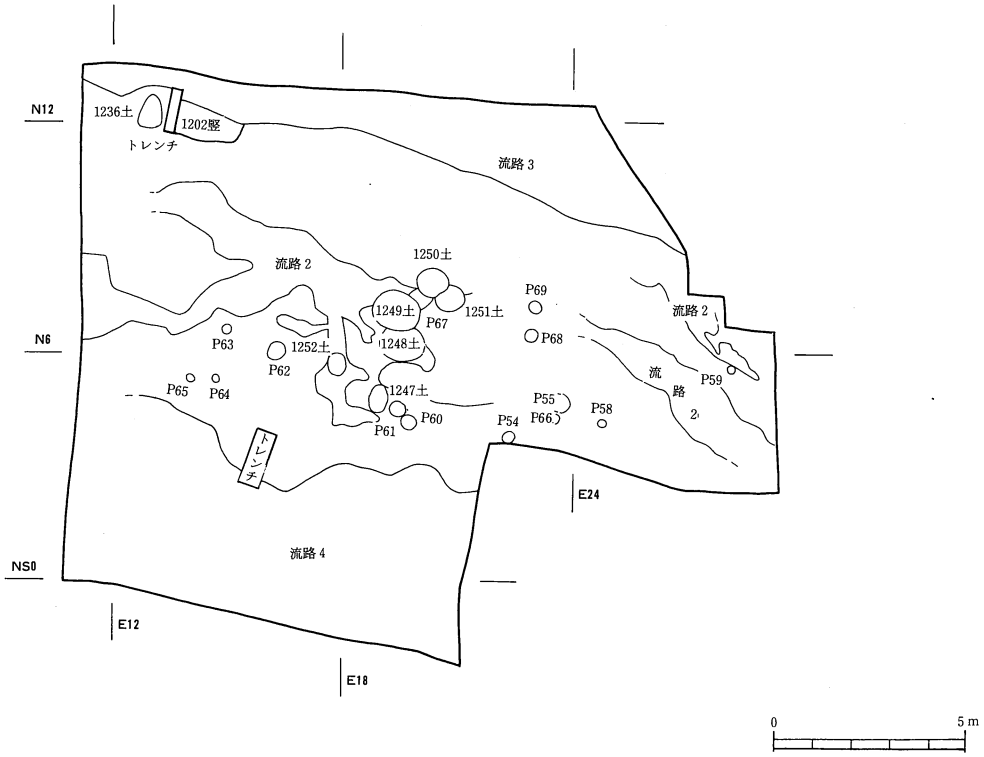
地形・地質については前述したが、本調査区の表土下は、全面ではないがよく締まった黄褐色砂質土（Ⅰ）が堆積しており、ここに中世の遺構が存在する（第１検出面）。Ⅰ層下部からは134住などの遺構が検出されている。その下層は礫層（XⅢ）或いは暗褐色粘質土の面が広がり、平安時代の他、一部洪水の直撃を免れた弥生時代の面が残存する（第２検出面）。礫層は薄川の影響とみられ、何層か（IX、XⅠ、XⅡ、XⅢ他）に分かれる。そのうち北西部において、２層みられるうちの下の礫層（XⅡ）上面には、平安時代末の遺構が存在する（第３検出面）。北西部の、礫層下にある黄褐色砂質土層（XⅣ）の上面には平安時代前期の遺構が存在する（第４検出面）。全般的に薄川流路の影響を強く受けており、その結果、一部では古い時代の遺構が上層から確認され、新しいものが下層から確認されるという、通常とは異なる遺構検出が行われた要因となっている。

第４図　遺構配置図(第１・２面)　S＝1:200

第 3 面



第 4 面



第 5 図　遺構配置図(第 3 ・ 4 面)　S＝1:200

第２節　遺構

１　竪穴住居址（第６～11図、第１表）

第99号住居址（第６図）

北地区で検出した。南側の大半は撹乱によって消滅している。ピット、カマドは確認できなかった。床面は暗褐色粘質土で硬く締まっている。壁は北側でよく残存し、やや緩やかに立ち上がる。覆土中には、礫がまとまった形でみられる。遺物は黒色土器杯・椀・小型甕、灰釉陶器皿・段皿、須恵器壺がみられた。本址の時期は、遺物から判断して古代７期、９世紀中頃の平安時代前期に属すると考える。

第100号住居址（第６図）

北地区で検出した。北側は調査区外にかかり、東及び南側は撹乱によって消滅している。ピット、カマドは確認できなかった。床面は黄褐色砂質土で硬くない。壁は西側の一部で残存しほぼ垂直に立ち上がる。遺物は少ないが黒色土器杯・椀がみられた。本址の時期は、遺物から判断して古代８期、９世紀後半の平安時代前期に属すると考える。

第101号住居址（第６図）

西地区南部で検出した。ピットは３個確認したがいずれも掘り込みは浅く、柱穴とは考えない。床面は茶褐色砂質土であまり硬くなく、２ヶ所のテラス状部分がある。壁は緩やかに立ち上がる。遺物は少ないがピット中より弥生土器甕或いは台付甕が２点出土している。本址の時期は、遺物から判断して弥生時代中期末に属すると考えるが、炉が確認できないため住居址ではない可能性がある。

第102号住居址（第６図）

西地区中央部で検出した。ピット、カマドは確認できなかった。床面は暗褐色砂質土で硬く締まっている。覆土上層で人頭大の礫がまとまってみられたため、当初は２軒の切り合いであると考えたが、遺物の時期などから１軒と判断した。壁はよく残存し、ほぼ垂直に立ち上がる。遺物としては、土師器、黒色土器の杯・椀といった食膳具の他、土師器の甕・小型甕といった煮炊具、貯蔵具がみられ、図化し得たものだけで31点を数える。本址の時期は、遺物から判断して古代８期、９世紀後半の平安時代前期に属すると考える。

第103号住居址（第６図）

西地区南部で検出した。本址の北側は大半が撹乱によって消滅しており、ピット、カマドは確認できず、またプランも不鮮明である。床面は黄褐色砂質土で硬くない。壁は南側の一部でやや緩やかに立ち上がる。遺物は少ないが須恵器杯Ａなどがみられた。本址の時期は、遺物から判断して古代７期、９世紀中頃の平安時代前期に属すると考える。

第104号住居址（第７図）

西地区北部で検出した。本址の東側中央部にて石組粘土カマドを確認したが、一部撹乱を受けており全容は不明である。ピットは確認できない。床面は黄褐色粘質土で硬く、貼り床となっている。壁は緩やかに立ち上がる。覆土中には、礫がまとまった形でみられる。遺物はあまり多くないが、土師器椀、須恵器杯等の食膳具の他、鉄釘、また特殊なものとして緑彩文陶底部が出土している。本址の時期は、遺物及び切り合い関係から判断して古代７期、９世紀中頃の平安時代前期に属すると考える。

第105号住居址（第６図）

西地区北部で検出した。ピットは確認できない。カマドは西壁中央より検出した粘土カマドであるが、残存状態はあまり良好ではない。床面は黄色粘質土で貼り床となっており硬い。壁はよく残存し、やや緩やかに立ち上がる。遺物としては、黒色土器杯・椀、灰釉陶器椀・皿、須恵器杯・蓋、土師器甕・小型甕がみられた。本址の時期は、遺物から判断して古代７期、９世紀中頃の平安時代前期に属すると考える。

第106号住居址（第７図）

西地区北部で検出した。西側の大半は調査区外で、東側の一部のみを確認した。ピットは１個確認したが柱穴と判断できない。カマドは確認することはできなかった。床面は黒褐色粘質土で硬く締まっている。壁はよく残存し、やや緩やかに立ち上がる。遺物はほとんどみられない。本址の時期は判然とせず、切り合い関係から判断して古代７期以降、９世紀中頃の平安時代前期以降に属する遺構であるとしかいえない。

第107号住居址（第７図）

西地区東部で検出した。ピット、カマドは確認できなかった。当初は２軒の住居址に分かれると考えたが、プラン及び遺物から１軒であると判断した。覆土は２層に分かれる。床面は焼土粒、炭化物混じりの茶褐色砂質土で硬い。壁はよく残存し、やや緩やかに立ち上がる。遺物は土師器杯・椀・盤、黒色土器椀、灰釉陶器段皿といったものがみられる。本址の時期は、遺物から判断して古代13期、11世紀中頃の平安時代後期に属すると考える。

第109号住居址（第８図）

中央地区中央部で検出した。ピットは確認できなかった。カマドは西壁北隅の石組粘土カマドでよく残存している。壁はよく残存し、緩やかに立ち上がる。床面は暗茶褐色砂質土であまり硬くない。一面に炭化材が多量にみられるため焼失した住居である可能性がある。遺物としては黒色土器杯・椀、軟質須恵器杯、灰釉陶器皿、土師器甕がみられた。本址の時期は、遺物から判断して古代８期、９世紀後半の平安時代前期に属すると考える。

第110号住居址（第９図）

中央地区北部で検出した。全体的に大形の礫が存在する。ピットは２個確認したが、いずれも柱穴と判断できない。カマドは石組粘土カマドが東壁中央で確認された。またそれに伴う焼土が全面に存在する。床面は茶褐色砂質土で硬く締まっている。壁はよく残存し、ほぼ垂直に立ち上がる。遺物は多く、黒色土器杯・椀・鉢、須恵器杯、軟質須恵器杯、土師器鉢・甕がみられた。本址の時期は、遺物から判断して古代７期、９世紀中頃の平安時代前期に属すると考える。

第111号住居址（第８図）

中央地区中央部で検出した。ピットは３個確認され、その位置から柱穴とみられる。カマドは西壁中央で確認した粘土カマドであるが、焼土範囲が確認できる程度である。床面は暗茶褐色粘質土で硬い。壁はよく残存し、やや緩やかに立ち上がる。遺物は、土師器甕、須恵器杯・蓋、灰釉陶器椀、また東海系施釉陶器がみられた。本址の時期は、遺物から判断して古代７期、９世紀中頃の平安時代前期に属すると考える。

第113号住居址（第７図）

中央～中央西地区北部で検出した。本址中央部は撹乱によって消滅している。ピットは１個確認したのみで、柱穴と判断できない。カマドは確認できなかったが、東壁中央部床面に焼土の広がりがみられるため、この部分に存在した可能性はある。床面は黄褐色砂質土でやや硬く、床下から土坑２基を検出した。壁はよく残存し、ほぼ垂直に立ち上がる。遺物は少ないが、黒色土器杯・椀、須恵器杯がみられた。本址の時期は、遺物から判断して古代７期、９世紀中頃の平安時代前期に属すると考える。

第114号住居址（第９図）

中央地区北部で検出した。ピットは１個確認したが、柱穴と判断できない。カマドは東壁中央で確認された石組粘土カマドである。覆土中には、大形の礫が含まれる。床面は暗褐色砂質土で硬い。壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺物は黒色土器杯・皿、須恵器杯・甕がみられた。本址の時期は、遺物から判断して古代７期、９世紀中頃の平安時代前期に属すると考える。

第115号住居址

西地区、104号住居址の周辺において遺物の散布及びカマドと考えられる焼土範囲を確認したため、これを住居址と考えた。しかし遺構として捉えることはできず、欠番とした。遺物として土師器杯が出土している。104住上面に異なる時期の、古代14～15期、11世紀末～12世紀の平安時代後期に属する遺構が存在したとみられる。

第116号住居址（第８図）

中央地区中央部で検出した。ピットは確認できなかった。カマドも確認できなかったが、東壁中央部に焼土範囲が存在することから、それがカマド残痕である可能性がある。床面は茶褐色砂質土で硬く締まっている。壁はあまり残存せず、緩やかに立ち上がる。遺物は、土師器杯・甕、須恵器長頸壷、軟質須恵器杯、灰釉陶器椀、また土師器円筒型土器がみられた。本址の時期は、遺物から判断して古代８期、９世紀後半の平安時代前期に属すると考える。

第117号住居址（第８図）

中央地区中央部で検出した。ピットは確認できなかった。カマドは東壁中央で確認した石組粘土カマドで残存状況は良い。覆土中には人頭大の礫がまとまった形で含まれる。床面は黄褐色粘質土で硬く、貼り床となっている。床下にはピットがみられる。壁はよく残存し緩やかに立ち上がる。遺物は多く、土師器甕・小型甕・円筒型土器、黒色土器杯・皿・椀・鉢、須恵器杯・蓋・椀・甕で、図化し得るものだけで40点を数える。金属製品では紡錘車、苧引具がみられる。特殊遺物として緑釉陶器三足盤脚部が貼り床下から出土している。本址の時期は、遺物から判断して古代７期、９世紀中頃の平安時代前期に属すると考える。

第118号住居址（第７図）

中央地区東部で検出した。ピット、カマドは確認できない。床面は小礫混じりの褐色砂質土で硬い。壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺物は土師器小型甕、黒色土器椀、須恵器杯、灰釉陶器椀がみられる。本址の時期は、遺物から判断して古代７期、９世紀中頃の平安時代前期に属すると考えられる。

第119号住居址（第８図）

中央地区中央部で検出した。ピット、カマドは確認できなかった。床面は小礫混じりの茶褐色粘質土で硬い。壁は緩やかに立ち上がる。遺物は多くないが、土師器杯・甑がみられる。本址の時期は、遺物から判断して古代14期前後、11世紀後半の平安時代後期に属すると考える。

第120号住居址（第７図）

中央地区東部で検出した。ピットは５個確認され、そのうちのP_1、P_3、P_4、P_5の４個は、その位置からみて柱穴であると考えられる。カマドは確認できなかった。床面は茶褐色砂質土で硬い。壁はほとんど残存せず、緩やかに立ち上がる。遺物はほとんどみられない。本址の時期は、遺物から判断できず判然としない。

第121号住居址（第10図）

中央地区南部で検出した。ピットは５個確認したが、いずれも柱穴と判断できない。カマドは東壁北隅で検出された粘土カマドであるが、残存状態は良好ではない。覆土中には礫がまとまった形で多く含まれる。床面は暗褐色砂質土で硬い。壁はあまり残存しない。遺物は、土師器杯・椀・甕・壷、灰釉陶器椀がみられる。本址の時期は、遺物から判断して古代15期、12世紀前半の平安時代後期に属すると考える。

第122号住居址（第９図）

中央地区西部で検出した。西側の一部は撹乱により消滅している。ピットは２個確認したが、柱穴かどうかは不明である。カマドは東壁中央で確認した石組粘土カマドである。床面は一部が暗褐色粘質土の貼り床となっている他は黄褐色砂質土で硬く締まっている。壁はあまり残存せず緩やかに立ち上がる。遺物は多く、土師器甕・小型甕、黒色土器杯・椀・皿・鉢、須恵器杯・長頸壷、土師器円筒型土器で、図化し得るものだけで32点を数える。金属製品では刀子がある。本址の時期は、遺物から判断して古代７期、９世紀中頃の平安時代前期に属すると考える。

第123号住居址（第10図）

中央～中央西地区北部で検出した。本址中央部は撹乱によって消滅している。ピットは確認されなかった。カマドは西壁中央で確認された石組粘土カマドである。床面は茶褐色砂質土で硬い。壁はあまり残存しないが、ほぼ垂直に立ち上がる。遺物は土師器甕、黒色土器杯・椀・皿、須恵器長頸壷の他鉄鏃がみられる。本址の時期は、遺物から判断して古代７期、９世紀中頃の平安時代前期に属すると考える。

第124号住居址（第11図）

北西地区で検出した。南側の大半は撹乱により消滅している。ピット、カマドは確認できなかった。床面は茶褐色砂質土でやや硬い。壁はよく残存し、ほぼ垂直に立ち上がる。遺物はほとんどみられない。本址の時期は、遺物から判断できず判然としない。

第125号住居址（第11図）

北西地区で検出した。南側の大半は撹乱により消滅している。ピット、カマドは確認できなかった。床面は暗褐色砂質土でやや硬い。壁はよく残存し、ほぼ垂直に立ち上がる。遺物は少ないが、黒色土器杯・椀がみられた。本址の時期は、遺物から判断して古代７～８期、９世紀後半の平安時代前期に属すると考える。

第126号住居址（第10図）

中央地区中央部で検出した。東側の一部が調査区外にかかる。ピット、カマドは確認できなかった。覆土中には、中央部に人頭大の礫がまとまった形で存在する。床面は地山の暗褐色礫層で硬い。壁はあまり残存しないが、ほぼ垂直に立ち上がる。遺物は少ないが、土師器杯・椀、黒色土器杯・椀等がみられる。本址の時期は、遺物から判断して古代８期、９世紀後半の平安時代前期に属すると考える。

第127号住居址（第９図）

西地区東部で検出した。東側の一部は撹乱により消滅している。ピット、カマドは確認できなかった。床面は茶褐色砂質土及び一部地山の礫層で硬い。壁はあまり残存しない。遺物は少ないが、土師器杯・小型甕、須恵器杯Ａ等がみられた。本址の時期は、遺物から判断して古代８期、９世紀後半の平安時代前期に属すると考える。

第128号住居址（第10図）

中央東地区南部で検出した。ピット、カマドは確認できなかった。覆土上層には礫がまとまって存在している。床面は地山の暗褐色礫層で硬い。壁はあまり残存せず緩やかに立ち上がる。遺物は少ないが土師器甕、黒色土器皿がみられた。本址の時期は、遺物及び切り合い関係から判断して古代８期、９世紀後半の平安時代前期に属すると考える。

第129号住居址（第10図）

中央東地区南部で検出した。ピットは３個確認され、そのうちP_1、P_2がその位置などから柱穴とみられる。カマドは東壁中央部にある石組粘土カマドであるが残存状態は良好ではない。床面は暗褐色砂質土で硬い。壁はあまり残存せず、緩やかに立ち上がる。遺物は土師器杯・甕、黒色土器杯、須恵器杯、軟質須恵器杯の他、特殊品として紫水晶

製銙帯（巡方）がある。本址の時期は、遺物から判断して古代７期、９世紀中頃の平安時代前期に属すると考える。

第130号住居址（第10図）

中央東地区西部で検出した。ピット、カマドは確認できない。床面は暗褐色砂質土で硬い。壁はよく残存し、緩やかに立ち上がる。遺物はほとんどみられないが、渡来銭（熙寧元寶）が出土している。本址の時期は、遺物から判断できず判然としないが、中世に属するものの可能性がある。

第131号住居址（第11図）

中央東地区東部で検出した。東側の一部は撹乱により消滅している。ピットは４個みられたが、いずれも柱穴と判断できない。カマドは確認できなかった。床面は黄褐色砂質土で硬い。壁はよく残存し、やや緩やかに立ち上がる。遺物はほとんどみられない。本址の時期は、遺物から判断できず判然としない。

第132号住居址（第10図）

中央東地区南端で検出した。南側の大半は調査区外にかかる。ピットは１個確認したが、柱穴と断定できない。カマドは確認できなかった。床面は暗茶褐色砂質土でやや硬い。壁はよく残存し、やや緩やかに立ちあがる。遺物はほとんどみられない。本址の時期は、遺物から判断できず判然としない。

第133号住居址（第10図）

西地区北部で検出した。北側の大半は撹乱により消滅している。ピット、カマドは確認できない。床面は暗褐色粘質土でやや硬い。壁はほとんど残存しないが、ほぼ垂直に立ちあがる。遺物は少なく、黒色土器杯等が若干みられる。本址の時期は、遺物から判断できず判然としない。

第134号住居址（第11図）

中央東地区東側で検出した。ピットは３個確認したが、位置及び規模からみて柱穴とは考えられない。またカマドは確認できなかった。床面は茶褐色粘質土で硬く締まっている。壁はよく残存し、やや緩やかに立ち上がる。遺物は少なく、須恵器杯蓋Ｂ等が若干みられたが混入と考える。本址の時期は遺物のみから判断しがたい。

第135号住居址（第10図）

中央東地区西側で検出した。西側の一部は撹乱により消滅している。ピット、カマドは確認できない。床面は暗褐色砂質土及び一部地山の礫層で硬い。壁は、残存部ではしっかりとした垂直な立ち上がりを確認した。遺物は少ないが、土師器杯、朱墨痕のある灰釉陶器椀、また金属製品として刀子がみられた。本址の時期は、遺物が少ないため判然としないが、古代14期前後、11世紀後半の平安時代後期に属すると考える。

第136号住居址（第11図）

中央東地区東部で検出した。東側の大部分は撹乱により消滅している。ピットは確認できない。カマドも大半が消滅しているが、西壁中央部にある石組粘土カマドで、芯石は１個残存している。床面は茶褐色砂質土で硬い。壁は緩やかに立ち上がる。遺物は少ないが、土師器甕がみられた。本址の時期は、遺物から判断できず判然としない。

第137号住居址（第11図）

中央地区北西隅で検出した。撹乱により南東部のみ残存する。ピット、カマドは確認できない。床面は暗褐色粘質土で硬く締まっている。壁は緩やかに立ち上がる。遺物は少ない。本址の時期は、遺物から判断できず判然としない。

2　掘立柱建物址（第11図）

第３号掘立柱建物址

４面で検出した。黄褐色砂質土の地山を掘り込む。切り合い関係は1249、1250土に切られる。東西１間（292～304cm）×南北１間（274～304cm）の建物址である。柱穴のうちP_1（P67）からは、底部から礎板（石）が確認された。遺物の出土はみられないため本址の時期は判然としないが、検出面より判断して古代７～８期、９世紀後半の平安時代前期に属すると思われる。

3　土坑（第12・13図、第４表）

今回の調査では49基の土坑を検出した。しかし、用途、時期を判断できるものは少ないが、いくつかからは遺物の出土もみられる。ここでは、遺物を伴うもの、時期・用途について考えうるものの数個について述べていく。３面の土坑は、平安時代の遺物がみられるが、中世に属する可能性を有する。

第1203号土坑（第13図）

中央地区西部で検出した。黄褐色砂質土の地山を掘り込む。他遺構との切り合い関係はない。遺物の出土はみられなかった。本址の時期は、遺物を伴わないため判断しがたいが、中世以降に属する可能性がある。

第1204号土坑（第13図）

中央地区西部で検出した。黄褐色砂質土の地山を掘り込む。他遺構との切り合い関係は122住を切る。覆土中には礫がまとまった形で多く出土しているが用途については明らかではない。遺物は土師器小型甕、須恵器杯などがみられるが、混入と考える。本址の時期は検出面から判断して中世以降に属すると考える。

第1211号土坑（第13図）

中央地区東部で検出した。黄褐色砂質土の地山を掘り込む。他遺構との切り合い関係はないが、1201溝と1202溝に挟まれて存在する。出土遺物はみられず、また用途についても不明であるが、覆土も２つの溝と同質であることから、これらの溝に関連する可能性がある。本址の時期は判然としないが、中世以降に属すると考えられる。

第1221号土坑（第13図）

中央地区北東部で検出した。他遺構との切り合い関係は流路１を切る。黄褐色砂質土の地山を掘り込む。遺物として、土師器杯、黒色土器椀等が出土している。本址の時期は遺物のみから判断できないが、切り合い関係から判断して、中世以降に属すると考える。

第1222号土坑（第12図）

西地区東部で検出した。他遺構との切り合い関係は104住を切る。遺物として、白磁の小壺が１点出土している。本址の用途については明らかではない。本址の時期は、遺物のみから特定することは難しい。

第1223号土坑（第13図）

中央東地区北部で検出した。黄褐色砂質土の地山を掘り込む。他遺構との切り合い関係はない。遺物としては「真」字刻書のある緑釉陶器杯１点の他、鉄釘が出土している。本址の時期については遺物が少ないため判然としないが、中世以降に属する可能性がある。

第1225号土坑（第13図）

中央東地区北部で検出した。黄褐色砂質土の地山を掘り込む。他遺構との切り合い関係はない。掘り込みも浅く、遺構としては判然としないが、出土遺物として渡来銭の熙寧元寶、元符通寶がみられる。本址の時期は、遺物から判断して中世以降に属すると考える。

第1226号土坑（第12図）

中央東地区北部で検出した。黄褐色砂質土の地山を掘り込む。他遺構との切り合い関係は1227土、1229土を切る。底面に一段低くピット状の落ち込みがある。覆土中には焼土が含まれる。遺物としては東海系施釉陶器の卸皿等の他、鉄釘がみられる。用途はゴミ穴の可能性がある。本址の時期は、中世１～２期、15世紀の室町時代に属すると考える。

第1228号土坑（第13図）

中央東地区北部で検出した。他遺構との切り合い関係は1230土、1206溝、流路１に切られる。黄褐色砂質土の地山を掘り込む。遺物は、黒色土器Ａの小型甕等が出土している。時期は遺物のみから判断できず不明であるが、周辺の土坑と同様、中世以降に属する可能性がある。

第1242号土坑（第13図）

３面で検出した。灰褐色砂質土の地山を掘り込む。他遺構との切り合い関係はない。この面で検出した土坑の中では最大の規模であるが、用途は不明である。遺物として、渡来銭である明道元寶が１点出土している。本址の時期は、遺物から判断して中世以降に属すると考える。

第1243号土坑（第13図）

３面で検出した。４基連なって確認されたうちの１つで、他遺構との切り合い関係は1246土を切る。灰褐色砂質土の地山を掘り込む。北西隅部分に焼土範囲がみられたが、用途は不明である。遺物は、土師器杯等がみられた。本址の時期は、遺物から判断して古代11～12期、10世紀後半から11世紀始めの平安時代後期以降に属すると考える。

第1244号土坑（第13図）

３面で検出した。４基連なって確認されたうちの１つで、他遺構との切り合い関係は1246土を切り、1245土に切られる。灰褐色砂質土の地山を掘り込む。用途は不明である。遺物は、土師器盤、灰釉陶器椀等がみられた。本址の時期は、遺物から判断して、古代11～12期、10世紀後半から11世紀始めの平安時代後期以降に属すると考える。

第1246号土坑（第13図）

３面で検出した。４基連なって確認されたうちの１つで、他遺構との切り合い関係は1243土、1244土に切られる。灰褐色砂質土の地山を掘り込む。用途は不明である。遺物は少なく、土師器小型甕等がみられる。本址の時期は、遺物から判断できず判然としないが、切り合い関係から古代11期、10世紀後半の平安時代後期以降に属すると考える。

4　ピット

今回の調査では69個のピットを検出した。しかし、建物址を構成するもの（P67、P68、P54、P61）の他は用途、時期の判明できるものは少ない。P69からは、第２号掘立柱建物址のP_1（P67）でみられたものと同様の礎板（礎石）が出土しているため、これは、建物址の一部である可能性がある。その他は、いくつかから遺物の出土がみられたものの、意図的に埋設したとみられるものはなく、用途について明らかにできるものはない。

5　竪穴状遺構（第11図、第２表）

第1201号竪穴状遺構

中央東地区東部で検出した。黄褐色砂質土の地山を掘り込み、床面は平坦で硬い。また、貼り床となっている。ピット等の施設はみられない。壁はよく残存し、やや緩やかに立ち上がる。遺物はほとんどみられない。本址の時期、用途は不明であるが、中世の遺構である可能性がある。

第1202号竪穴状遺構

４面で検出した。黄褐色砂質土の地山を掘り込み、床面は平坦で硬い。ピット等の施設はみられない。壁はよく残存し、ほぼ垂直に立ち上がる。遺物はほとんどみられない。本址の時期は判然としないが、検出面から判断して古代７～８期、９世紀後半の平安時代前期と思われる。用途については不明である。

6　集石遺構

中央地区で３ヶ所検出した。いずれも黄褐色砂質土の地山を掘り込み、径５～20cmの礫がみられる。床面は平坦で硬いが内部施設はみられない。壁はほとんど残存しない。遺物はいずれからも出土していない。これらの時期は、切り合い関係などから判断して古代８期以降、すなわち９世紀後半以降であるとしかわからない。用途も不明である。

7　溝址・流路址（第11、13図、第３表）

第1201、1202号溝址（第13図）

両者とも中央地区南東部で検出した。ほぼ平行に掘り込まれ、間に1211土がある。幅はいずれも概ね45cm前後で一定しており、両岸とも壁は硬いことから人工の溝と考える。覆土は灰褐色砂質土の単層である。用途については特定できないが、流水痕がみられないことから、区画溝等であった可能性はある。遺物はみられない。両者の時期は、遺物から判断できないため不明であるが、中世の遺構である可能性がある。

第1203号溝址（第11図）

中央地区中央部で検出した。幅は概ね40cm前後で一定しており、両岸とも壁は硬いことから人工の溝と考える。

土師器杯Ａが１点出土しているが混入の可能性がある。覆土は灰褐色砂質土で単層である。用途については特定できないが、流水痕がみられないことから区画溝等であった可能性はある。遺物はみられない。本址の時期は判然としないが、1201、1202溝と直交方向にあたることからそれらと同様、中世の遺構である可能性がある。

第1204号溝址

中央地区北部で検出したが、流水痕があることから、流路１とし、欠番とした。

第1205号溝址（第11図）

中央地区中央部で検出した。幅は概ね40cm前後で一定しており、両岸とも壁は硬いことから人工の溝と考える。覆土は黄褐色砂質土で単層である。用途については特定できないが、流水痕がみられないことから区画溝等であった可能性はある。遺物はみられない。本址の時期は遺物から判断できないため不明であるが、1201、1202溝と直交方向にあたることからそれらと同様、中世の遺構である可能性がある。

第1206号溝址（第11図）

中央東地区北部で検出した。流路１から分岐する形で確認された。幅は概ね40cm程度で一定し、また両岸とも硬いことから人工溝と考えた。覆土は黄褐色砂質土である。遺物はみられない。本址の用途及び時期は不明である。

流路（第11図）

大きくは４条確認した。１面での流路１は、1203、1204溝と同間隔で平行に存在するため、元来はそれらと同様人工溝であった可能性もある。４面の流路２は、同じ４面の流路４からのオーバーフローであると考えられ、幾つかに分流したものが確認されている。流路３は、ある時期に薄川が大きく氾濫した流れの１つであると考える。流路４も同じく薄川からの、一時期的な流れの跡と考える。この他にも、図化していないが、１面において南東から北西にかけて、流路と考えられる礫面が広がっている。

第1表　住居址一覧表

（）：推定、〈〉：残存

住居No.	図	平面形	規模 長軸×短軸×深さ(cm)	規模 床面積(m²)	主軸方向	カマド 位置	カマド 種類	ピット	時期	備考
99	6	隅丸方形か	272×(112)×22	〈1.56〉	N-7°-E	不明	不明	－	9C中 平安前	100住に切られる　南側撹乱
100	6	不明	〈364〉×〈196〉×32	〈5.44〉	不明	不明	不明	－	9C後 平安前	99住を切る　北側調査区外　南及東側撹乱
101	6	隅丸方形	306×280×16	6.64	N-1°-E	なし	－	3	弥生中	住居址ではない可能性有
102	6	方形か	432×(402)×37	〈15.14〉	N-85°-W	不明	不明	－	9C後 平安前	西側調査区外
103	6	不明	302×〈108〉×5	〈2.47〉	N-5°-W	不明	不明	－	9C中 平安前	北側撹乱　床面一部残存
104	7	長方形	〈348〉×285×12	〈7,30〉	N-107°-E	東壁中央	石組粘土	－	9C中 平安前	113住を切る　123住に切られる　東側撹乱
105	6	方形か	400×〈360〉×16	〈8.85〉	N-89°-W	西壁中央	粘土	－	9C中 平安前	133住を切る　106住に切られる　北側撹乱
106	7	方形か	〈164〉×〈105〉×5	〈0.82〉	N-73°-W	不明	不明	1	9C後～平安	105住を切る　西側調査区外
107	7	長方形	272×232×11	5.08	N-5°-W	なし	－	－	11C後 平安後	
108	－	－	－	－	－	－	－	－	－	欠番
109	8	長方形	436×318×24	10.23	N-67°-W	北西隅	石組粘土	－	9C後 平安前	111、116住を切る　1210土、P3、4に切られる
110	9	方形	376×344×16	9.82	N-100°-E	東壁中央	石組粘土	2	9C中 平安前	114住を切る
111	8	方形	394×372×18	11.45	N-67°-W	西壁中央	不明	3	9C中 平安前	109、116住、集石1、P5に切られる床面は残存
112	－	－	－	－	－	－	－	－	－	欠番
113	7	長方形か	256×(156)×15	〈5.78〉	N-104°-E	東壁中央	不明	－	9C中 平安前	133住を切る　104住に切られる　中央部撹乱
114	9	方形	396×348×13	10.61	N-102°-E	東壁中央	石組粘土	1	9C中 平安前	110住に切られる　床面は残存
115	－	－	－	－	－	不明	不明	－	11C後 平安後	欠番　遺構である可能性は高い
116	8	長方形か	488×〈184〉×10	〈4.66〉	N-111°-E	東壁か	不明	－	9C後 平安前	111、117住を切る　109住、1210土、集石1、P3、4に切られる
117	8	方形	470×456×21	15.21	N-111°-E	東壁中央	石組粘土	－	9C中 平安前	118住を切る　116住、1209、1210、1218土に切られる
118	7	方形	416×388×20	(12.03)	N-111°-E	東壁中央	粘土か	－	9C中 平安前	117、119、120住、1203溝、P14に切られる
119	8	方形	370×348×8	(11.84)	N-13°-E	なし	－	－	11C後 平安後	118、126住を切る　1207、1208土、P6に切られる
120	7	長方形	254×212×5	4.33	N-5°-E	なし	－	4	不明	118住を切る　P15、16、17、18、1202溝に切られる
121	10	方形	402×388×8	13.12	N-104°-E	北東隅	粘土	5	12C前 平安後	集石2、1201、1205溝に切られる
122	9	方形か	388×〈280〉×24	〈6.31〉	N-27°-E	東壁中央	石組粘土	－	9C中 平安前	123住、1204土に切られる　西側撹乱
123	10	方形	426×422×23	(14.84)	N-71°-W	西壁中央	石組粘土	1	9C中 平安前	104、122住を切る　127住、1222土に切られる　中央部撹乱
124	11	方形か	〈344〉×〈152〉×14	〈2.3〉	N-16°-E	不明	不明	－	不明	125住を切る　南及び北側撹乱
125	11	不明	〈192〉×〈60〉×13	〈0.42〉	不明	不明	不明	－	9C後 平安前	124住に切られる　南及び西側撹乱
126	10	長方形	354×288×10	9.37	N-15°-E	なし	－	－	9C後 平安前	111、116、119住、1203溝、集石1、P13に切られる
127	9	隅丸方形か	416×〈212〉×6	(5.86)	N-20°-E	不明	不明	－	9C後 平安前	123住を切る　107住に切られる　東半部撹乱
128	10	長方形	324×292×14	8.04	N-23°-E	なし	－	－	9C後 平安前	129住を切る
129	10	方形か	468×384×4	(15.22)	N-115°-E	東壁中央	石組粘土	3	9C中 平安前	128住に切られる
130	10	方形	366×354×11	10.86	N-18°-E	なし	－	－	不明	135住を切る　1228、1230土、1206溝、流路1に切られる
131	11	長方形	390×324×36	(10.76)	N-17°-E	不明	不明	4	不明	136住を切る　1201竪、流路1に切られる　東側一部撹乱
132	10	方形か	〈276〉×〈80〉×11	〈1.49〉	N-15°-E	不明	不明	1	不明	南側調査区外
133	10	方形か	328×(88)×16	〈1.43〉	N-3°-E	不明	不明	－	不明	105、113住に切られる　北側撹乱
134	11	隅丸方形か	356×〈304〉×9	〈6.39〉	N-30°-E	不明	不明	3	不明	136住を切る　東半部撹乱
135	10	隅丸方形か	266×(150)×22	〈2.29〉	N-18°-E	不明	不明	－	11C後 平安後	130住、1228土、流路1に切られる　西半部撹乱
136	11	不明	〈342〉×〈100〉×16	〈1.34〉	N-72°-W	西壁中央	石組粘土	－	不明	131、134住、1201竪に切られる　東側撹乱
137	11	不明	〈116〉×〈92〉×8	〈0.82〉	不明	不明	不明	－	不明	南東隅部のみ残存

第2表　竪穴状遺構一覧表

（）：推定、〈〉：残存

No.	地区	図	平面形	規模 長軸×短軸×深さ(cm)	規模 床面積(m²)	主軸方向	内部施設	時期	備考
1201	中央東	11	長方形	〈272〉×178×38	〈3.53〉	N-72°-E	貼り床有	中世か	131、136住を切る　東側撹乱
1202	北	11	不明	〈192〉×〈92〉×30	〈1.26〉	N-13°-E	なし	9C後　平安前か	1236土、流路3に切られる

第 3 表　溝址・流路址一覧表

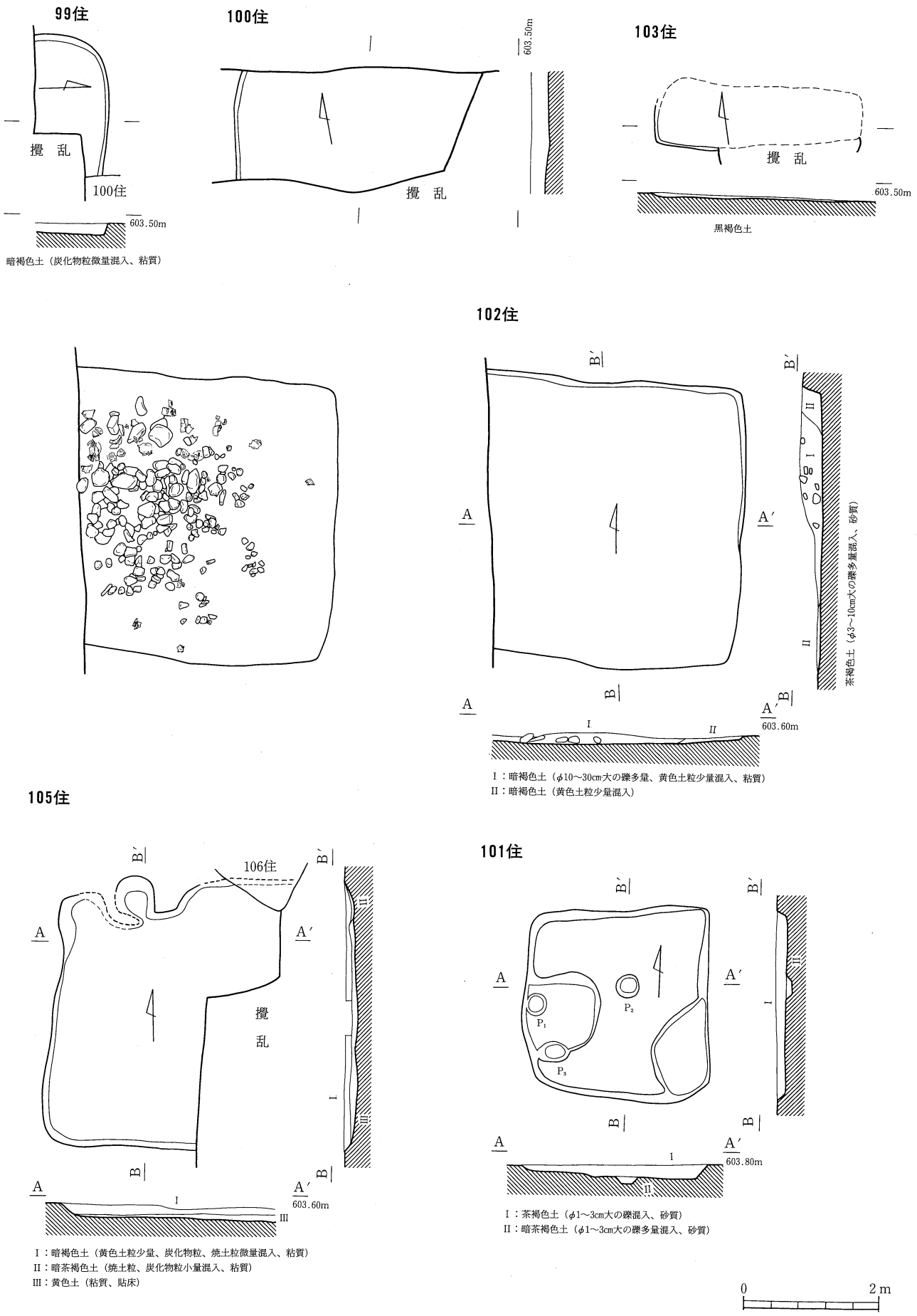
〈〉：残存

No.	検出面 地区	図	起点 近似点	終点 近似点	断面形	規模(cm) 長さ	幅	深さ	時　期	備　考
1201	1 中央	11	S06E10 (北端)	S09E08 (南端)	Ⅲ形	420	44 ～48	3 ～21	中世か	1202溝、1211土とセットか
1202	1 中央	11	S02E10 (北端)	S10E05 (南端)	Ⅲ形	〈744〉	40 ～48	5 ～11	中世か	1201溝、1211土とセットか
1203	1 中央		NS0E07 (東端)	N01E03 (西端)	Ⅲ形	408	40 ～45	6 ～9	中世か	
1204	－	－	－	－	－	－	－	－	－	欠番
1205	2 中央		S06E05 (東端)	S05E02 (西端)	Ⅲ形	415	40 ～48	5 ～9	中世か	121住を切る　流路 1 に切られる
1206	2 中央		N03E16 (東端)	N03E13 (西端)	Ⅲ形	315	40 ～48	7 ～9	不明	130住を切る
流路 1	1 中央東 ～中央		N01E20 (東端)	N06E09 (西端)	Ⅲ形	〈1415〉	40 ～110	7 ～18	中世か	130、131、135住、1201竪、1228土を切る 1221土に切られる　所々分断している
流路 2	4		N03E29 (東端)	N07E11 (西端)	Ⅲ形	〈2050〉	50 ～255	5 ～15	不明	流路 4 からのオーバーフローか
流路 3	4		N09E27 (東端)	N14E11 (西端)	不明	〈1730〉	350～	80～	不明	一時的な薄川の大きな流れの跡か
流路 4	4		N03E21 (東端)	S03E11 (西端)	不明	〈1140〉	400～	65～	不明	一時的な薄川の大きな流れの跡か

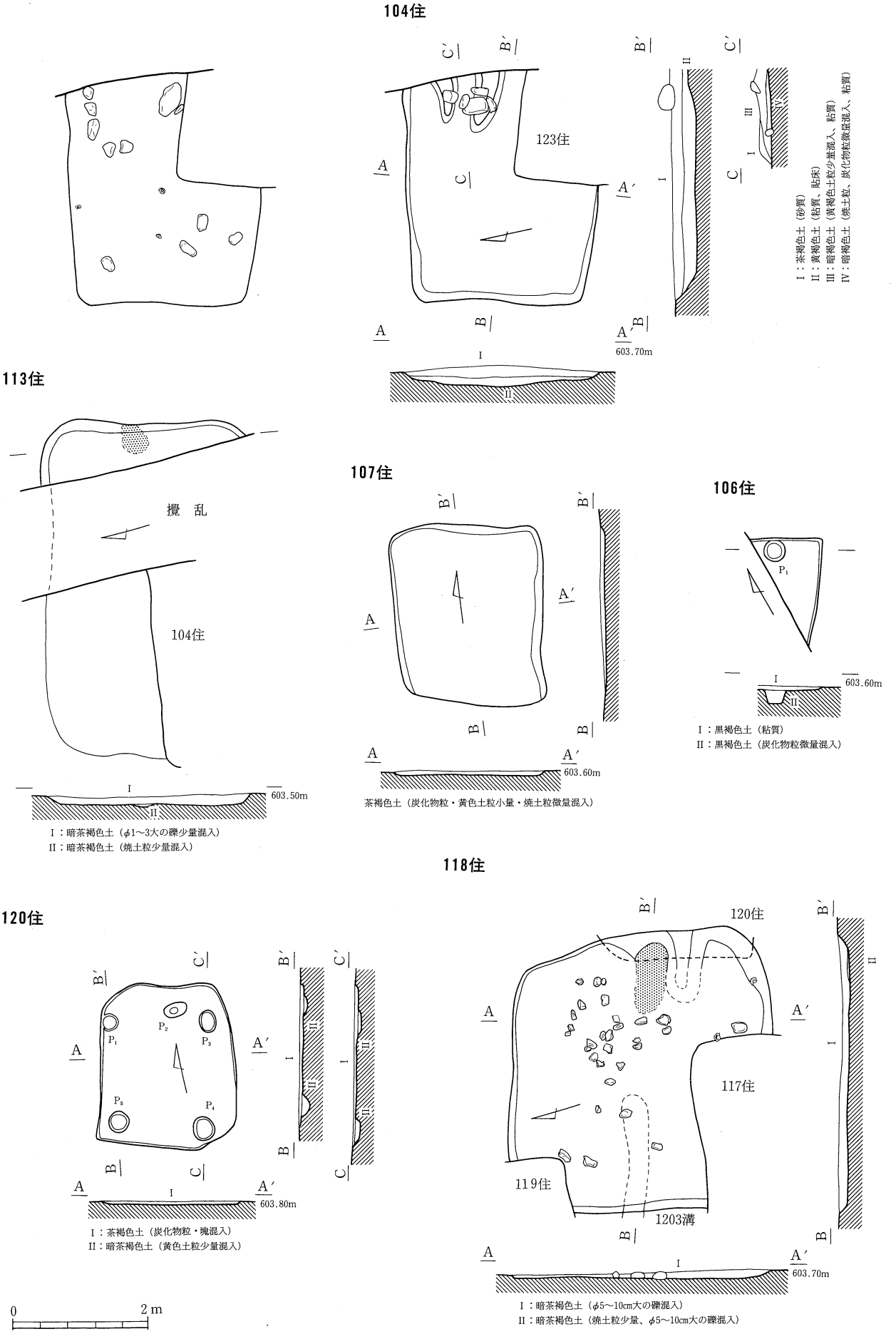
第 4 表　土坑一覧表

()：推定、〈〉：残存

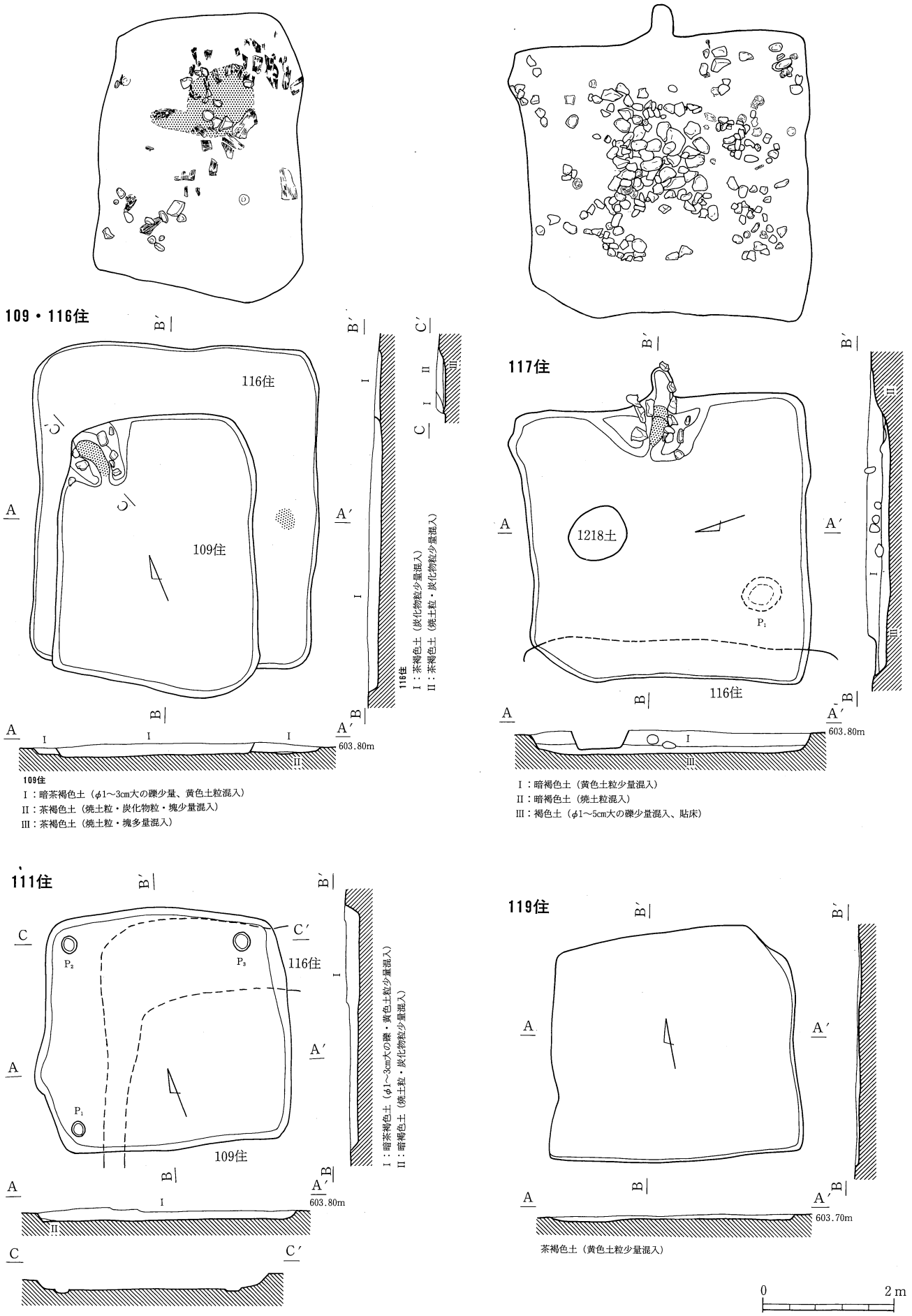
No.	地区	検出面	図	平面形	規模 長軸×短軸×深さ(cm)	時期	備　考
1201	西	1	12	円形	100×86×10		
1202	西	1	12	円形	70×58×15		
1203	中央	1	13	方形	204×188×18	中世か	
1204	中央	1	13	長方形	240×180×23	中世か	122住を切る　礫多量に出土　出土図有
1205	中央	1	13	長方形	176×114×10	中世か	P27、28を切る
1206	中央	1	12	長円形	90×54×14		
1207	中央	1	12	楕円形	60×46×10	中世か	119住を切る
1208	中央	1	12	長円形	92×50×16	中世か	119住を切る
1209	中央	1	12	不整円形	118×106×12		116、117住を切る
1210	中央	1	12	不整長円形	168×110×22	中世か	109、116、117住を切る
1211	中央	1	13	長円形	152×62×11	中世か	1201、1202溝とセットか
1212	中央	1	12	長円形	78×54×10		
1213	西	1	12	不整長円形	68×44×9		P7に切られる
1214	西	1	12	円形	92×88×14		
1215	西	1	12	円形	60×54×10		
1216	西	1	12	円形	86×80×16		
1217	－	－	－	－	－	－	欠番
1218	中央	1	12	円形	80×76×20		117住を切る
1219	西	1	12	長円形	130×73×16		
1220	西	1	12	円形	52×50×16		
1221	中央	1	13	不整方形	160×136×20	中世か	流路 1 を切る
1222	西	2	12	円形	56×52×10	中世か	127住を切る　白磁小壺出土
1223	中央東	2	13	楕円形	200×140×35	中世か	「真」刻書緑釉陶器杯、鉄釘出土
1224	中央東	2	12	長方形	216×140×21		西側撹乱
1225	中央東	2	13	方形	176×148×7	中世	熙寧元寶、元符通寶出土　西側撹乱
1226	中央東	2	12	楕円形	156×112×82	中世(15C)	1227、1228土を切る　東海系施釉陶器卸皿、鉄釘出土　ゴミ穴か
1227	中央東	2	12	楕円形	〈92〉×〈80〉×36	中世か	1226土に切られる　北側撹乱
1228	中央東	2	13	長方形	216×140×16	中世か	130住、1230土を切る　流路 1 に切られる
1229	中央東	2	12	円形	(152)×128×64	中世か	1226土に切られる
1230	中央東	2	13	長方形	180×128×32	中世か	130住を切る　1228土、流路 1 に切られる
1231	中央東	2	12	円形	84×82×12	中世か	
1232	－	－	－	－	－	－	欠番
1233	東	2	12	円形	48×45×22		
1234	中央東	2	12	円形	106×88×40	中世	熙寧元寶出土
1235	東	2	12	不整楕円形	136×102×38		礫多量に出土　東側調査区外
1236	北	4	12	不整楕円形	88×68×34	平安前(9C)か	
1237	中央東	2	12	不整方形	88×72×28		135住に切られる　西側撹乱
1238	－	－	－	－	－	－	欠番
1239	中央	3	12	楕円形	168×98×8	中世か	
1240	中央	3	12	不明	〈152〉×〈80〉×32		
1241	中央東	3	12	楕円形	124×92×40	中世か	一部分ピット状になっている
1242	中央東	3	13	不整長方形	240×124×56	中世	明道元寶出土
1243	中央東	3	13	長方形	196×156×10	中世か	1246土を切る　焼土範囲有
1244	中央東	3	13	不整長方形	204×148×28	中世か	1245、1246土を切る
1245	中央東	3	13	長方形	〈204〉×146×20	中世か	1244土に切られる　西側撹乱
1246	中央東	3	13	不明	〈154〉×136×21	中世か	1243、1244土に切られる
1247	中央東	4	12	楕円形	78×50×20	平安前(9C)か	
1248	中央東	4	13	円形	112×(92)×8	平安前(9C)か	1249土に切られる
1249	中央東	4	13	円形	124×110×24	平安前(9C)か	1248土、3建-P3(P67)を切る
1250	中央東	4	13	円形	84×80×18	平安前(9C)か	1251土、3建-P3(P67)を切る　一部分ピット状になっている
1251	中央東	4	13	円形	72×〈68〉×20	平安前(9C)か	1250土に切られる
1252	中央東	4	13	円形	60×50×18	平安前(9C)か	



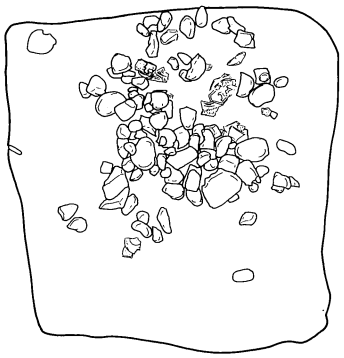
第6図　第99～103・105号住居址

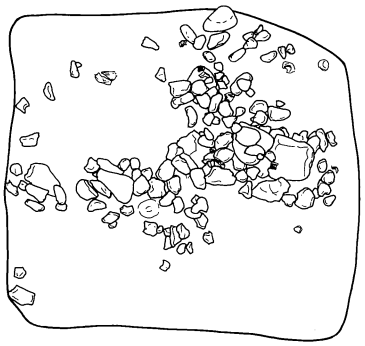


第７図　第104・106・107・113・118・120号住居址

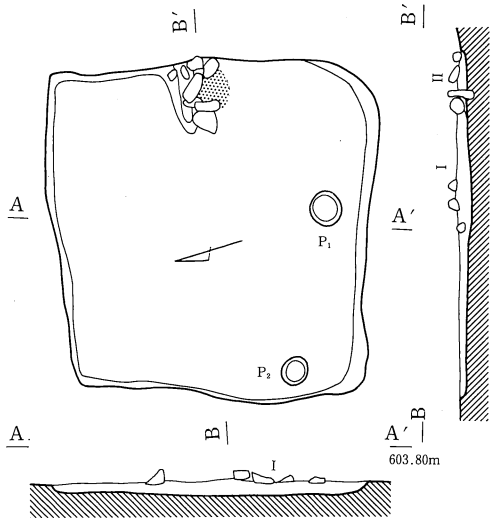


第8図　第109・111・116・117・119号住居址



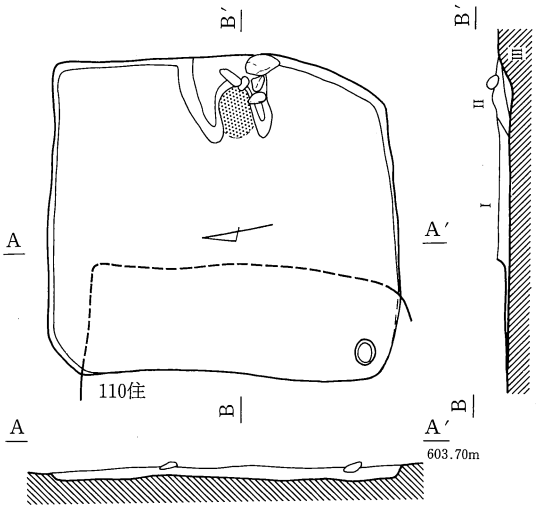


110住



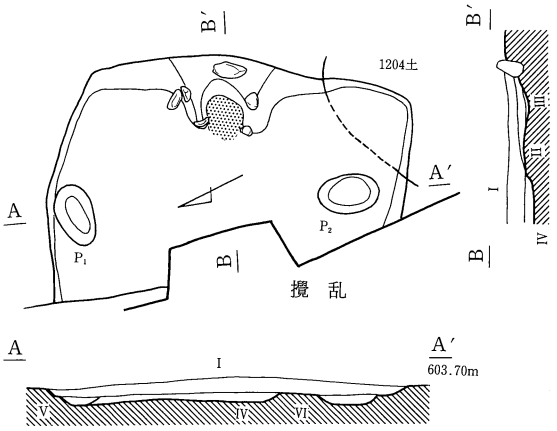
Ⅰ：暗茶褐色土（砂質）
Ⅱ：暗茶褐色土（焼土粒少量混入）

114住



Ⅰ：暗茶褐色土（黄色土粒少量混入）
Ⅱ：暗茶褐色土（粘質）
Ⅲ：茶褐色土（焼土粒少量混入）

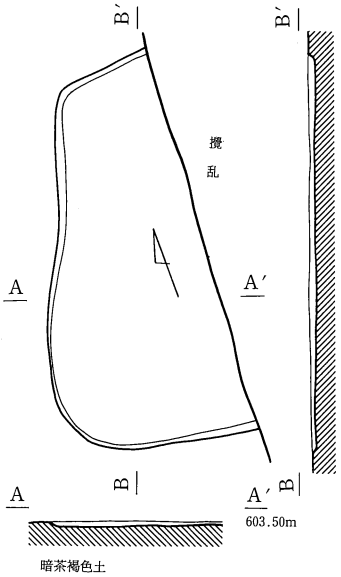
122住



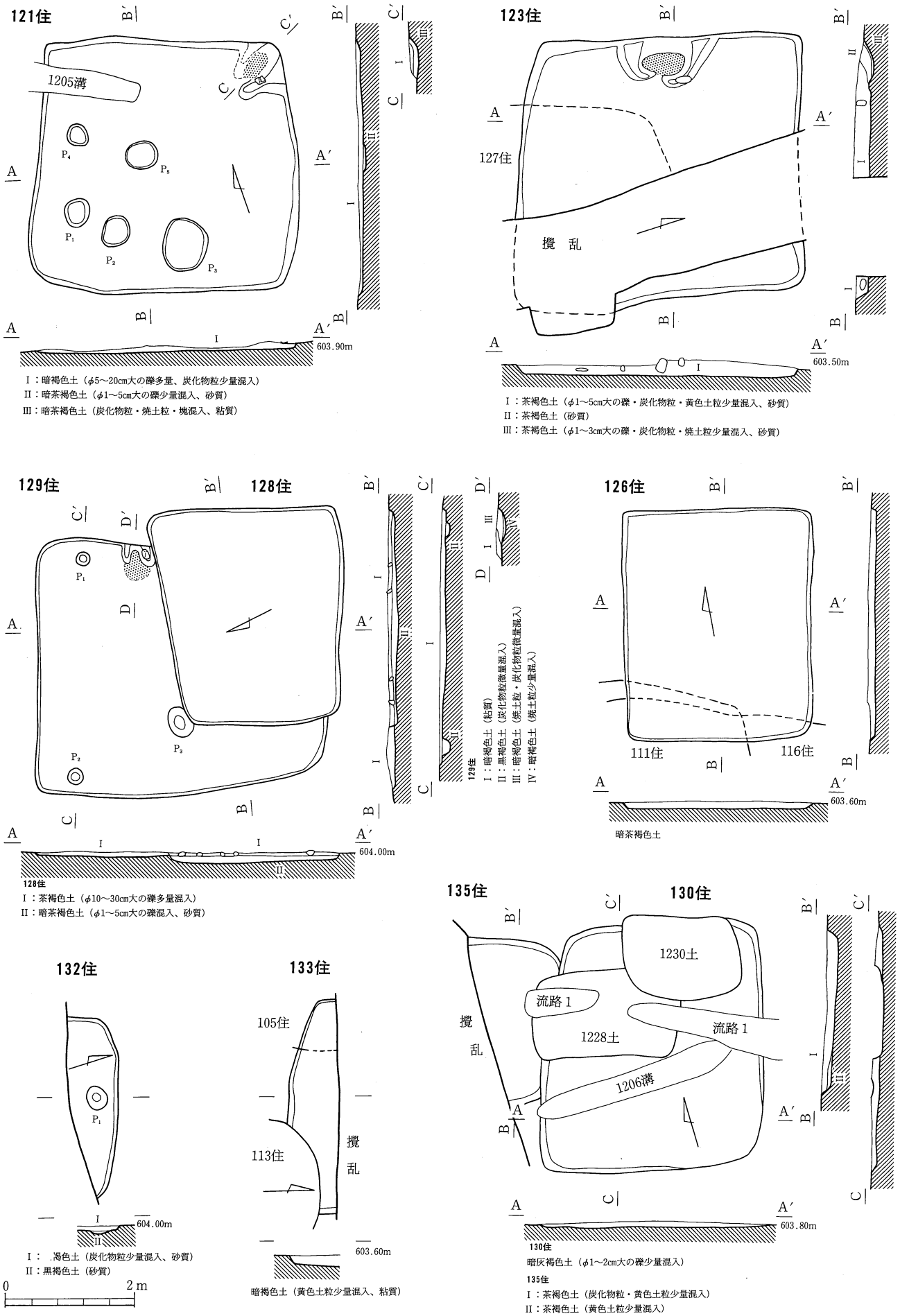
Ⅰ：暗茶褐色土（φ1～3cm大の礫・焼土粒・炭化物粒少量混入）
Ⅱ：暗茶褐色土（炭化物粒・黄色土粒・塊少量混入）
Ⅲ：茶褐色土（炭化物粒少量混入）
Ⅳ：茶褐色土（焼土粒混入、貼床）
Ⅴ：暗茶褐色土（粘質）
Ⅵ：暗茶褐色土

0　2 m

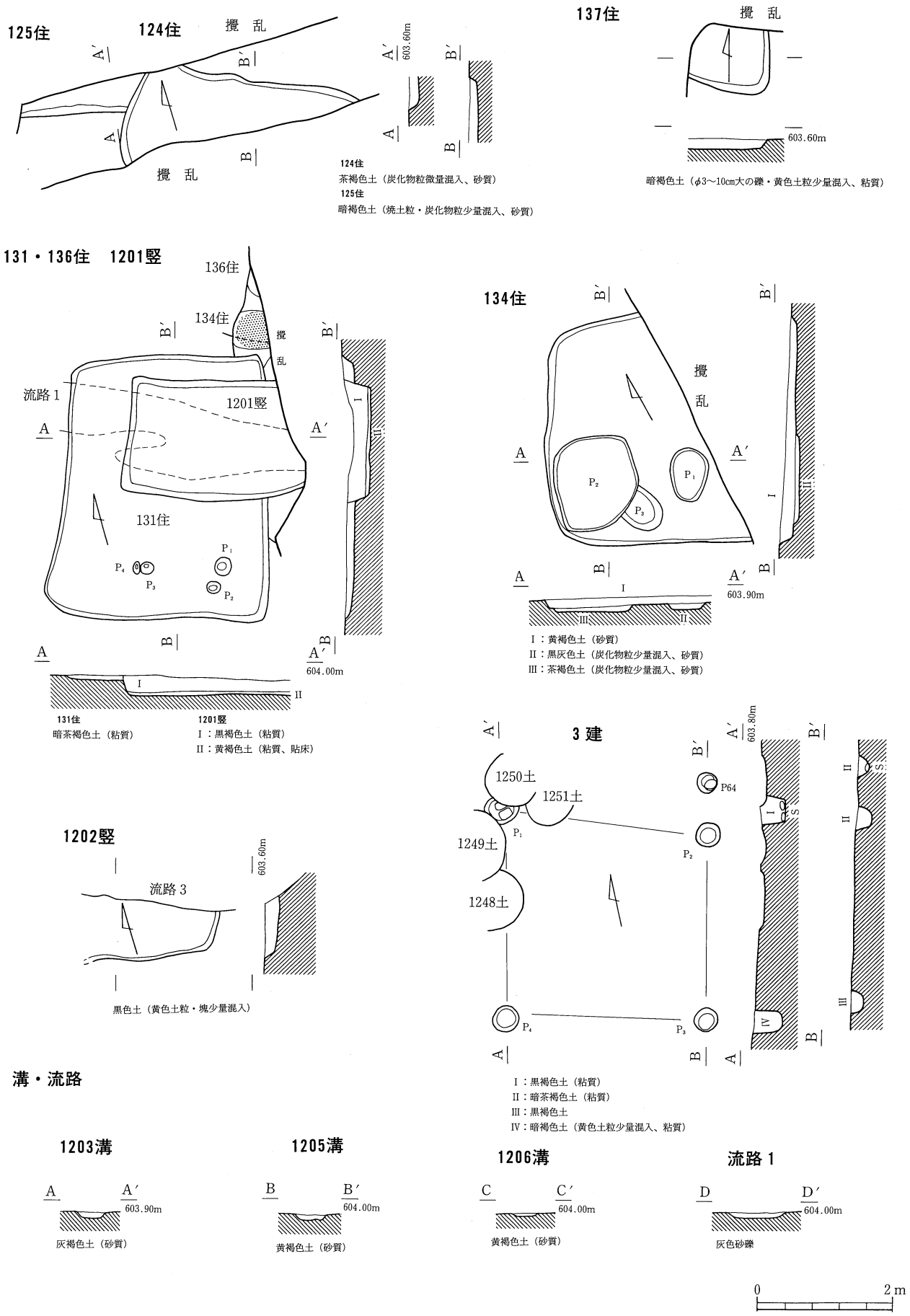
127住



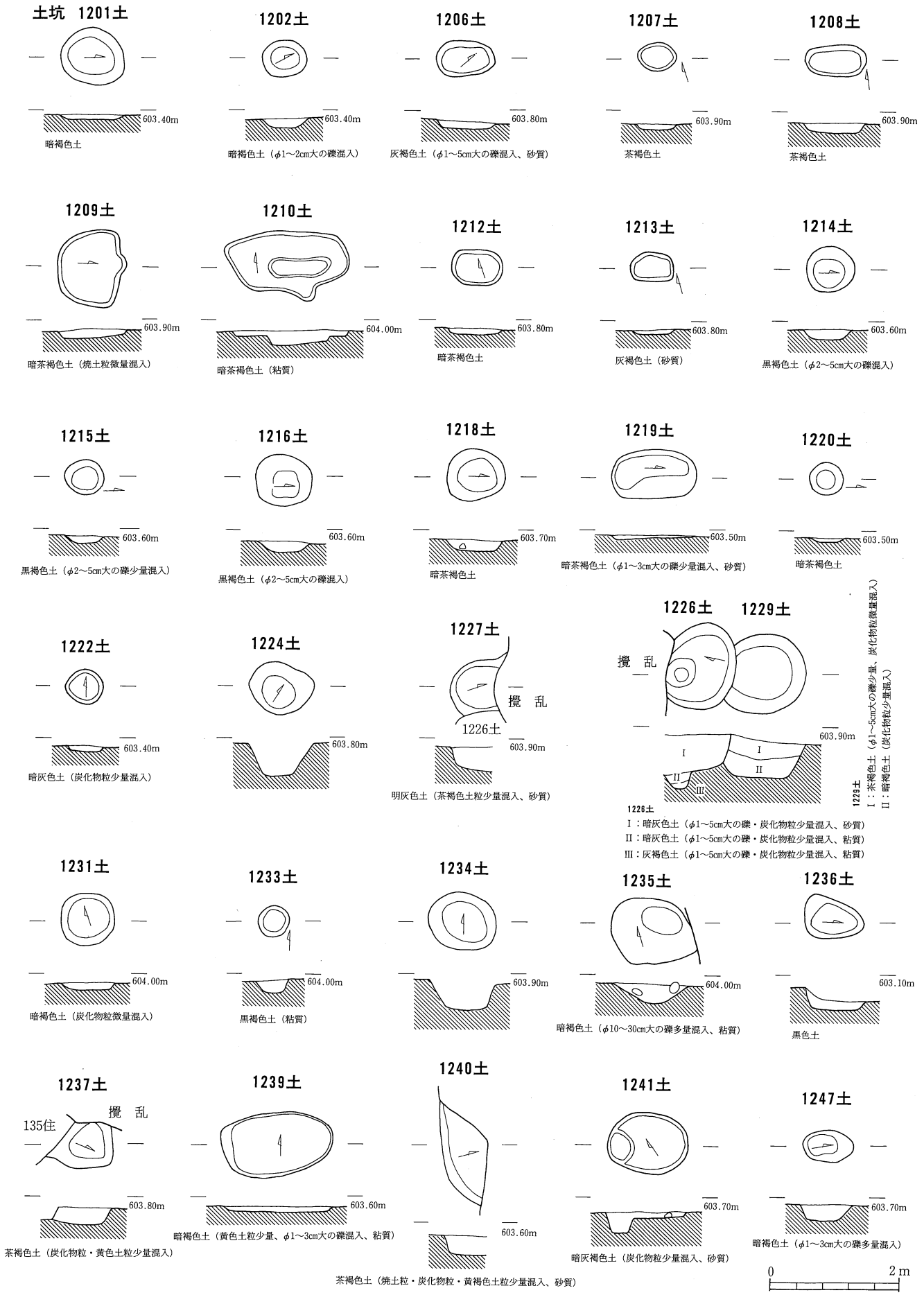
第 9 図　第110・114・122・127号住居址



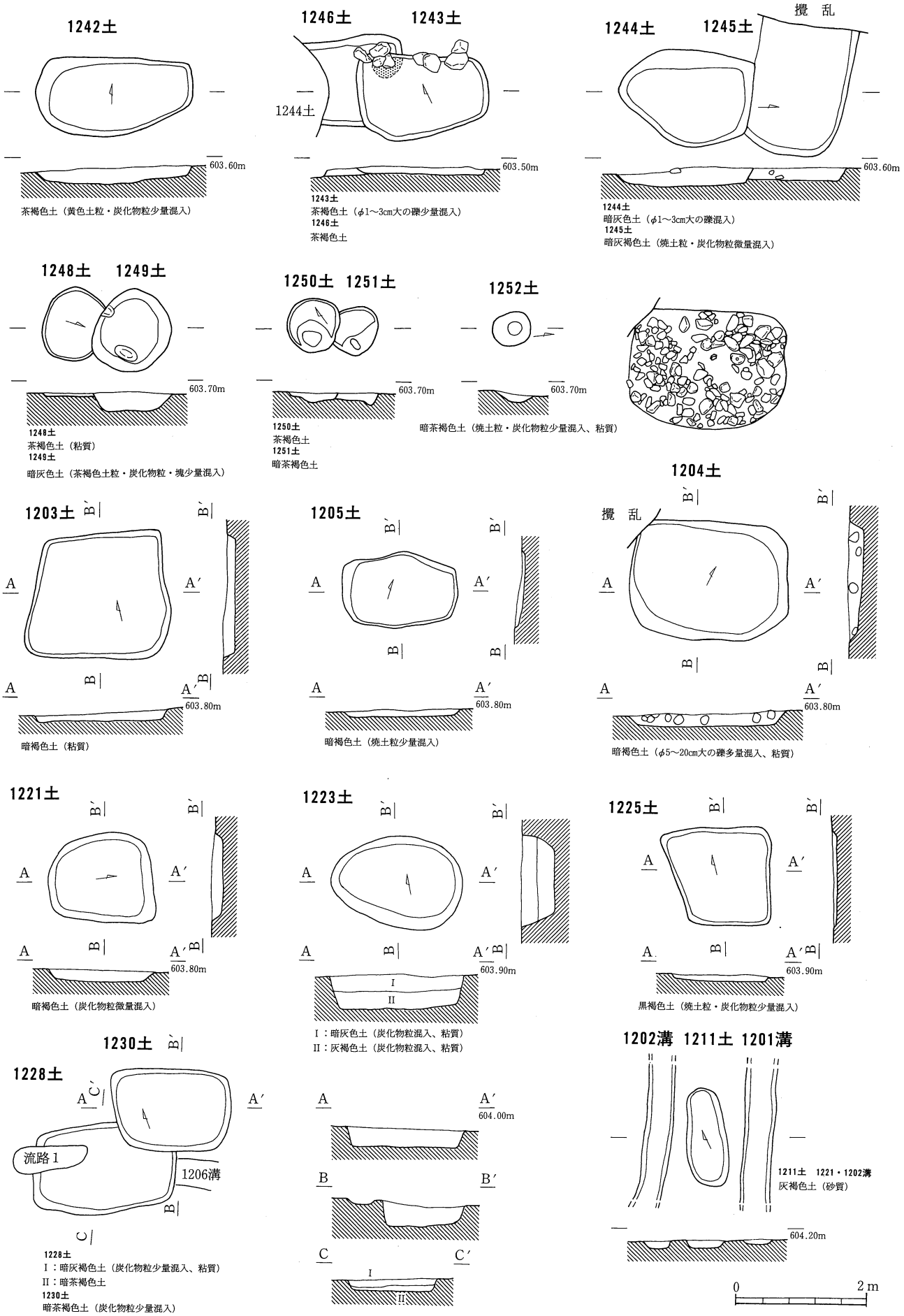
第10図　第121・123・126・128・129・130・132・133・135号住居址



第11図　第124・125・131・134・136・137号住居址、第 3 号掘立柱建物址、竪穴状遺構、溝址、流路址


土坑 1201土
603.40m
暗褐色土
1202土
603.40m
暗褐色土（φ1～2cm大の礫混入）
1206土
603.80m
灰褐色土（φ1～5cm大の礫混入、砂質）
1207土
603.90m
茶褐色土
1208土
603.90m
茶褐色土
1209土
603.90m
暗茶褐色土（焼土粒微量混入）
1210土
604.00m
暗茶褐色土（粘質）
1212土
603.80m
暗茶褐色土
1213土
603.80m
灰褐色土（砂質）
1214土
603.60m
黒褐色土（φ2～5cm大の礫混入）
1215土
603.60m
黒褐色土（φ2～5cm大の礫少量混入）
1216土
603.60m
黒褐色土（φ2～5cm大の礫混入）
1218土
603.70m
暗茶褐色土
1219土
603.50m
暗茶褐色土（φ1～3cm大の礫少量混入、砂質）
1220土
603.50m
暗茶褐色土
1222土
603.40m
暗灰色土（炭化物粒少量混入）
1224土
603.80m
1227土
攪 乱
1226土
603.90m
明灰色土（茶褐色土粒少量混入、砂質）
1226土
1229土
攪 乱
603.90m
I
II
III
1226土
I：暗灰色土（φ1～5cm大の礫・炭化物粒少量混入、砂質）
II：暗灰色土（φ1～5cm大の礫・炭化物粒少量混入、粘質）
III：灰褐色土（φ1～5cm大の礫・炭化物粒少量混入、粘質）
1229土
I：茶褐色土（φ1～5cm大の礫少量、炭化物粒微量混入）
II：暗褐色土（炭化物粒少量混入）
1231土
604.00m
暗褐色土（炭化物粒微量混入）
1233土
604.00m
黒褐色土（粘質）
1234土
603.90m
1235土
604.00m
暗褐色土（φ10～30cm大の礫多量混入、粘質）
1236土
603.10m
黒色土
1237土
135住
攪 乱
603.80m
茶褐色土（炭化物粒・黄色土粒少量混入）
1239土
603.60m
暗褐色土（黄色土粒少量、φ1～3cm大の礫混入、粘質）
1240土
603.60m
茶褐色土（焼土粒・炭化物粒・黄褐色土粒少量混入、砂質）
1241土
603.70m
暗灰褐色土（炭化物粒少量混入、砂質）
1247土
603.70m
暗褐色土（φ1～3cm大の礫多量混入）
0
2m

第12図　土坑(1)


1242土
603.60m
茶褐色土（黄色土粒・炭化物粒少量混入）
1246土
1243土
1244土
603.50m
1243土
茶褐色土（φ1～3cm大の礫少量混入）
1246土
茶褐色土
1244土
1245土
攪　乱
603.60m
1244土
暗灰色土（φ1～3cm大の礫混入）
1245土
暗灰褐色土（焼土粒・炭化物粒微量混入）
1248土
1249土
603.70m
1248土
茶褐色土（粘質）
1249土
暗灰色土（茶褐色土粒・炭化物粒・塊少量混入）
1250土
1251土
603.70m
1250土
茶褐色土
1251土
暗茶褐色土
1252土
603.70m
暗茶褐色土（焼土粒・炭化物粒少量混入、粘質）
1203土
B′
A
A′
B
603.80m
暗褐色土（粘質）
1205土
603.80m
暗褐色土（焼土粒少量混入）
1204土
攪　乱
603.80m
暗褐色土（φ5～20cm大の礫多量混入、粘質）
1221土
603.80m
暗褐色土（炭化物粒微量混入）
1223土
603.90m
I
II
I：暗灰色土（炭化物粒混入、粘質）
II：灰褐色土（炭化物粒混入、粘質）
1225土
603.90m
黒褐色土（焼土粒・炭化物粒少量混入）
1230土
1228土
C′
C
流路1
1206溝
1228土
I：暗灰褐色土（炭化物粒少量混入、粘質）
II：暗茶褐色土
1230土
暗茶褐色土（炭化物粒少量混入）
604.00m
1202溝
1211土
1201溝
1211土　1221・1202溝
灰褐色土（砂質）
604.20m
0
2m

第13図　土坑(2)・溝址

第３節　遺物

１　土器・陶磁器（第14～21図、第５表）

今回の調査によって出土した遺物は、整理用テンバコ22箱を数え、弥生時代・平安～中世の多量の良好な資料を得ることができた。それらのうち図化し得たものは、土器、陶磁器は377点である。ここではそれらの様相について述べていく。

Ａ　弥生時代の土器

今回の調査では、弥生時代の明確な遺構を捉えることはできなかった。しかし、第１章で述べたように洪水の常襲地でありながらも、この地に弥生時代の遺構が存在した証明として、若干ではあるが遺物が出土している。

図化し得たものは101住の２点（12、13）で、12は外面に波状文、13は外面に簾状文及び波状文が施文され、口縁には縄文が施される（13は磨耗）。いずれも甕或いは台付甕とみられ、弥生時代中期末に属すると考えられる。

そのほかにも、図示し得ないが、調査区全域から、該期の土器片が出土している。

Ｂ　平安時代の土器

種別・器形

種別には土師器、黒色土器、須恵器、軟質須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、輸入陶磁器（白磁･青磁）、国内産陶器などがある。出土した土器・陶磁器類の大半を占めている。竪穴住居址覆土中からの出土が多い。以下では項末記載の参考文献（註１）に従って種別に器形を述べていく。

土師器

123点図化した。器形には杯Ａ、椀、盤Ｂ、甕類（甕Ｂ、小型甕Ｄ、羽釜Ｄ、甑Ｄ）などがみられる。

杯Ａ

ロクロ成形、底部回転糸切り、無高台の土師器で、８期以降に出現する。39点図化した。杯ＡⅡと杯ＡⅢの２つの法量があり、杯ＡⅡは黒色土器Ａ杯Ａの法量を受け継ぐもので、８期に出現する。今回の調査では、116住で４点（145、146、147、148）、107住で６点（74、75、87、88、89、90）、121住で９点（202、203、204、205、207、209、210、211、213）と多くみられ、119、127住でも確認できる。116住では口径平均13.13cm、器高平均4.05cmである。13期では口径9.94cm、器高2.7cmである。15期では口径8.9cm、器高1.96cmである。時間の経過とともに口径、器高を減じていく傾向があるといえる。

杯ＡⅢは、ＡⅡが小型化していく過程で、12期に出現する器形である。該期以降の、107住で３点（73、91、92）、121住で１点（208）みられる。これらの平均は、口径で13.79cm、器高で4.09cmである。

皿

手捏ねの、いわゆる中世のかわらけに類するものを１点（329）図化しているが、グリッド調査によるもので、遺構に伴うか不明であるため、意義について述べることはできない。ただ今回調査において、その他に東海系無釉陶器山茶碗、施釉陶器卸皿などの中世遺物が出土しているため、中世遺構の存在を想起させる資料とはなりうるものである。

椀

ロクロ成形、底部回転糸切、付高台の土師器である。９～15期の土器群にみられる。今回の調査では、概期の遺構が少ないためか全体として出土量も少なく、９点を図化したのみである。また、小破片が多く、総体としての規模を明らかにできるものが少ないため、ここで法量等について述べることは困難である。

盤ＢⅡ

ロクロ成形、底部回転糸切、付高台の土師器である。身部が浅く足高の高台をもつ、口径10cm前後のものである。11期以降に出現する。1244土出土の１点（294）を図化したのみである。

甕類には甕Ｂ、小型甕Ｂ、小型甕Ｄ、羽釜Ａ、甑Ｄ、円筒型土器がある。

甕Ｂ

甕Ｂは、粘土紐積上げで成形し、体部外面をハケメで調整した長胴甕で、１期から10期にかけてみられる煮炊具の代表的なものである。８期以降は急速に減少していき、10期ではほとんどみられなくなる。今回の調査では37点出土している。７、８期の住居址ではカマド付近を中心に多くみられる。102住（14、37、38、39、40）、104住（50）、105住（53、54）、109住（103）、110住（116、117、118）、102住（14）で出土している。しかし全体の規模のわかるものは少ない。高さは31.2～32.2cm（４点）で平均31.65cm、底径は8.4cm～11.4cm（９点）で平均9.97cmである。

小型甕

小型甕Ｂは、甕Ｂと同様で体部をハケメ調整するものであるが、１期から５期までしかみられない。今回は122住(220)で確認されたが、住居址の時期からみて混入と考える。小型甕Ｄはロクロ成形で体部にカキ目、ロクロ目がみられ、口径と器高の比が１：１になる甕である。370を除いて外面にカキ目がみられる。４期から15期まででみられるものである。今回の調査では７、８期のものを15点図化し、口径9.6～13.4cm、器高9.3～9.4cmである。

７期のものは105住（55)、117住（154、155、157)、118住（197)、122住（223、224、225、226）で出土している。224は全体のわかるもので口径10.8cm、器高9.3cmである。

８期のものは102住（15）で１点みられるが、底部のみで、全体は明らかでない。

今回の調査では、13～15期の住居址から、小型甕の出土はみられない。

羽釜Ｄ

羽釜Ｄは指ナデ、ハケ目、板状工具によるナデなどが器面にみられる甕で、鍔部が口縁部下にみられる。羽釜は11期に出現する。今回の調査では13期の107住（86）から１点出土しているのみである。

甑

甑Ｄがみられる。甑Ｄは、羽釜の底部を抜いた形を呈するもので、11期に出現する。今回の調査では、14期の119住から２点(200、201)出土している。201は全体のわかるもので、底部に輪積み痕があり、口縁部はロクロナデ成形をされる。鍔は巾1.2cmほどのものが貼り付けられている。

円筒型土器

口径は12cm前後、胴部はそれより一回り太い円筒状の土器で、体部外面には縦方向のハケメが施される。底部は内側に折り返すようにしている。全体として規模のわかる資料は少ない。５～８期において、主としてカマド周辺で出土がみられることから、煮炊きに関連して使用されたものとみられている。

今回の調査では９点出土している。７期の住居址からは1点ずつ、117住（161)、122住（222）でみられた。８期の住居址では102住（16、17、18、19)、116住（142、143、144）と複数出土している。出土位置について、116住のものはいずれもカマドとみられる周辺であるが、その他については一定しない。法量について、全体の規模のわかるものは皆無である。７期のものは、161が底径9.8cm、222が口径11.4cmである。８期のものは、口径が11.2～14.0cmで平均が12.55cm、底径がわかるものは144で10.8cmである。器高のわかるものは存在しない。

黒色土器

内面および内外面に黒色処理をするロクロ成形の土師器である。器形には杯Ａ、椀、鉢、皿がある。また今回の調査では小型甕、ミニチュアがみられる。内面のみ黒色処理を行う黒色土器Ａ、内外面とも黒色処理を行う黒色土器Ｂがある。底部は回転糸切り痕、ナデ痕を持つ。黒色処理前にミガキが施される。黒色土器Ａは123点、黒色土器Ｂは４点図化した。

杯Ａ

無高台の黒色土器で、法量によりⅠ、Ⅱがある。４～８期においてみられる。今回の調査では黒色土器Ａのみである。51点図化し、うち43点が住居址内からのもので、７～８期の住居址において多くみられる。ＡⅠは、７期の105住（58)、110住（114)、114住（131、133、134)、117住（164、167、168、172)、122住（233）と数量的にはあまり多くないが、特に114住、117住ではＡⅠ、ＡⅡの両者ともにみられる。法量は口径15.5～19.4cmで平均16.8cm、器高５～7.2cmで平均5.56cmである。８期の住居址ではみられない。

ＡⅡは、７期の住居址では99住（１、２）104住（56、57)、110住（105)、113住（126)、114住（129、130、132)、117住（165、166、169、170、171、180)、122住（234、235、236、237）とみられ、口径は11.6～13.95cmで平均12.99cm、器高は3.3～4.7cmで平均3.99cmである。8期の住居址では非常に少なく、100住（９)、102住（20、22、23）と４点出土しているのみで、法量も一定しない。

椀

付高台の黒色土器である。７～15期においてみられる。黒色土器Ａ、黒色土器Ｂがある。口径12.8～17.6cm。器高4.7～7.7cm。口径10cm前後の小椀もみられる。42点図化した（Ａ：41点、Ｂ：１点)。

黒色土器Ａは７期の99住（３、４)、105住（62)、110住（106、110、115)、117住（178、179、181、190、191）118住（193)、122住（230、231、238、239)、123住（251）で出土している。８期では100住（10、11)、102住（25、26、27、28、29)、109住で出土している。13期では107住（79、80、81、82、83、84、95、96）で出土がみられる。しかし、いずれも全体形がわかるものは少なく、法量については口径についてのみ述べておく。７期では12.8～17.6cmで

平均16.75cm、８期では14.0～16.8cmで平均15.36cmである。13期では、13.4cm、14.0cmのものの他、8.8cm、9.8cm、10.8cmという小椀がみられる。
黒色土器Ｂはグリッド調査で椀が１点（308）がみられるのみで詳細については不明である。

鉢Ａ

杯Ａと相似であるが、口径20cmを超えるものを鉢Ａとした。５～９期に存在する。今回の調査では７期の110住（113）、117住（156）、122住（228）と、遺構内からは３点のみである。また口径についても228と、トレンチ出土の341のみ（それぞれ口径22.4cm、34.0cm）と、全体形のわかるものは少ない。他は推定値が20cmを超えるものであるため、法量について詳しく述べることはできない。

皿Ｂ

直線的に伸びる体部に高台をつけるもので、内面又は両面を丁寧にヘラ磨きし、黒色処理するもので、７～８期にみられる。黒色土器Ａ、Ｂともにみられる。

黒色土器Ａは、７期の114住（135、136）、117住（173、174、175、177、182）、122住（229、232、240）、８期の128住（263）でみられ、特に117住ではまとまって出土している。法量は口径が12.2～14.4cmで平均が13.31cm、器高が2.3～3.15cmで平均が2.88cmである。

黒色土器Ｂは２点みられ、７期の117住（176）、123住（249）である。いずれも全体形の判るもので、法量はそれぞれ口径が13.8cm、13.15cm、器高が2.6cm、1.65cmである。

小型甕

99住（５）、1228土（291）の２点みられ、いずれも黒色土器Ａである。５は外面ロクロナデされるため小型甕Ｄとした。291は内外面ともミガキ調整される。詳細については不明な点が多い。

ミニチュア

短頸壺型のミニチュア（361）が１点、検出面から出土している。調整は、外面はミガキされるが、内面はナデのみで、ミガキはされず黒色処理がされている。遺構からの出土ではないため、用途について述べることはできない。

須恵器

還元焔焼成による硬質灰色土器で、ロクロ調整と窯による焼成によっている。器形には杯Ａ、杯Ｂ、杯蓋Ｂ、壺類、甕類、また陶硯として風字硯がある。70点図化した。

杯Ａ

１～７期にみられる。今回の調査では36点みられ、そのうち23点が住居址覆土からで、102住（34）が８期のものである以外は全て７期の住居址からの出土である。104住（46、47）、110住（109）、111住（120、121）、113住（127）、117住（183、184、185、187）118住（194、195、196）、122住（241、242、243、244、245）、123住（252、253、254、255）でみられ、法量は口径が12.0～13.4cmで平均が12.79cm、器高が2.8～4.4cmで平均が3.47cmである。

杯Ｂ

箱形の体部に高台を付けた形態で、杯蓋Ｂとセットをなす。法量によりＩからⅥに分類される。杯Ａと同様、１～７期にみられる。今回の調査では８点図化したが、底部高台部分の残存により杯Ｂと判断したものが全てである。底径からある程度の規模を考えられるものもあるが、全体のわかるものは皆無であり、法量による分類は難しい。

杯蓋Ｂ

杯Ｂとセット関係にあるもので、杯Ｂと同様、法量によりＩからⅥに分類される。今回の調査では７点図化し、口径の明らかなものは105住（71）、111住（122）、トレンチ（345）の３点のみで、住居址のものはいずれも７期に属する。71はＢⅣで14.0cm、122はＢⅣで14.9cm、345はＢⅡかⅢで15.6cmとなる。

壺類

長頸壺がある。今回の調査で壺類は７点出土している。明らかに長頸壺とみられるものは３点で、102住(35)、122住（247)、123住（256）である。いずれも球形胴に細い頸部が付く長頸壺Ａである。他は明らかな器種を判断しがたい。このうち全体のわかるものは256で、器高は23.35cm、体部径19.1cmで、肩部に取手が１つ付くタイプである。

甕類

今回の調査では４点図化した。いずれも規模を明らかにできるものはない。102住（36）のものは、肩部から胴部にかけて強く張り出した体部に外反する口縁部を付けた甕Ａとみられるが、体部と口縁部の接合部のみで、全体の規模をうかがい知ることはできない。114住（139)、グリッド（317）の２点は、甕Ａの可能性があるが明らかではない。

風字硯

中世以降の石製硯と異なり、古代においては焼き物の硯、即ち陶硯が主体を占める。風字硯は陶硯の一種で、平面形が「風」という字の形に相似するため、その呼称を持つ。今回出土のものは、114住（128）の１点で、海部側が残存し、裏面には貼り付けの脚が１つ残存している。全体の規模は明らかではないが、内面には墨痕及び使用痕がみられる。外面の調整は、側面が工具ナデ、底面は一部未調整の他はヘラ削りされる。

軟質須恵器

須恵器の一種であるが、須恵器に比して低温で焼成されるため、灰白色軟質を呈する。器形は杯Ａのみで、７～８期のみ確認されるものである。８点図化した。住居址からの出土は、７期では110住（112）、129住（267、268）、８期では102住（32、41、42）、109住（101）、116住（149）である。この土器は、ほとんどが内外面に黒斑があるとされるが、今回のものはいずれもそれが顕著ではない。法量は、口径が12.8～13.85cmで平均13.24cm、器高が3.75～4.15cmで平均が3.91cmである。

灰釉陶器

ロクロ成形で器面に灰釉のかかる硬質の陶器である。７期に出現する。器形には椀、皿類（皿、段皿）、瓶類（小瓶、長頸壺）がある。今回の調査では31点図化したが、大半は椀、皿類の食膳具で、貯蔵具の瓶類は２点と少ない。初期の黒笹14号窯式のものが４点（102住33：皿、105住65：椀、グリッド326：皿、検出面367：椀）みられる。

椀

ロクロ成形、付高台、外面下半には回転ヘラ削りが施されるものもある。外面底部には回転ヘラ削り痕、ナデ痕、回転糸切り痕などがみられる。17点を図化した。

７期では105住（65、66、68）、111住（119）、118住（198）で出土している。全容のわかるものは119と198で、あるが、２点とも漬け掛け施釉のため混入とみられる。198は内外面に漆が付着している。８期では116住（151、152）で出土している。いずれも全体の明らかなものはない。14期では135住（276、277）でみられるが、いずれも底部のみであり、全容は不明である。15期では121住（215）があるが、底部の小破片のため詳細についてはわからない。

皿類

ロクロ成形、付高台、外面下半には回転ヘラ削りが施されるものがある。外面底部には回転ヘラ削り痕、ナデ痕、回転糸切り痕などがみられる。皿と段皿がある。11点図化した。

７期では99住で皿が１点（８）、段皿が１点（７）、105住で皿が１点（67）出土している。いずれも全容がわかるものではない。口径は12.4～16.5cmである。８期では102住（33）と109住（99）で、いずれも皿で、口径が15.4～15.6cm、器高が2.3～3.1cmである。13期では107住(85、97)でいずれも段皿である。口径は12.2～12.8cm、器高が2.3～2.4cmで、７～８期のものに比して口径は小さい。

瓶類

1221土の287は、長頸壺とみられるものの底部である。内面も施釉されている。高台は付高台である。1243土の293は、小瓶とみられるものの口縁部である。口唇部のみ施釉されている。いずれも全容は明らかでない。

緑釉陶器

７点出土している。このうち小破片１点を除いた６点を図化した。器形には椀、皿、杯、三足盤がみられる。いずれも一部分で、器形という点で述べることのできるものは非常に少ない。しかし特殊なものはみられる。104住（45）は緑彩文陶椀、117住（153）は三足盤脚部、1223土（289）は刻書土器杯である。

緑彩文陶（45）

104住出土である。底部のみ残存している椀である。内面はミガキ、底面はヘラ削りの後に両面施釉される。有段高台であることから近江産とみられる。内面見込部に４弁の花の模様（緑彩花文）が施されることから、緑彩文陶と呼ばれるものの一種であるが、北栗遺跡SB127（註２）或いは第４次調査検出面（註３）などでみられるような、生地に花文を刻んだ後に緑釉を施す陰刻花文ではなく、釉薬の濃淡によって描かれているもので、類例として多賀城跡（宮城県）、上総国分尼寺（千葉県）、更埴条里遺跡・恒川遺跡・和手遺跡（長野県）、八事堂跡（愛知県）、斎宮跡（三重県）等でみられる（註４）。

三足盤（153）

117住貼床下出土である。名古屋市八事堂跡出土の二彩三足盤に類似するものの脚部とみられる破片である（註５）。軟質で、ヘラ削りの後に淡緑色の施釉がされ緻密な造りとなっている。体部はほとんど残存せず脚部のみであ

る。脚部の断面形は八角形を呈する。先端部は外側に刻みが入り、その部分にも八角形の稜線が続いている。出土位置が住居址貼り床の下であるためその意義について述べることはできないが、類例は少なく希少なものではあろう。

刻書土器（289）

1223土出土の杯である。底部のみ残存する。高台は円盤状削り高台で、内面はミガキ、底面は回転ヘラ削りの後に淡緑色の施釉がされる。また底面には「真」とみられる文字が、施釉後に刻まれている。京都産とみられる。

(2) 出土土器群

今回の調査では古代７、８期の他、13～15期までの土器群がみられる。以下、各期土器群の組成と特徴をみていく。

７期の土器群

99住、103住、104住、105住、109住、110住、111住、117住、118住、122住、123住、129住がある。今回の調査で最も多くみられる土器群である。器種は土師器、須恵器、軟質須恵器、黒色土器Ａ、灰釉陶器で構成される。

食器：土師器椀・鉢・高杯、須恵器杯Ａ・杯Ｂ・杯蓋、軟質須恵器杯Ａ、黒色土器杯Ａ・椀・鉢Ａ・皿、灰釉陶器皿・段皿・椀、緑釉陶器皿がみられる。

煮炊具：土師器甕Ｂ・小型甕Ｂ・小型甕Ｄ・円筒型土器がみられる。

貯蔵具：須恵器長頸壺Ａ・甕Ｄ、陶器壺がみられる。

特殊品：須恵器風字硯、緑釉陶器緑彩文陶・三足盤がみられる。

土師器杯或いは椀、高杯、甲斐型杯が104、105、129住でみられるが、混入品の可能性がある。食器の主体は須恵器杯Ａ（22点）、黒色土器杯Ａ（34点）、椀（18点）と多くを占めるが、今回は黒色土器皿も10点と比較的多い。黒色土器杯Ａは大小二法量（Ⅰ、Ⅱ）あり、口径15cm、器高５cmを超える大型のⅠが10点（平均口径16.76cm、器高5.59cm）、小型のⅡが21点（平均口径12.97cm、器高4.19cm）みられ、比率はほぼ１：２である。灰釉陶器もみられるが、小破片が多いため判然としない。105住出土の65は黒笹14号窯式の椀である。煮炊具では甕Ｂ（21点）、小型甕Ｄ（10点）が主体を占める。ハケ目の施される小型甕Ｂは混入であろう。甕Ｂは全体のわかるものは少ない。器高は31cm台、底径は９cm台だが、底径11cmのもの（116、266）もある。小型甕Ｄは全て外面にカキ目がみられる。円筒型土器が117住、122住から出土しているが、口縁部のみと底部のみであり、全体形については不明である。出土位置もカマド周辺というわけではなく、また煤などの付着もないことから煮炊具と判断できず、用途は不明といわざるを得ない。貯蔵具は長頸壺Ａがあり、123住の256は全体がわかるものである。特殊品については前述しているため省略する。

８期の土器群

100住、102住、116住、125住、126住、127住、128住がある。７期に次いで多くみられるが、102住がその主体を占める。器種は土師器、黒色土器Ａ、灰釉陶器、緑釉陶器で構成される。

食器：土師器杯Ａ・椀、黒色土器Ａ杯Ａ・椀・皿、須恵器杯Ａ、灰釉陶器椀、皿がみられる。

煮炊具：土師器甕Ｂ・小型甕Ｄ・円筒型土器がみられる。

貯蔵具：須恵器長頸壺・甕Ａ、壺類がみられる。

食器類では土師器杯Ａが出現する。７点みられ口径平均12.64cm、器高平均3.83cmである。他には黒色土器Ａ杯Ａ、椀が多くみられる。灰釉陶器は３点と数量的には少ない。煮炊具では土師器甕Ｂ・小型甕Ｄがみられる。甕Ｂは底径が9.4～11.4cmで、７期のものより底径は大きくなるが、全体のわかるものは102住の40のみである。小型甕Ｄは15にカキ目がみられる。７期に引き続き円筒型土器が102住、116住から出土している。貯蔵具は102住に須恵器長頸壺Ａ（35）、116住で壺類（150）がみられる。

13期の土器群

67住が該当する。器種は土師器、黒色土器、灰釉陶器、白磁で構成される。貯蔵具はみられない。

食器：土師器杯Ａ、椀、土師器盤Ｂ、黒色土器Ａ椀、灰釉陶器段皿、白磁がある。

煮炊具：羽釜Ａがある。

土師器杯ＡにはＡⅡとＡⅢの２法量みられる。ＡⅡは５点で口径平均9.94cm、器高平均2.7cmである。土師器杯ＡⅢは３点出土しており、口径13.1～13.8cm、器高4.0～4.35cmである。椀は１点のみである。黒色土器Ａ椀は８点みられるが、全体のわかるものは96のみである。白磁皿（98）は口縁のみの小破片である。灰釉陶器皿類は全て段皿である。煮炊具は羽釜Ａが１点（86）みられる。

14期の土器群

119住、135住がある。器種は土師器、灰釉陶器で構成される。貯蔵具はみられない。

食器：土師器杯ＡⅡ、灰釉陶器椀がある。

煮炊具：甑Dがある。

土師器杯AはAII２点のみでAIIIはみられない。口径は8.2cm、9.55cm、器高は1.8cm、1.5cmである。灰釉陶器椀は２点みられるが、いずれも底部のみで朱墨痕があることから、転用硯として用いられたと考える。煮炊具は甑Dが２点みられ、119住の１点（201）は全体のわかるもので、底部に輪積み痕があり、口縁部はロクロナデ成形をされる。鍔は巾1.2cmほどのものが全周に貼り付けられていたとみられる。

15期の土器群

121住が該当する。器種は土師器、灰釉陶器で構成される。貯蔵具はみられない。１点土師器壺が出土しているが、古墳時代中期に属するもので、混入とみられる。

食器：土師器杯AII、杯AIII、椀、灰釉陶器椀がある。

煮炊具：土師器甕

土師器杯AにはAIIとAIIIの２つの法量があるが、杯AIIIは１点（208）しかみられない。土師器杯AIIは口径平均8.88cm、器高平均1.96cmである。灰釉陶器椀（215）には高台に鈍い稜がある。煮炊具は甕とみられる器形のものが１点（214）出土しているが、底径が16cmと大きいことから、鍋といったほうがいいかもしれない。

(3) 文字関係資料

６点出土している。いずれも平安時代の土器である。墨書は117住の須恵器杯蓋１点（192）のみであるが、文字部分の大部分が欠失しているため、文字は不明である。刻書は1223土の緑釉陶器杯（289）で、底部に「真」と刻まれている。ヘラ記号とみられるものは検出面の須恵器杯B１点（366）のみである。器面に墨痕のあるものは２点出土した。いずれも135住出土の灰釉陶器椀（276、277）で、朱墨が付着している。114住では須恵器風字硯（128）が出土しているが、これについては前述しているのでここでは省略する。

C 中世以降の土器・陶磁器

器種には輸入陶磁器、土師器、陶器などがある。19点出土している。このうち10点図化した。

輸入陶磁器

青磁・白磁がみられ、青磁が６点、白磁が７点出土しているが、小破片が多く、図化できるものは少ない。器形としては椀、皿類が多く見受けられる。図化し得たものは白磁３点である。このうち遺構に伴うものは２点で、107住（98）、1222土（288）で出土している。98は玉縁口縁の皿とみられる小破片である。288は小壺で、外面は光沢のある強いミガキが施される。グリッド調査の328は皿とみられる口縁部の小破片である。これらの時期は、古代14～15期（11～12世紀代）から中世にかけてであるとみられる。

土器・陶器

遺構内からの出土は少ない。129住出土の灰釉丸椀（272）は瀬戸・美濃産の江戸時代17世紀後半に属するもので、後世の混入品である。1226土出土の陶器卸皿（290）は東海系施釉陶器で中世II期15世紀後半の室町時代に属するものと考える。今回の調査では表土直下の面を中世に属する第１面としたが、一部の土坑、溝以外の遺構を明瞭に捉えることができなかったため、グリッド調査により遺構・遺物の確認を行った。その過程で多くの遺物を回収し、そのうち図化し得た中世の土器・陶器は、土師器皿（329）、陶器壺或いは甕（330）の２点である。329は精緻に手捏ね成形されるいわゆるかわらけで、中世I期13世紀の鎌倉時代に属するものと考えられる。330は常滑産で、壺か甕とみられるものの口縁部である。その他には東海系無釉陶器の捏ね鉢、山茶碗がみられる。

まとめ

今回の調査では、平安時代前期を中心に多くの遺物の出土がみられたが、一部残存した弥生時代の遺物も出土している。中世の遺物もそれほど多くはないが出土がみられたため、中世遺構の存在を示唆する資料を得ることができたといえる。また緑彩文陶などの特殊遺物は、この遺跡の特殊性を示すものであるといえる。

註１　長野県埋蔵文化財センター 1990「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書４」松本市内その１　総論編
註２　長野県埋蔵文化財センター 1990「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書８」松本市内その５　北栗遺跡
註３　松本市教育委員会 1990「松本市文化財調査報告№82」松本市県町遺跡 －緊急発掘調査報告書－
註４　五島美術館 1998「天平に咲いた華 日本の三彩と緑釉」「特別展天平に咲いた華 日本の三彩と緑釉」図録
註５　中央公論社 1989「日本の陶磁 古代中世篇２」三彩 緑釉 灰釉

第５表　土器観察表

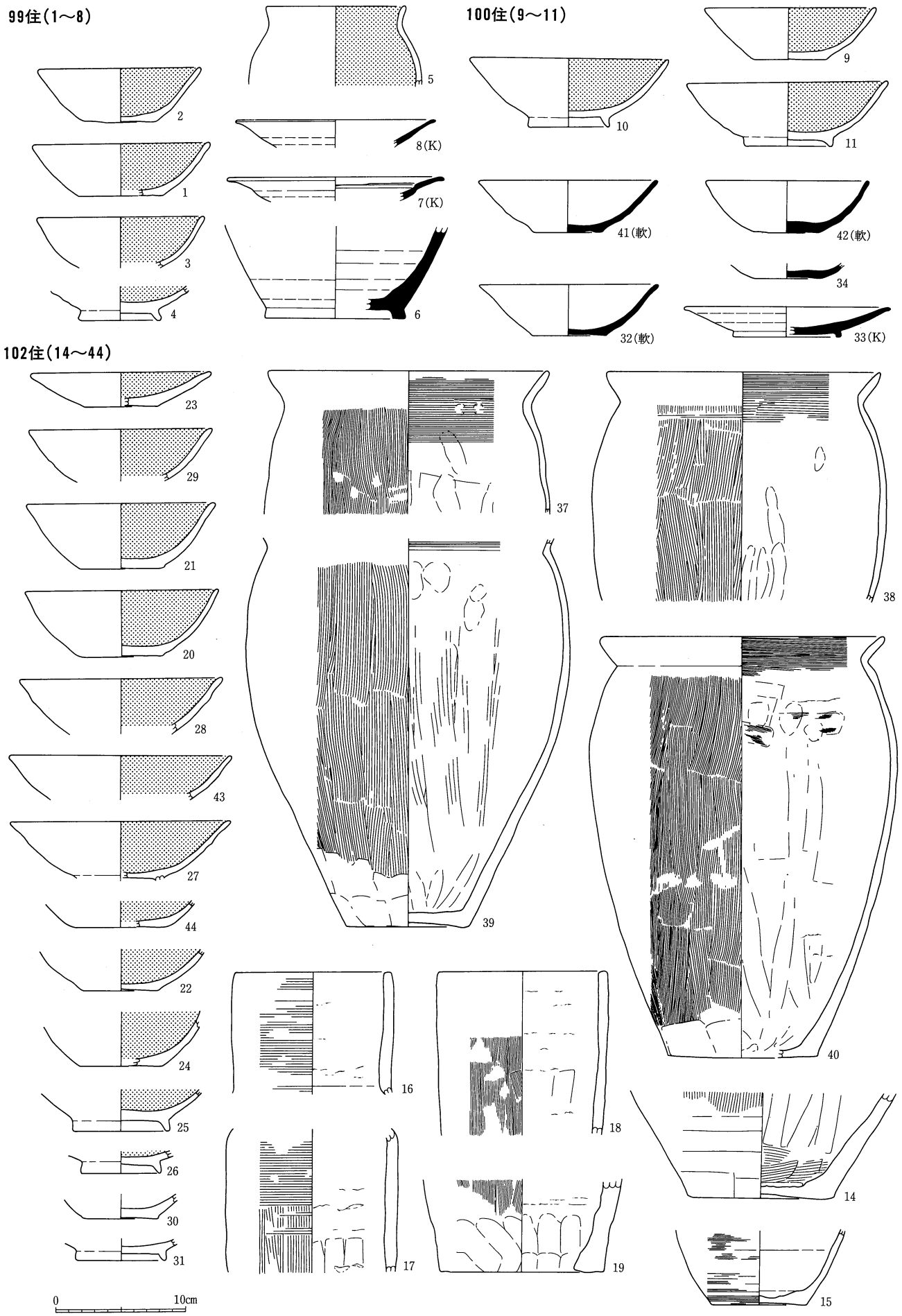
No.	出土地点・注記	種別	器形	規模(cm)			残存度	調整	備考	実測No.
				口径	底径	高さ				
1	99住No.1	黒A	杯AII	(13.6)	(6.4)	(4.0)	口1/8 底1/4	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理		99-1
2	99住フ	黒A	杯AII	(12.5)	5.5	(4.1)	口1/8 底7/8	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理		99-2
3	99住No.7、フ	黒A	椀	(12.8)			口1/3	ロクロナデ、内面ミガキ後黒色処理		99-3
4	99住No.10	黒A	椀		3.3		底完	ロクロナデ、回転糸切、付高台後ナデ、 内面ミガキ後黒色処理		99-4
5	99住No.8	黒A	小型甕D	10.6			口1/3	ロクロナデ、内面ミガキ後黒色処理		99-5
6	99住No.6	須	壺類		(10.7)		底一部	ロクロナデ、回転ヘラ削り、付高台後ナデ	底部内側と外面一部に自然釉付着	99-6
7	99住NW	灰	段皿	(16.5)			口一部	ロクロナデ、ヘラケズリ、刷毛塗り施釉		99-7
8	99住NW	灰	皿	(15.2)			口1/16	ロクロナデ、ヘラケズリ、漬け掛け施釉		99-8
9	100住No.1	黒A	杯AII	12.95	5.5	3.95	口完 底完	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理	口縁歪み有	100-1
10	100住No.2	黒A	椀	15.1	6.2	5.25	口3/4 底完	ロクロナデ、回転糸切、付高台後ナデ、 内面ミガキ後黒色処理	口縁歪み有	100-2
11	100住No.3	黒A	椀	(15.5)	6.7	(4.7)	口1/2 底一部欠	ロクロナデ、回転糸切、付高台後ナデ、 内面ミガキ後黒色処理	口縁歪み有	100-3
12	101住No.1	弥生	甕か台付甕	(14.4)			口1/2	ハケ状工具ナデ後波状文、内面ハケ状工具ナデ後ミガキ、 口縁縄文		101-1
13	101住No.1	弥生	甕か台付甕	(17.6)			口一部	ヨコナデ、簾状文、波状文、内面ナデ、口縁縄文摩滅か		101-2
14	102住No.1	土	甕B		(11.2)		底1/2	ハケメ、ヘラケズリ、底部モミ圧痕、内面ナデ、ハケメ		102-1
15	102住No.5	土	小型甕D		7.4		底完	カキメ、回転糸切、内面ロクロナデ		102-2
16	102住フ	土	円筒型土器	(12.0)			口一部	口縁横ナデ、外面カキメ、内面ナデ		102-3
17	102住No.11	土	円筒型土器					外面カキメ、ハケメ後カキメ、内面ナデ、		102-4
18	102住No.10	土	円筒型土器	(13.0)			口1/4	口縁横ナデ、ロクロナデ、ハケメ、内面ナデ		102-5
19	102住No.13	土	円筒型土器		(12.6)		底1/3	ハケメ、ナデ、内面ナデ、底部ナデ		102-6
20	102住No.3	黒A	杯AII	14.4	6.4	5.05	口1/2 底完	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理		102-7
21	102住No.16	黒A	杯AII	(14.4)	6.6	5.0	口1/12 底一部欠	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理		102-8
22	102住No.19	黒A	杯AII		6.0		底完	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理		102-9
23	102住No.21	黒A	杯AII	(13.8)	(6.0)	(2.6)	口1/6 底1/3	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理		102-10
24	102住NW	黒A	杯A		(6.6)		底1/4	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理		102-11
25	102住No.22	黒A	椀		7.4		底面完 高台一部欠	ロクロナデ、回転糸切、付高台後ナデ、 内面ミガキ後黒色処理		102-12
26	102住フ	黒A	椀		6.1		底面完 高台1/2	ロクロナデ、回転糸切、付高台後ナデ、 内面ミガキ後黒色処理		102-13
27	102住NW	黒A	椀	(16.8)			口一部 底面1/2高台欠	ロクロナデ、回転糸切、付高台後ナデ、 内面ミガキ後黒色処理		102-14
28	102住NW	黒A	椀か	(15.4)			口1/8	ロクロナデ、内面ミガキ後黒色処理		102-15
29	102住フ	黒A	椀か	(14.0)			口1/4	ロクロナデ、内面ミガキ後黒色処理		102-16
30	102住No.26	土	杯A		5.8		底完	ロクロナデ、回転糸切		102-17
31	102住No.14	土	椀		6.9		底面完 高台1/4	ロクロナデ、回転糸切、付高台後ナデ		102-18
32	102住No.11	軟須	杯A	(13.6)	5.8	3.9	口1/12 底完	ロクロナデ、回転糸切		102-19
33	102住No.2	灰	皿	(15.6)	(8.2)	(2.3)	口2/5 底2/5	ロクロナデ、回転ヘラケズリ、付高台後ナデ、 流し掛け施釉	黒笹14号窯	102-20
34	102住フ	須	杯A		5.2		底完	ロクロナデ、回転糸切		102-21
35	102住No.15	須	長頸壺A		5.7		底完	ロクロナデ、回転ヘラケズリ、回転糸切、付高台後ナデ		102-22
36	102住NW	須	甕A					ロクロナデ、タタキメ、内面当て具痕		102-23
37	102住No.11	土	甕B	(21.4)			口1/3	口縁横ナデ、外面ハケメ、内面カキメ、ナデ		102-24
38	102住No.3,4,7,9	土	甕B	(20.8)				口縁横ナデ、外面ハケメ、内面カキメ、ナデ		102-25
39	102住No.3,4,6,7	土	甕B		9.4		底2/3	口縁横ナデ、外面ハケメ、ヘラケズリ、内面カキメ、ナデ		102-26
40	102住No.10,13	土	甕B	21.7	(11.4)	32.2	口5/6 底1/18	口縁横ナデ、外面ハケメ、ヘラケズリ、内面カキメ、ナデ		102-27
41	108住床	軟須	杯A	(13.6)	5.4	4.0	口1/4 底完	ロクロナデ、回転糸切		108-1
42	108住Sベルト	軟須	杯A	(12.4)	5.2	4.0	口1/8 底完	ロクロナデ、回転糸切		108-2
43	108住Nベルト	黒A	杯Aか	(17.0)			口1/10	ロクロナデ、内面ミガキ後黒色処理		108-3
44	108住Nベルト	黒A	杯A		(5.4)		底1/5	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理		108-4
45	104住No.1	緑	椀		(5.4)		底面完 高台一部欠	ミガキ、回転ヘラケズリ、付高台後ナデ	内面見込部緑彩花文有　有段高台 近江産	104-1
46	104住B区	須	杯A	(12.0)	(4.8)	3.2	口1/8 底一部	ロクロナデ、回転糸切		104-2
47	104住B区	須	杯A	(13.3)	(7.9)		口1/5 底一部	ロクロナデ		104-3
48	104住カマド	黒A	杯か椀	(16.0)			口1/7	ロクロナデ、内面ミガキ後黒色処理		104-4
49	104住B区	黒A	杯A		(6.1)		底1/2	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理		104-5
50	104住カマド	土	甕		7.8		底完	ロクロナデ、回転糸切		104-6
51	104住カマド	土	椀	(17.4)			口1/20底面1/2 高台欠	ロクロナデ、回転糸切か		104-7
52	104住J区	土	高杯		(12.2)			ミガキ、ナデ	脚の一部	104-8
53	105住No.1	土	甕B	(24.4)			口1/8	口縁横ナデ、外面ハケメ、内面ナデ		105-1
54	105住No.7	土	甕B	(25.0)			口1/6	口縁横ナデ、外面ハケメ、内面カキメ、ナデ		105-2
55	105住フ	土	小型甕D	(13.2)			口一部	口縁横ナデ、外面カキメ、内面カキメ、ナデ		105-3
56	105住No.2	黒A	杯AII	13.6	6.2	4.5	口1/2 底完	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理		105-4
57	105住フ	黒A	杯AII		6.0		底1/2	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理		105-5
58	105住No.10	黒A	杯AI	(17.4)	(5.6)	(5.6)	口1/4 底一部	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理		105-6
59	105住フ	黒A	杯か椀	(16.6)			口1/4	ロクロナデ、内面ミガキ後黒色処理		105-7
60	105住SW	黒A	杯か椀	(13.2)			口1/4	ロクロナデ、内面ミガキ後黒色処理		105-8
61	105住SE	黒A	杯か椀	(15.0)			口1/8	ロクロナデ、内面ミガキ後黒色処理		105-9
62	105住NE	黒A	椀		(7.2)		底1/2	ロクロナデ、内面ミガキ後黒色処理、付高台後ナデ		105-10
63	105住NE	土	杯か椀	(15.6)			口1/8	ロクロナデ		105-11
64	105住カマド	土	杯か椀	(13.6)			口1/6	ロクロナデ		105-12
65	105住フ	灰	椀か皿		(7.6)		底面1/8 高台1/4	ロクロナデ、回転ヘラケズリ、付高台後ナデ、 流し掛け施釉	黒笹14号窯	105-13
66	105住フ	灰	椀		(6.2)		底3/8	ロクロナデ、回転ヘラケズリ、付高台後ナデ、 流し掛け施釉		105-14
67	105住フ	灰	皿	(12.4)			口一部	ロクロナデ、回転ヘラケズリ、流し掛け施釉		105-15
68	105住Nベルト	灰	椀	(13.8)			口一部	ロクロナデ、回転ヘラケズリ、刷毛塗り施釉		105-16
69	105住床下	須	杯	(13.0)			口1/8	ロクロナデ		105-17
70	105住フ	須	杯	(11.2)			口1/8	ロクロナデ		105-18
71	105住フ	須	杯蓋IVか	(14.0)			口1/10	ロクロナデ		105-19
72	105住Eベルト	須	杯蓋					ロクロナデ、つまみ貼り付け後ナデ		105-20
73	107住No.1	土	杯AIII	13.8	5.4	4.3	口ほぼ完 底完	ロクロナデ、回転糸切		107-1
74	107住NE	土	杯AII	(10.6)	(6.4)	(2.5)	口1/5 底一部	ロクロナデ、回転糸切		107-2
75	107住SW	土	杯AII	(9.2)	(4.8)	(2.5)	口1/6 底1/4	ロクロナデ、回転糸切		107-3
76	107住NW	土	椀	(14.8)			口1/5	ロクロナデ		107-4
77	107住NW	土	杯か椀	(10.6)			口1/10	ロクロナデ		107-5
78	107住フ	土	盤B	(11.0)			口1/6	ロクロナデ		107-6
79	107住SW	黒A	椀	(13.4)			口1/4	ロクロナデ、内面ミガキ後黒色処理		107-7
80	107住Wベルト	黒A	椀	(9.8)			口1/4	ロクロナデ、内面ミガキ後黒色処理		107-8

No.	出土地点・注記	種別	器形	規模(cm)			残存度	調整	備考	実測No.
				口径	底径	高さ				
81	107住SW,S	黒A	椀	(8.8)			1/10	ロクロナデ、内面ミガキ後黒色処理、付高台後ナデ		107-9
82	107住SW	黒A	椀	(10.8)			1/6	ロクロナデ、内面ミガキ後黒色処理		107-10
83	107住No4	黒A	椀		5.1		底完	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理		107-11
84	107住No3	黒A	椀		6.0		底面完 高台7/8	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理		107-12
85	107住フ	灰	段皿	(12.2)	(7.0)	2.3	口1/2 底面1/8 高台1/3	ロクロナデ、回転ヘラケズリ、付高台後ナデ、 漬け掛け施釉		107-13
86	107住No2	土	羽釜D	24.95			口1/2	口縁横ナデ、内外面ロクロナデ後ハケメ、 鍔部貼り付け後ナデ		107-14
87	112住dfベルト	土	杯AII	(9.2)	(5.2)	(2.8)	口1/4 底1/2	ロクロナデ、回転糸切		112-1
88	112住No9	土	杯AIIか		5.0		底完	ロクロナデ、回転糸切		112-2
89	112住No4	土	杯AII	10.3	5.0	2.7	口一部欠 底完	ロクロナデ、回転糸切		112-3
90	112住No3	土	杯AII	10.4	4.7	3.0	口完 底完	ロクロナデ、回転糸切		112-4
91	112住Nベルト、 107住SW	土	杯AIII	(13.1)	5.45	(4.0)	口1/6 底3/4	ロクロナデ、回転糸切		112-5
92	112住No5	土	杯AIII	13.75	5.7	4.35	口一部欠 底完	ロクロナデ、回転糸切		112-6
93	112住No1	土	椀	(15.8)			口1/6 底面完 高台一部欠	ロクロナデ、回転糸切、付高台後ナデ	内面見込部煤付着	112-7
94	112住No11	土	椀か盤		7.3		底完	ロクロナデ、回転糸切、付高台後ナデ	高台内外面煤付着	112-8
95	112住No10	黒A	椀		7.7		底完	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理、 付高台後ナデ	暗文有	112-9
96	112住No2　検	黒A	椀	(14.0)	7.3	(5.25)	口3/8 底完	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理、 付高台後ナデ	暗文有	112-10
97	112住フ、107住 Sベルト	灰	段皿	12.8	7.0	2.4	口3/4 底面完 高台一部欠	ロクロナデ、回転糸切、付高台後ナデ、漬け掛け施釉		112-11
98	112住No6	白磁	皿か	(13.2)			口1/12	ロクロナデ		112-12
99	109住SE	灰	皿	(15.4)	(7.8)	(3.1)	口1/5 底1/8	ロクロナデ、回転糸切、付高台後ナデ、漬け掛け施釉		109-1
100	109住No2	黒A	椀	(15.4)	6.4	(5.3)	口1/4 底ほぼ完	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理、 付高台後ナデ		109-2
101	109住No1	軟須	杯A	13.3	6.0	3.9	口ほぼ完 底完	ロクロナデ、回転糸切		109-3
102	109住SW	黒A	杯A		(6.2)		底1/4	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理		109-4
103	109住SE	土	甕B	(21.0)			口1/5	口縁横ナデ、外面ハケメ、内面カキメ、ナデ		109-5
104	110住SE	土	鉢A	(19.6)			口1/8	ロクロナデ		110-1
105	110住カマド	黒A	杯AII	(11.6)	(6.0)	(3.3)	口1/4 底1/8	ロクロナデ、内面ミガキ後黒色処理		110-2
106	110住カマド	黒A	椀	(17.6)			口1/4	ロクロナデ、内面ミガキ後黒色処理		110-3
107	110住カマド	黒A	椀か杯	(14.8)			口1/4	ロクロナデ、内面ミガキ後黒色処理		110-4
108	110住フ	黒A	椀か杯	(17.8)			口1/8	ロクロナデ、内面ミガキ後黒色処理		110-5
109	110住NW	須	杯A	(12.6)	(5.8)	(3.8)	口1/8 底1/4	ロクロナデ、回転糸切		110-6
110	110住フ	黒A	椀		6.8		底1/4	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理、 付高台後ナデ		110-7
111	110住フ	黒A	杯AII		4.5		底3/4	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理		110-8
112	110住フ	軟須	杯A	(12.8)	6.6	3.8	口1/4 底完	ロクロナデ、回転糸切		110-9
113	110住フ	黒A	鉢A		(12.5)		底1/2	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理		110-10
114	110住SW、フ	黒A	杯AI	(19.4)	(9.0)	(5.3)	口1/2 底1/3	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理	口縁部歪み有	110-11
115	110住SE、フ	黒A	椀	13.9			口1/2 底1/2 高台欠	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理、 付高台後ナデ		110-12
116	110住No4,7,8,9	土	甕B	(21.9)	11.0	(31.2)	口1/2 底1/2	口縁横ナデ、外面ハケメ、ヘラケズリ、内面カキメ、ナデ		110-13
117	110住No4,5,7	土	甕B	(22.4)			口1/2	口縁横ナデ、外面ハケメ、内面カキメ、ナデ		110-14
118	110住No4,10	土	甕B	(11.4)	9.0	31.9	口1/3 底完	口縁横ナデ、外面ハケメ、ヘラケズリ、内面カキメ、ナデ		110-15
119	111住No4	灰	椀	(16.0)	7.2	(5.7)	口1/4 底3/4	ロクロナデ、回転糸切、付高台後ナデ、漬け掛け施釉		111-1
120	111住NE	須	杯A	(13.6)	(7.0)	(3.4)	口1/16 底1/8	ロクロナデ、回転糸切		111-2
121	111住No1	須	杯A		(6.0)		底3/4	ロクロナデ、回転糸切		111-3
122	111住Sベルト	須	杯蓋IVか	(14.9)			口1/8	ロクロナデ	内面自然釉付着	111-4
123	111住No3	陶器	壺類		7.8		口1/2	ロクロナデ、回転糸切、付高台後ナデ	東海系施釉陶器 内面釉付着	111-5
124	111住No2、NW	土	甕B	(22.2)			口1/4	口縁横ナデ、外面ハケメ、内面カキメ、ナデ		111-6
125	113住トレンチ	黒A	杯か椀	(12.0)			口1/3	ロクロナデ、内面ミガキ後黒色処理		113-1
126	113住トレンチ	黒A	杯AII	(13.95)	6.4	4.3	口1/3 底3/5	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理		113-2
127	113住トレンチ	須	杯A		(6.4)		底1/4	ロクロナデ、回転糸切		113-3
128	114住No1 P24、グリッド	須	風字硯	長さ	幅 (15.45)	厚さ (3.35)		上面ナデ、下面ヘラケズリ、脚部貼り付け後器面ケズリ、 側面工具ナデ	上面使用痕、墨痕有	114-1
129	114住No2	黒A	杯AII	12.5	5.7	4.4	口完 底完	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理		114-2
130	114住No3	黒A	杯AII	(12.9)	6.6	(3.8)	口1/3 底3/4	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理		114-3
131	114住No5	黒A	杯AI	(15.5)	(6.3)	(5.2)	口1/12 底3/4	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理		114-4
132	114住フ	黒A	杯AII	(13.5)	(6.4)	(4.0)	口1/8 底1/3	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理		114-5
133	114住No4、フ	黒A	杯AI	(16.4)	(7.2)	(5.7)	口1/4 底3/4	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理		114-6
134	114住No7	黒A	杯AI	(16.2)			口1/8	ロクロナデ、内面ミガキ後黒色処理		114-7
135	114住フ	黒A	皿B	(14.4)			口1/8	ロクロナデ、内面ミガキ後黒色処理		114-8
136	114住フ	黒A	皿B	(12.2)	(6.2)	(2.3)	口1/12 底1/8	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理、 付高台後ナデ		114-9
137	114住フ	須	杯B		(10.4)		底1/8	ロクロナデ、回転ヘラケズリ、付高台後ナデ	外面自然釉付着	114-10
138	114住SE	須	杯BVか		(8.6)		底1/2	ロクロナデ、回転ヘラケズリ、付高台後ナデ	外面自然釉付着	114-11
139	114住フ	須	甕D	(21.0)			口1/6	口縁横ナデ、ロクロナデ		114-12
140	115住カマド	土	杯AII	(9.55)	4.6	1.8	口1/2 底完	ロクロナデ、回転糸切		115-1
141	116住No8,9,13	土	甕B	(19.8)	(9.6)	(31.3)	口1/10 底1/4	口縁横ナデ、外面ハケメ、ヘラケズリ、内面カキメ、ナデ		116-1
142	116住No9,10	土	円筒型土器	14.0			口7/8	口縁横ナデ、外面ハケメ、内面カキメ、ナデ		116-2
143	116住No9,14	土	円筒型土器	(11.2)			口3/4	口縁カキメ、外面ハケメ、内面ナデ		116-3
144	116住No8、フ	土	円筒型土器		(10.8)		底1/3	外面ハケメ、ヘラケズリ、内面ナデ、底部横ナデ		116-4
145	116住No11,12	土	杯AII	(13.4)	5.8	4.1	口1/2 底完	ロクロナデ、回転糸切		116-5
146	116住NE,フ	土	杯AII	(12.9)	6.0	3.8	口1/4 底4/5	ロクロナデ、回転糸切		116-6
147	116住No9	土	杯AII	(12.7)	5.9	4.35	口1/10 底完	ロクロナデ、回転糸切	口縁歪み有か	116-7
148	116住No11	土	杯AII	13.5	7.2	3.95	口5/8 底完	ロクロナデ、回転糸切		116-8
149	116住No5	軟須	杯A	13.4	5.8	3.8	口完 底完	ロクロナデ、回転糸切		116-9
150	116住No3,4,16	須	壺類		8.4		底面完 高台一部欠	回転ヘラケズリ、回転糸切、付高台後ナデ、 内面ロクロナデ	外面上部自然釉付着 高台一部タール付着 内外面一部煤付着	116-10
151	116住NE,フ	灰	椀	(15.4)			口一部	ロクロナデ、回転ヘラケズリ、漬け掛け施釉か		116-11
152	116住No18	灰	椀		7.9		底完	ロクロナデ、回転糸切、付高台後ナデ、漬け掛け施釉		116-12
153	117住床下	緑	三足盤					内面ロクロナデ、脚部ヘラケズリ	脚部のみ	117-1
154	117住No12	土	小型甕D	(13.4)			口1/4	口縁横ナデ、カキメ、内面カキメ、ナデ		117-2
155	117住No21	土	小型甕D	10.1	5.9	9.4	口3/4 底完	口縁横ナデ、カキメ、内面カキメ、ナデ		117-3
156	117住No19	黒A	鉢A		(10.4)		底1/3	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理		117-4
157	117住Wベルト	土	小型甕D	(10.4)			口1/4	口縁横ナデ、カキメ、内面カキメ、ナデ		117-5
158	117住No28	土	甕B	(20.2)			口1/4	口縁横ナデ、外面ハケメ、内面カキメ、ナデ		117-6
159	117住No18	土	甕B		(8.4)		底4/5	外面ハケメ、内面ナデ		117-7

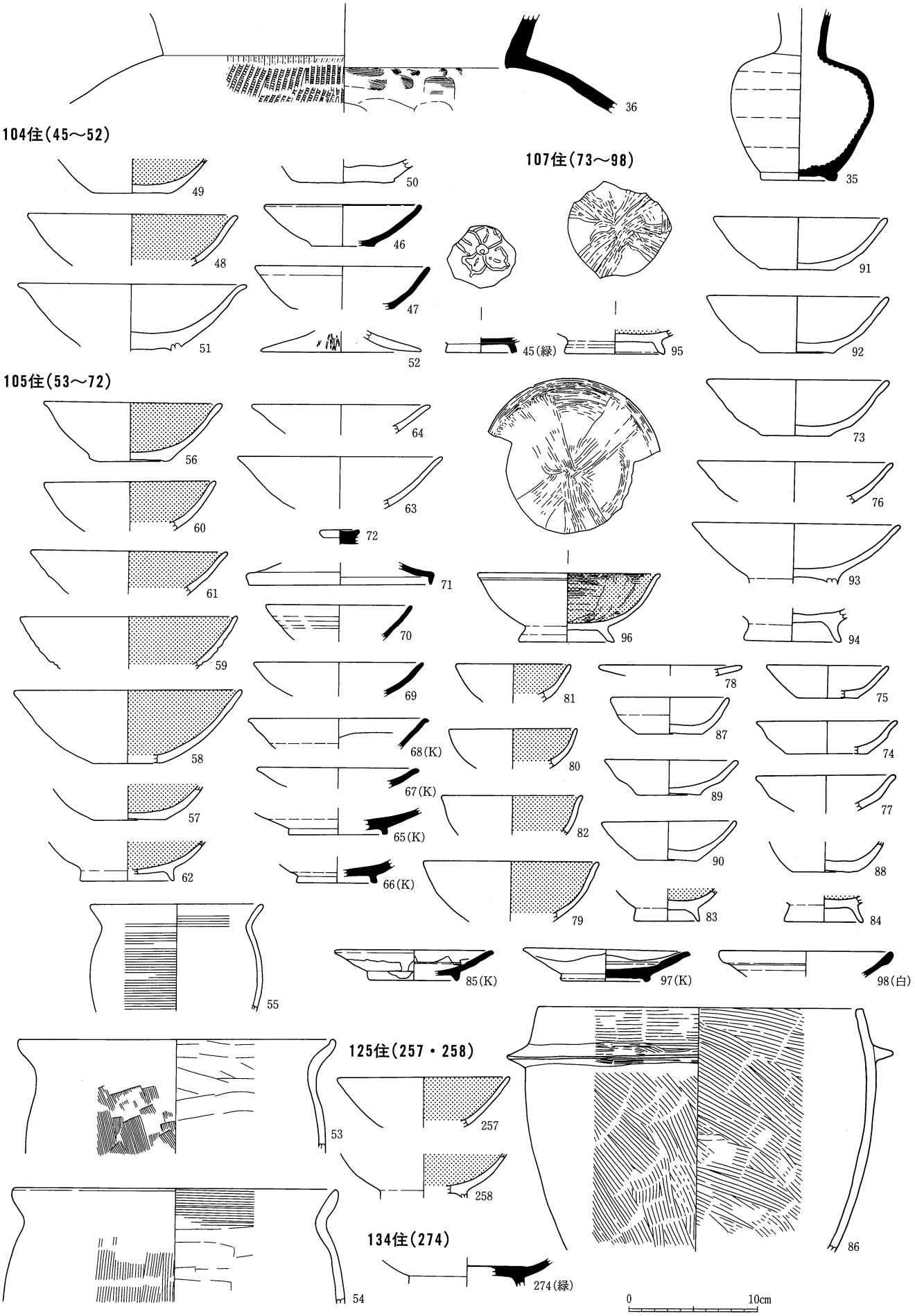
No.	出土地点・注記	種別	器形	規模(cm)			残存度	調整	備考	実測No.
				口径	底径	高さ				
160	117住No.28	土	甕B	(20.4)			口3/4	口縁横ナデ、外面ハケメ、内面カキメ、ナデ		117-8
161	117住No.20,N	土	円筒型土器		(9.8)		底1/3	外面ハケメ、ケズリ、内面ナデ、底部横ナデ		117-9
162	117住カマド	土	甕B		(10.2)		底一部	外面ハケメ、内面ナデ		117-10
163	117住NW床	須	甕類		(12.0)		底1/4	外面タタキメ、内面ナデ、底部ナデ		117-11
164	117住No.1	黒A	杯AⅠ	16.0	7.2	5.5	口完 底完	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理		117-12
165	117住Eベルト	黒A	杯AⅡ	(13.6)	(6.4)	4.2	口1/8 底1/2	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理		117-13
166	117住S、NE	黒A	杯AⅡ	(13.0)	(6.8)	4.0	口1/4 底完	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理		117-14
167	117住S、NE	黒A	杯AⅠ	(15.8)	(7.0)	5.0	口1/4 底1/5	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理		117-15
168	117住No.4	黒A	杯AⅠ	16.0	(7.0)	5.0	口1/4 底1/4	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理		117-16
169	117住No.26、フ	黒A	杯AⅡ	(12.8)	(6.2)	4.2	口1/4 底2/3	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理		117-17
170	117住カマド	黒A	杯AⅡ	13.0	6.0	4.7	口2/3 底完	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理		117-18
171	117住カマド	黒A	杯AⅡ	13.0	7.0	3.3	口3/4 底完	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理		117-19
172	117住No.22、床	黒A	杯AⅠ	18.5	8.0	7.2	口1/2 底完	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理		117-20
173	117住No.3	黒A	皿B	14.4	6.9	3.3	口完 底完	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理、付高台後ナデ		117-21
174	117住No.4	黒A	皿B	13.4	6.6	3.1	口1/2 底完	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理、付高台後ナデ		117-22
175	117住No.16	黒A	皿B	(13.6)	(6.2)	3.0	口1/3 底面完 高台一部欠	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理、付高台後ナデ		117-23
176	117住N	黒B	皿B	13.8	7.3	2.6	口一部欠 底完	内外面ミガキ後黒色処理、回転ヘラケズリ、付高台後ナデ		117-24
177	117住S	黒A	皿B	(13.4)	(6.2)	2.7	口1/8 底面完 高台一部欠	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理、付高台後ナデ		117-25
178	117住S	黒A	椀	(16.6)			口1/4	ロクロナデ、内面ミガキ後黒色処理		117-26
179	117住No.6	黒A	椀	(15.6)				ロクロナデ、内面ミガキ後黒色処理		117-27
180	117住カマド	黒A	杯AⅡ	(12.8)	(6.0)	3.9	口1/4 底2/3	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理		117-28
181	117住フ	黒A	椀	16.0	7.4	5.6	口5/6 底完	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理、付高台後ナデ		117-29
182	117住カマド	黒A	皿B	(12.6)			口1/6 底一部 高台欠	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理		117-30
183	117住NW床	須	杯A	12.3	5.0	3.2	口2/3 底完	ロクロナデ、回転糸切		117-31
184	117住SEフ	須	杯A	(13.2)	(5.6)	4.3	口一部 底4/5	ロクロナデ、回転糸切		117-32
185	117住NE床	須	杯A	(13.4)	(5.0)	3.1	口一部 底1/2	ロクロナデ、回転糸切		117-33
186	117住カマド	土	甕B	(20.4)			口1/3	口縁横ナデ、外面ハケメ、内面カキメ、ナデ		117-34
187	117住NW角	須	杯A	(13.0)	(6.6)	3.6	口1/4 底1/3	ロクロナデ、回転糸切		117-35
188	117住No.14	須	杯B		(6.6)		底面完 高台一部欠	ロクロナデ、回転糸切、付高台後ナデ		117-36
189	117住NW角	須	杯蓋B					ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ、つまみ貼り付け後ナデ		117-37
190	117住No.15	黒A	椀		(7.4)		底完	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理、付高台後ナデ		117-38
191	117住NW角	黒A	椀		(6.2)		底完	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理、付高台後ナデ		117-39
192	117住No.11	須	杯蓋					ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ、つまみ貼り付け後ナデ	墨書有り	117-40
193	118住Wフ	黒A	椀	(14.1)			口1/8	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理		118-1
194	118住No.4	須	杯A	12.8	5.9	3.35	口5/8 底完	ロクロナデ、回転糸切		118-2
195	118住No.3	須	杯A	12.9	6.0	2.9	口1/2 底完	ロクロナデ、回転糸切		118-3
196	118住床	須	杯A	(12.4)	(6.0)	(2.8)	口1/6 底一部	ロクロナデ、回転糸切		118-4
197	118住床	土	小型甕D	(10.2)			口1/3	口縁横ナデ、ロクロナデ後カキメ、内面カキメ、ナデ		118-5
198	118住SE、検	灰	椀	(15.5)	(7.0)	(5.5)	口1/8 底1/4	ロクロナデ、回転糸切、付高台後ナデ、漬け掛け施釉	内外面漆痕有り	118-6
199	119住S	土	杯AⅡ	(8.2)	(4.2)	(1.5)	口1/10 底1/2	ロクロナデ、回転糸切		119-1
200	119住フ	土	甑D	(27.6)			口1/6	口縁横ナデ、外面ロクロナデ、内面ナデ、鍔部貼り付け後ナデ		119-2
201	119住S、SE	土	甑D	23.6	20.9	23.55	口1/6 底1/4	口縁横ナデ、外面ロクロナデ、タタキメ、内面ナデ、鍔部貼り付け後ナデ	内面煤付着	119-3
202	121住検	土	杯AⅡ	(9.2)	5.0	2.5	口1/3 底完	ロクロナデ、回転糸切		121-1
203	121住No.7、SW	土	杯AⅡ	(8.9)	5.5	1.55	口1/3 底完	ロクロナデ、回転糸切		121-2
204	121住No.2	土	杯AⅡ	8.2	4.9	1.6	口7/8 底完	ロクロナデ、回転糸切	底部歪み有	121-3
205	121住No.4	土	杯AⅡ	(9.2)	(5.3)	(2.0)	口1/6底 ほぼ完	ロクロナデ、回転糸切	口縁部歪み有か	121-4
206	121住Sベルト	土	壺	(15.2)			口1/8	口縁横ナデ、内外面ミガキ	古墳時代中期	121-5
207	121住No.1	土	杯AⅡ	(9.3)	(5.4)	(1.8)	口1/2 底完	ロクロナデ、回転糸切		121-6
208	121住No.3	土	杯AⅢ	(14.5)	(6.2)	(3.7)	口1/4 底完	ロクロナデ、回転糸切		121-7
209	121住検	土	杯AⅡ	(9.9)	(6.4)	(1.7)	口1/12 底1/4	ロクロナデ、回転糸切		121-8
210	121住SE上層	土	杯AⅡ	(8.6)	(4.1)	(2.2)	口1/16 底1/2	ロクロナデ、回転糸切		121-9
211	121住NW上層	土	杯AⅡ	(8.0)	(4.4)	(2.0)	口1/12 底1/8	ロクロナデ、回転糸切		121-10
212	121住SE上層	土	椀か		7.0		底3/4	ロクロナデ、回転糸切、付高台後ナデ		121-11
213	121住SE上層	土	杯AⅡ	(8.6)	(4.7)	(2.3)	口1/12 底1/2	ロクロナデ、回転糸切	内外面タール付着	121-12
214	121住NE上層	土	甕か		(16.6)		底1/3	内外面ロクロナデ		121-13
215	121住検	灰	椀		(8.8)		底1/16	ロクロナデ、回転糸切、付高台後ナデ、漬け掛け施釉か		121-14
216	122住No.13	土	甕B	(21.4)			口1/5	口縁横ナデ、外面ハケメ、内面カキメ、ナデ		122-1
217	122住No.8,32	土	甕B	(23.0)			口1/6	口縁横ナデ、外面ハケメ、内面カキメ、ナデ		122-2
218	122住カマド-2	土	甕B	(22.2)			口1/5	口縁横ナデ、外面ハケメ、内面カキメ、ナデ		122-3
219	122住カマド-5	土	甕B	(20.6)			口一部	口縁横ナデ、外面ハケメ、内面カキメ、ナデ		122-4
220	122住検	土	小型甕B	(13.4)			口1/8	口縁横ナデ、外面ハケメ、内面ナデ		122-5
221	122住No.21,28	土	甕B					外面ハケメ、内面ナデ		122-6
222	122住No.12,16	土	円筒型土器	(11.4)			口1/12	外面ハケメ、内面ナデ		122-7
223	122住カマド-9	土	小型甕D	(9.6)			口1/4	口縁横ナデ、外面カキメ、内面カキメ、ナデ		122-8
224	122住カマド-7	土	小型甕D	(10.8)	(6.4)	(9.3)	口1/4 底一部	口縁横ナデ、外面カキメ、内面カキメ、ナデ		122-9
225	122住No.27	土	小型甕D	(13.2)			口1/5	口縁横ナデ、外面カキメ、内面カキメ、ナデ		122-10
226	122住NW床下	土	小型甕D	(12.8)			口1/4	口縁横ナデ、外面カキメ、内面カキメ、ナデ		122-11
227	122住床下	土	小型甕D	(16.0)			口1/8	口縁横ナデ、外面カキメ、内面カキメ、ナデ		122-12
228	122住NW床下	黒A	鉢A	(22.4)			口1/8	ロクロナデ、内面ミガキ後黒色処理		122-13
229	122住No.10	黒A	皿B	(13.8)	7.2	2.6	口2/5 底完	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理、付高台後ナデ		122-14
230	122住No.14	黒A	椀	(15.2)	6.8	5.0	口1/4 底完	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理、付高台後ナデ		122-15
231	122住No.17,18	黒A	椀	(13.2)			口一部 底面完 高台欠	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理		122-16
232	122住SW	黒A	皿か	(12.2)			口1/3	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理		122-17
233	122住No.4	黒A	杯AⅠ	(16.4)	7.2	5.8	口1/5 底7/8	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理		122-18
234	122住No.31	黒A	杯AⅡ	13.4	6.2	3.9	口一部欠 底完	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理	口縁歪み有 口縁タール付着	122-19
235	122住No.12.15	黒A	杯AⅡ	(12.9)	6.8	3.8	口1/4 底7/8	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理	口縁歪み有	122-20
236	122住Sベルト	黒A	杯AⅡ	(13.0)	6.0	3.7	口1/8 底1/2	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理		122-21
237	122住床	黒A	杯AⅡ	(12.2)	(5.2)	(3.7)	口1/12 底一部	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理		122-22

No.	出土地点・注記	種別	器形	規模(cm)			残存度	調整	備考	実測No.
				口径	底径	高さ				
238	122住No.7	黒A	椀		6.9		底面完 高台一部欠	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理、 付高台後ナデ		122-23
239	122住No.9	黒A	椀		6.6		底7/8 高台3/4	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理、 付高台後ナデ		122-24
240	122住No.3	黒A	皿か	(13.0)			口1/4	ロクロナデ、内面ミガキ後黒色処理		122-25
241	122住検	須	杯A	(13.0)	6.7	4.4	口1/10 底2/3	ロクロナデ、回転糸切		122-26
242	122住検	須	杯A	(12.4)	(6.6)	3.7	口1/4 底3/4	ロクロナデ、回転糸切		122-27
243	122住カマド	須	杯A	(12.4)	7.0	(3.6)	口1/8 底1/2	ロクロナデ、回転糸切		122-28
244	122住カマド	須	杯A	13.1	7.0	3.4	口2/5 底4/5	ロクロナデ、回転糸切	口縁歪み有	122-29
245	122住SE	須	杯A	(12.2)	(6.8)	(3.7)	口3/8 底1/4	ロクロナデ、回転糸切		122-30
246	122住NW床下	須	杯	(13.6)				ロクロナデ、回転糸切		122-31
247	122住SE	須	長頸壺A	(7.8)			口1/8	口縁横ナデ、ロクロナデ	内外面自然釉付着	122-32
248	123住カマド	土	甕B	(22.5)			口1/4	口縁横ナデ、外面ハケメ、内面カキメ、ナデ		123-1
249	123住No.3,床	黒B	皿B	13.15	6.45	1.65	口1/2 底面一部欠 高台3/4	内外面ミガキ後黒色処理、回転ヘラケズリ、付高台後ナデ		123-2
250	123住No.6	黒A	杯AII	(12.6)	(5.3)	(3.7)	口1/4 底3/4	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理		123-3
251	123住NE	黒A	椀		6.7		底面完 高台一部欠	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理、 付高台後ナデ		123-4
252	123住NE	須	杯A	(13.1)	(6.3)	(3.4)	口1/10 底1/3	ロクロナデ、回転糸切		123-5
253	123住NW	須	杯A	(13.0)	(5.4)	(3.25)	口1/10 底1/8	ロクロナデ、回転糸切		123-6
254	123住NE	須	杯A	(12.0)	(5.6)	(3.05)	口1/6	ロクロナデ、回転糸切		123-7
255	123住No.2	須	杯A	13.15	6.0	3.8	口1/2 底2/3	ロクロナデ、回転糸切	外面自然釉付着	123-8
256	123住No.9,13	須	長頸壺A	(10.5)	11.0	23.35	口一部 底7/8	口縁横ナデ、ロクロナデ、回転ヘラケズリ、付高台後ナデ 取手貼り付け後ナデ	肩部取手一つ有	123-9
257	125住NW	黒A	杯AII	(13.2)			口1/4	ロクロナデ、内面ミガキ後黒色処理		125-1
258	125住NW	黒A	椀				底面一部	ロクロナデ、内面ミガキ後黒色処理、付高台後ナデ		125-2
259	126住No.1	土	椀	15.2	7.9	5.2	口3/4 底完 高台一部欠	ロクロナデ、回転糸切、付高台後ナデ	内面見込部煤付着	126-1
260	127住No.2	土	杯AII	11.2	5.6	3.45	口7/8 底完	ロクロナデ、回転糸切	器形歪み大	127-1
261	127住SE	土	杯AII	12.15	5.2	3.3	口2/5 底完	ロクロナデ、回転糸切	口縁部歪み有	127-2
262	127住No.3	土	小型甕Dか		6.3		底完	ロクロナデ、回転糸切	器形歪み有	127-3
263	128住No.1	黒A	皿B	13.4	5.45	3.15	口1/2 底完	ロクロナデ、内面ミガキ後黒色処理、付高台後ナデ		128-1
264	128住Eベルト	土	甕か		7.5		底一部欠	ロクロナデ、回転糸切		128-2
265	129住No.2,5,床	土	甕B	(23.6)			口1/4	口縁横ナデ、外面ロクロナデ後ハケメ、内面カキメ、ナデ		129-1
266	129住No.8	土	甕B		(11.0)		底一部	外面ロクロナデ後ハケメ、内面ナデ		129-2
267	129住No.3、検	軟須	杯A	(13.0)	6.8	(3.75)	口1/4 底完	ロクロナデ、回転糸切		129-3
268	129住No.7	軟須	杯A	13.85	5.8	4.15	口3/4 底完	ロクロナデ、回転糸切		129-4
269	129住検	黒A	杯A		(6.4)		底1/4	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理		129-5
270	129住	土	杯C		(4.4)		底1/3	ロクロナデ、ケズリ、内面ロクロナデ後ミガキ、回転糸切	甲斐型杯	129-6
271	129住	須	杯BIIIか		(12.4)		底一部	ロクロナデ、付高台後ナデ		129-7
272	129住	陶器	灰釉丸椀		(4.2)		底1/4 高台1/3	ロクロナデ、ケズリ、付高台後ナデ	17C後半　瀬戸美濃 漆継ぎ痕有	129-8
273	133住	黒A	杯AII	11.9	6.05	3.2	口3/4 底完	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理		133-1
274	134住±2No.1	緑	椀				底面一部	ロクロナデ、内面ロクロナデ後ミガキ、回転ヘラケズリ 付け高台後ナデ	内面見込部トチン痕有	134-1
275	135住No.2	土	杯AII	(9.75)	(4.8)	1.85	口1/4 底完	ロクロナデ、回転糸切	側面～底面煤付着	135-1
276	135住フ	灰	椀				底面1/3	ロクロナデ、回転糸切、付高台後ナデ、漬け掛け施釉	底面朱墨痕有	135-2
277	135住No.1	灰	椀		8.6		底完	ロクロナデ、回転ヘラケズリ、付高台後ナデ、施釉	内面見込部に使用痕、 重焼痕有 底面に薄く朱墨痕有	135-3
278	136住No.1	土	甕B		(9.7)		底1/4	外面ハケメ、内面ナデ		136-1
279	1204±フ	黒A	杯か椀	(17.2)			口1/8	ロクロナデ、内面ミガキ後黒色処理		±1204-1
280	1204±フ	黒A	杯か鉢		(8.4)		底1/5	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理		±1204-2
281	1204±フ	須	杯A	(13.6)	(6.4)	(3.3)	口一部 底1/4	ロクロナデ、回転糸切		±1204-3
282	1204±No.1	土	小型甕D		(7.6)		底1/4	ロクロナデ、回転糸切		±1204-4
283	1204±フ	須	杯A	13.0	(5.55)	3.4	口2/3 底一部	ロクロナデ、回転糸切	内面自然釉付着	±1204-5
284	1209±フ	土	杯AII	9.4	4.7	2.0	口3/4 底完	ロクロナデ、回転糸切		±1209-1
285	1221±フ	黒A	椀	(15.1)			口1/6	ロクロナデ、内面ミガキ後黒色処理	黒抜け	±1221-1
286	1221±フ	土	杯AII	(14.6)	(6.7)	4.4	口1/5 底一部	ロクロナデ、回転糸切		±1221-2
287	1221±No.1	灰	長頸壺か		7.4		底一部欠	回転ヘラケズリ、回転糸切、付高台後ナデ、内面ナデ、 施釉		±1221-3
288	1222±No.1,2	白磁	小壺					回転ヘラケズリ、内面ロクロナデ		±1222-1
289	1223±フ	緑	杯		(5.8)		底一部欠	内面ミガキ、回転ヘラケズリ、円盤状ケズリ高台	底面に刻書「真」 京都産	±1223-1
290	1226±フ	陶器	卸皿	(14.5)	6.9	3.35	口1/6 底2/3	口縁横ナデ、ロクロナデ、内面卸し目	東海系施釉陶器 底面煤付着	±1226-1
291	1228±フ	黒A	小型甕	(10.6)			口1/8	口縁横ナデ、外面ミガキ、内面ミガキ後黒色処理		±1228-1
292	1243±フ	土	杯A		(4.9)		底1/3	ロクロナデ、回転糸切		±1243-1
293	1243±フ	灰	小瓶か	(6.1)			口1/8	口縁横ナデ、ロクロナデ、施釉		±1243-2
294	1244±フ	土	盤BII	(9.6)	(5.0)	2.8	口1/8 底1/2	ロクロナデ、回転糸切、付高台後ナデ		±1244-1
295	1244±フ	灰	椀		7.0		底2/3	ロクロナデ、回転糸切、付高台後ナデ、漬け掛け施釉		±1244-2
296	1246±フ	土	小型の壺か	(11.5)			口1/8	口縁横ナデ、内外面ナデ		±1246-1
297	1203溝フ	土	杯AII	(9.4)	(5.0)	2.2	口1/6 底1/2	ロクロナデ、回転糸切		溝1203-1
298	G N6E6	緑	皿	(11.0)	(6.3)	2.3	口1/3 底1/4 高台1/8	ロクロナデ、回転糸切、付高台後ナデ	口縁タール・煤付着	G-1
299	G NS0EW0	土	甕B	(21.8)			口1/8	口縁横ナデ、外面ロクロナデ後ハケメ、内面カキメ、ナデ		G-2
300	G NS0EW0	土	甕B	(21.0)			口1/4	口縁横ナデ、外面ロクロナデ後ハケメ、内面カキメ、ナデ		G-3
301	G NS0EW0	土	小型甕D		7.0		底一部欠	外面ロクロナデ後カキメ、内面ロクロナデ、回転糸切		G-4
302	G N8W9	土	杯AII	(10.9)	(5.0)	(2.4)	口1/12 底1/3	ロクロナデ、回転糸切、底部藁？圧痕		G-5
303	G N3W6	土	杯AII	9.95	4.3	2.95	口一部欠 底完	ロクロナデ、回転糸切		G-6
304	G N3E9	土	椀				底面完 高台一部欠	ロクロナデ、付高台後ナデ		G-7
305	G S3E6	軟須	杯A	(13.8)	5.8	(4.1)	口1/6 底完	ロクロナデ、回転糸切		G-8
306	G N8E6	黒A	鉢A		7.0		底完	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理		G-9
307	G N6E3	黒A	皿B	(14.4)			口一部	ロクロナデ、内面ミガキ後黒色処理		G-10
308	G N6E3	黒B	椀	(13.0)			口1/8	ロクロナデ、内外面ミガキ後黒色処理		G-11
309	G N3W3	黒A	杯AII	(13.5)	(6.0)	(4.05)	口1/4 底1/3	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理		G-12
310	G NS0E3	黒A	杯D	(16.35)			口1/8	外面ミガキ、ケズリ、内面ミガキ後黒色処理	古墳時代後期	G-13
311	G N8E6	黒A	杯AII	13.1	5.7	4.45	口一部欠 底一部欠	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理	内面見込部線刻有	G-14
312	G NS0E6	灰	椀	(13.2)			口1/16	ロクロナデ、刷毛塗り施釉		G-15
313	G NS0E3	灰	椀か	(17.4)	(7.7)	(3.25)	口1/20 底面一部 高台1/4	ロクロナデ、ヘラケズリ、付高台後ナデ、漬け掛け施釉か		G-16
314	G NS0E3	灰	皿		(6.8)		底一部 高台1/3	ヘラケズリ、付高台後ナデ、内面ロクロナデ、 漬け掛け施釉	内面見込部使用痕有	G-17

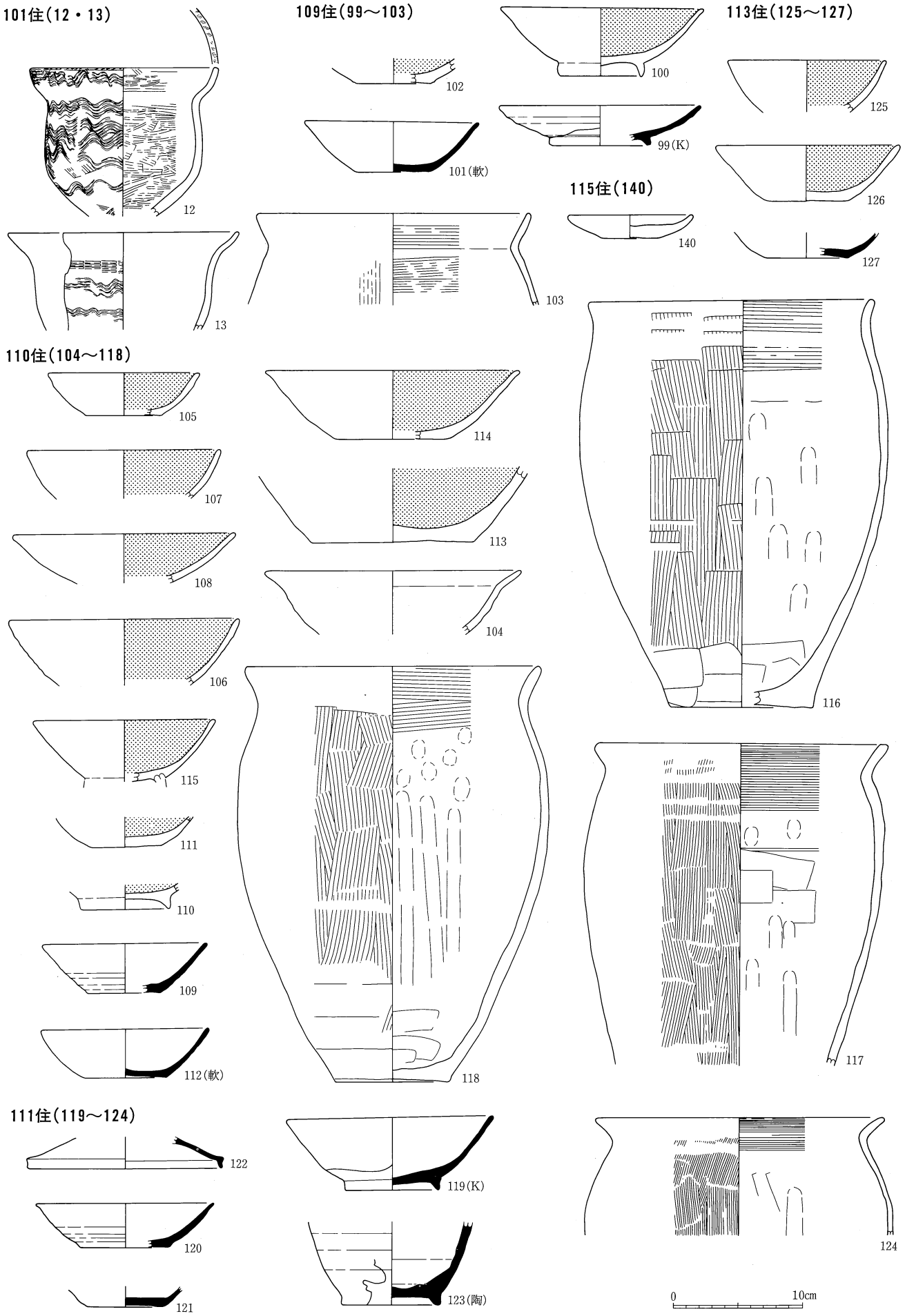
No.	出土地点・注記	種別	器形	規模(cm)			残存度	調整	備考	実測No.
				口径	底径	高さ				
315	G N8EW0	須	杯B		(8.4)		底面1/3 高台1/6	ロクロナデ、回転ヘラケズリ、付高台後ナデ		G-18
316	G N3EW0	須	壺類		(10.6)		底1/4	ロクロナデ、回転ヘラケズリ		G-19
317	G N6E3	須	甕Aか					外面ロクロナデ、タタキメ、内面ロクロナデ、当て具痕		G-20
318	G N3W6	須	杯A		(5.2)		底1/2	ロクロナデ、回転糸切	内外面線刻 内面漆付着	G-21
319	G N6EW0	弥生	台付甕				底一部	内外面ミガキ、脚部内面ナデ		G-22
320	G N6E3	土	杯AII	(8.4)	(3.1)	(1.75)	口1/8 底一部	ロクロナデ、回転糸切		II検G-1
321	G N3W6	土	椀か盤B		(5.3)		底面完 高台一部	ロクロナデ、回転糸切、付高台後ナデ		II検G-2
322	G S6E9	土	杯AII	9.45	4.3	1.7	口3/8 底一部欠	ロクロナデ、回転糸切	内面炭化物付着 口縁部歪み有	II検G-3
323	G N6E3	黒A	杯AII	(12.35)	6.7	(3.6)	口1/8 底完	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理		II検G-4
324	G N6E3	須	杯A		(6.0)		底1/4	ロクロナデ、回転糸切		II検G-5
325	G N3EW0	須	杯A	(13.1)	(6.4)	(3.35)	口1/4 底1/4	ロクロナデ、回転糸切		II検G-6
326	G N3E6	灰	皿か		(7.2)		底面一部 高台1/8	ロクロナデ、回転ヘラケズリ、付高台後ナデ、 流し掛け施釉	黒笹14号窯	II検G-7
327	G N8W6	灰	皿B	(13.6)	(7.2)	(2.8)	口1/12 底面一部 高台1/6	ロクロナデ、回転ヘラケズリ、付高台後ナデ 漬け掛け施釉	重ね焼き痕有	II検G-8
328	G N6W6	白磁	皿	(10.0)			口1/10	ロクロナデ		II検G-9
329	G N8W6	中世 土師器	皿IB1	(8.9)	(7.2)	(1.45)	口1/8 底1/3	手づくね、底部ナデ	かわらけ	II検G-10
330	G NS0E20	陶器	壺か甕	(23.0)			口1/8	口縁横ナデ、内外面ロクロナデ	常滑産	II検G-11
331	G N6E3	緑	小椀				口一部	口縁横ナデ、内外面ミガキ		N6E3-1
332	トレンチ	土	小椀	(10.2)			口1/3	ロクロナデ		T-1
333	トレンチ	土	甕		(10.6)		底1/6	内外面ナデ		T-2
334	トレンチ	土	小型甕D	(13.7)			口1/5	口縁横ナデ、外面カキメ、内面ナデ		T-3
335	トレンチ	黒A	杯AII	(12.8)	(6.8)	3.35	口1/4 底2/5	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理		T-4
336	トレンチ	黒A	杯AIIか		(6.8)		底2/5	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理		T-5
337	トレンチ	黒A	鉢A		(9.4)		底1/4	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理		T-6
338	トレンチ	黒A	椀		(7.2)		底1/3	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理、 付高台後ナデ		T-7
339	トレンチ	黒A	椀		(6.8)		底3/4	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理、 付高台後ナデ		T-8
340	トレンチ	黒B	椀		(5.8)		底1/4	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理、 付高台後ナデ		T-9
341	トレンチ	黒A	鉢A	(34.0)			口1/16	ロクロナデ、内面ミガキ後黒色処理		T-10
342	トレンチ	須	杯A		5.5		底4/5	ロクロナデ、回転糸切		T-11
343	トレンチ	須	杯	(16.4)			口1/8	ロクロナデ		T-12
344	トレンチ	須	杯	(13.0)			口1/14	ロクロナデ		T-13
345	トレンチ	須	杯蓋IIかIII	(15.6)			口1/12	ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ		T-14
346	トレンチ	須	杯B		(8.4)		底3/8	ロクロナデ、回転ヘラケズリ、付高台後ナデ	底面自然釉付着 内面墨痕有	T-15
347	トレンチ	須	長頸壺か		(8.4)		底2/5	回転ヘラケズリ、内面ロクロナデ、静止糸切、 付高台後ナデ	高台端部重焼痕か 外面及び内面見込部 自然釉付着	T-16
348	トレンチ	灰	小椀	(10.0)			口1/6	ロクロナデ、施釉		T-17
349	トレンチ	灰	段皿	(13.8)	(6.3)	2.25	口一部 底1/8	ロクロナデ、付高台後ナデ、漬け掛け施釉か		T-18
350	トレンチ	灰	皿	(12.9)	(7.4)	2.4	口1/6 底面1/8 高台1/4	ロクロナデ、回転ヘラケズリ、付高台後ナデ、 漬け掛け施釉		T-19
351	トレンチ	須	杯A	(14.0)	(8.0)	(3.7)	口1/6 底1/6	ロクロナデ、回転糸切		T-20
352	トレンチ	黒A	杯A		(5.2)		底3/4	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理		T-21
353	トレンチ	須	杯	(13.0)			口1/6	ロクロナデ		T-22
354	トレンチ	須	杯A	(13.0)	(5.8)	(3.6)	口1/12 底1/8	ロクロナデ、回転糸切		T-23
355	トレンチ	須	杯	(10.8)			口1/6	ロクロナデ		T-24
356	検	土	杯AII	(9.8)	(5.4)	1.6	口1/8 底7/8	ロクロナデ、回転糸切		検-1
357	検	黒A	杯AII	(14.6)	(6.1)	5.2	口1/6 底1/8	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理		検-2
358	検	黒A	椀		(6.5)		底面完 高台一部	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理、 付高台後ナデ		検-3
359	検	黒A	鉢A		(11.4)		底1/5	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理	内面漆付着	検-4
360	検	黒A	杯AII	(13.1)	(5.7)	(5.3)	口1/4 底1/3	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理		検-5
361	検	黒B	ミニチュア	(4.5)	(3.1)	2.8	口1/12 底2/5	外面ミガキ後黒色処理、内面ナデ後黒色処理、底部ナデ	短頸壺か	検-6
362	検	須	杯蓋					回転ヘラケズリ、ロクロナデ、 宝珠つまみ部貼り付け後ナデ		検-7
363	検	須	杯A	(12.8)	(7.6)	4.0	口1/10 底1/4	ロクロナデ、回転糸切		検-8
364	検	須	杯A	(12.0)	(5.9)	3.5	口1/12 底1/4	ロクロナデ、回転糸切	口縁部自然釉付着	検-9
365	検	須	杯A	(12.4)	(5.4)	3.65	口1/8 底1/3	ロクロナデ、回転糸切		検-10
366	検	須	杯B		(7.8)		底3/8	ロクロナデ、回転ヘラケズリ、付高台後ナデ	底面ヘラ記号か	検-11
367	検	灰	椀		(7.9)		底1/5	ロクロナデ、回転ヘラケズリ、付高台後ナデ、 流し掛け施釉	黒笹14号窯	検-12
368	検	灰	椀		(7.0)		底1/4	ロクロナデ、回転糸切、付高台後ナデ、施釉	内面見込部 重焼痕有か	検-13
369	検	黒A	椀		(6.2)		底ほぼ完	ロクロナデ、回転糸切、内面ミガキ後黒色処理、 付高台後ナデ	底面穿孔痕	II検検-1
370	検	土	小型甕C	(10.2)			口3/8	口縁横ナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ		II検検-2
371	検	須	杯A	(13.4)	(6.4)	3.9	口1/8 底1/5	ロクロナデ、回転糸切		II検検-3
372	検	須	杯A		5.4		底完	ロクロナデ、回転糸切		II検検-4
373	検	須	杯BVかVI		(5.9)		底1/4	ロクロナデ、回転糸切、付高台後ナデ		II検検-5
374	検	灰	椀か		(7.0)		底1/3 高台3/8	ロクロナデ、付高台後ナデ、漬け掛け施釉		II検検-6
375	検	陶器	捏ね鉢		(11.1)		底面3/8 高台1/8	ロクロナデ、回転ヘラケズリ、回転糸切、付高台後ナデ	東海系無釉陶器	II検検-7
376	検	土	甕B	(20.6)			口1/5	口縁横ナデ、外面ハケメ、内面カキメ、ナデ		II検検-8
377	排土	陶器	山茶碗		(12.5)		底1/8	ロクロナデ、回転糸切、付高台後ナデ	東海系無釉陶器	ハイ土-1


99住(1～8)
100住(9～11)
102住(14～44)
2
1
3
4
5
8(K)
7(K)
6
9
10
11
41(軟)
42(軟)
34
32(軟)
33(K)
23
29
21
20
28
43
27
44
22
24
25
26
30
31
37
38
39
40
16
18
17
19
14
15
0
10cm

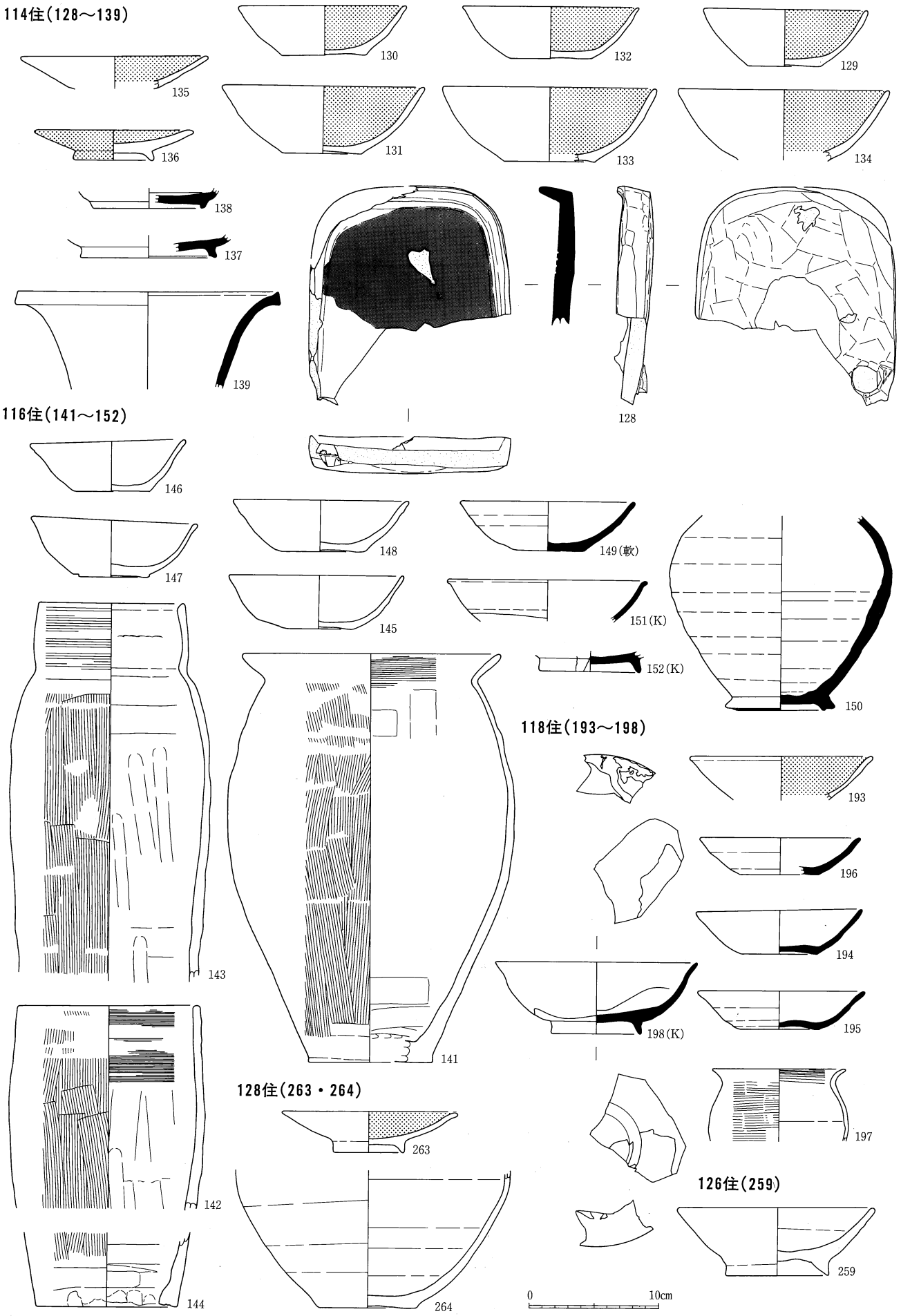
第14図　土器・陶磁器(1)


104住(45～52)
107住(73～98)
105住(53～72)
125住(257・258)
134住(274)
36
35
49
50
48
46
47
51
52
45(緑)
95
91
92
56
64
63
60
72
61
71
70
59
69
58
68(K)
67(K)
57
65(K)
62
66(K)
55
73
76
93
96
94
78
81
75
87
74
80
89
77
82
90
88
79
83
84
85(K)
97(K)
98(白)
53
257
258
54
86
274(緑)
0
10cm

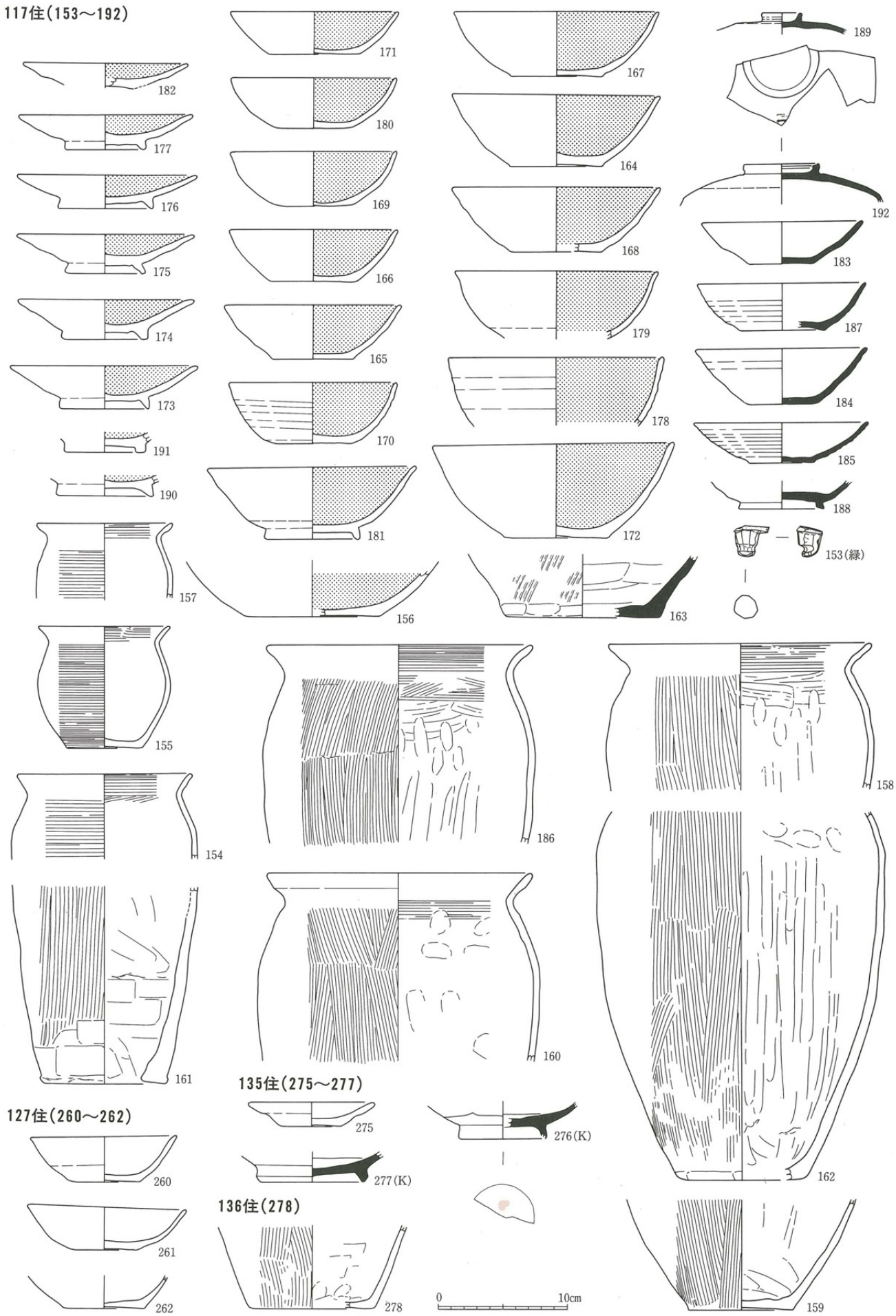
第15図　土器・陶磁器(2)


101住(12・13)
12
13
109住(99～103)
102
101(軟)
103
100
99(K)
113住(125～127)
125
126
127
115住(140)
140
110住(104～118)
105
107
108
106
115
111
110
109
112(軟)
114
113
104
116
118
117
111住(119～124)
122
120
121
119(K)
123(陶)
124
0
10cm

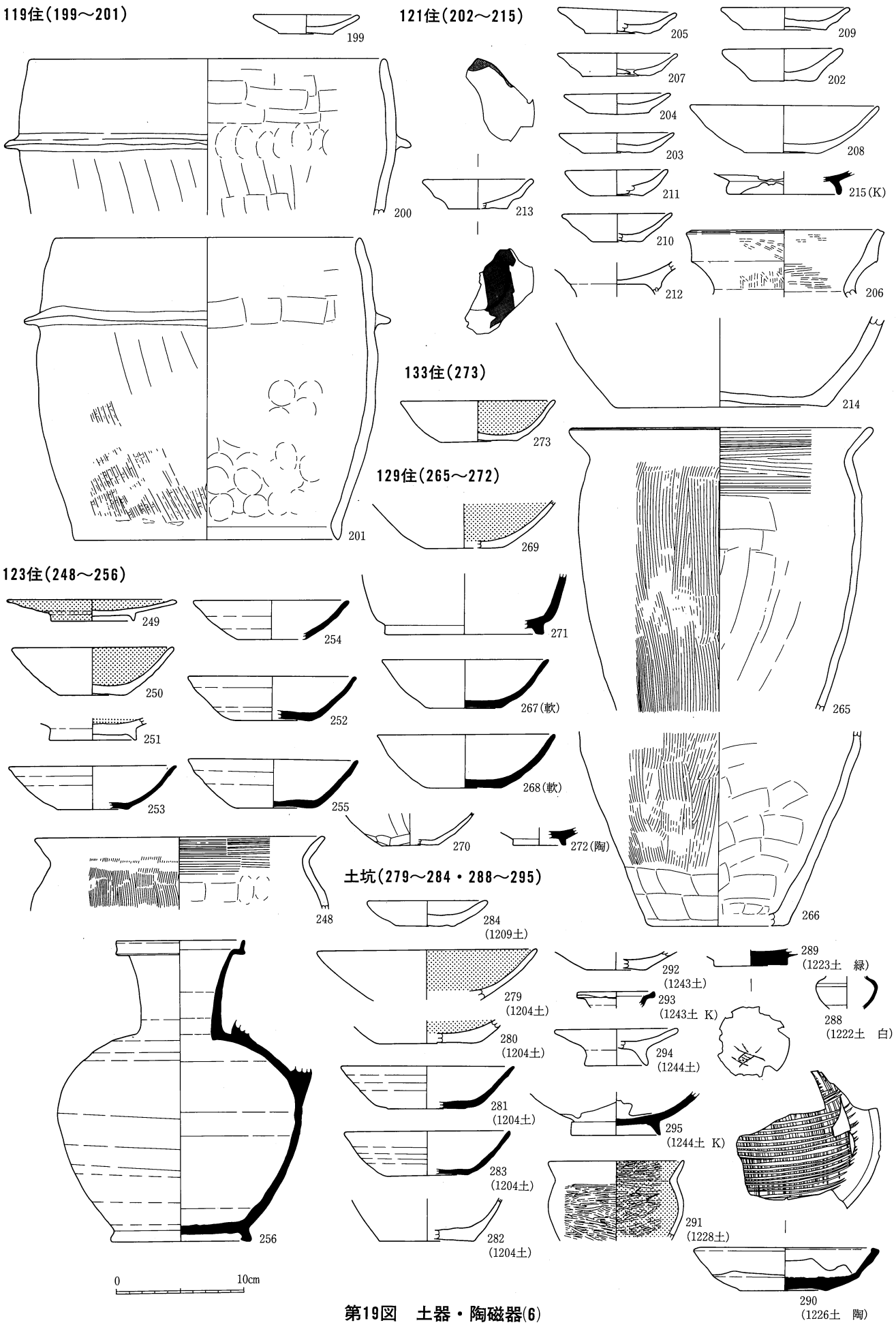
第16図　土器・陶磁器(3)


114住(128～139)
130
132
129
135
131
133
134
136
138
137
139
128
116住(141～152)
146
148
149(軟)
147
145
151(K)
152(K)
150
143
141
118住(193～198)
193
196
194
198(K)
195
197
142
128住(263・264)
263
264
126住(259)
259
144
0
10cm

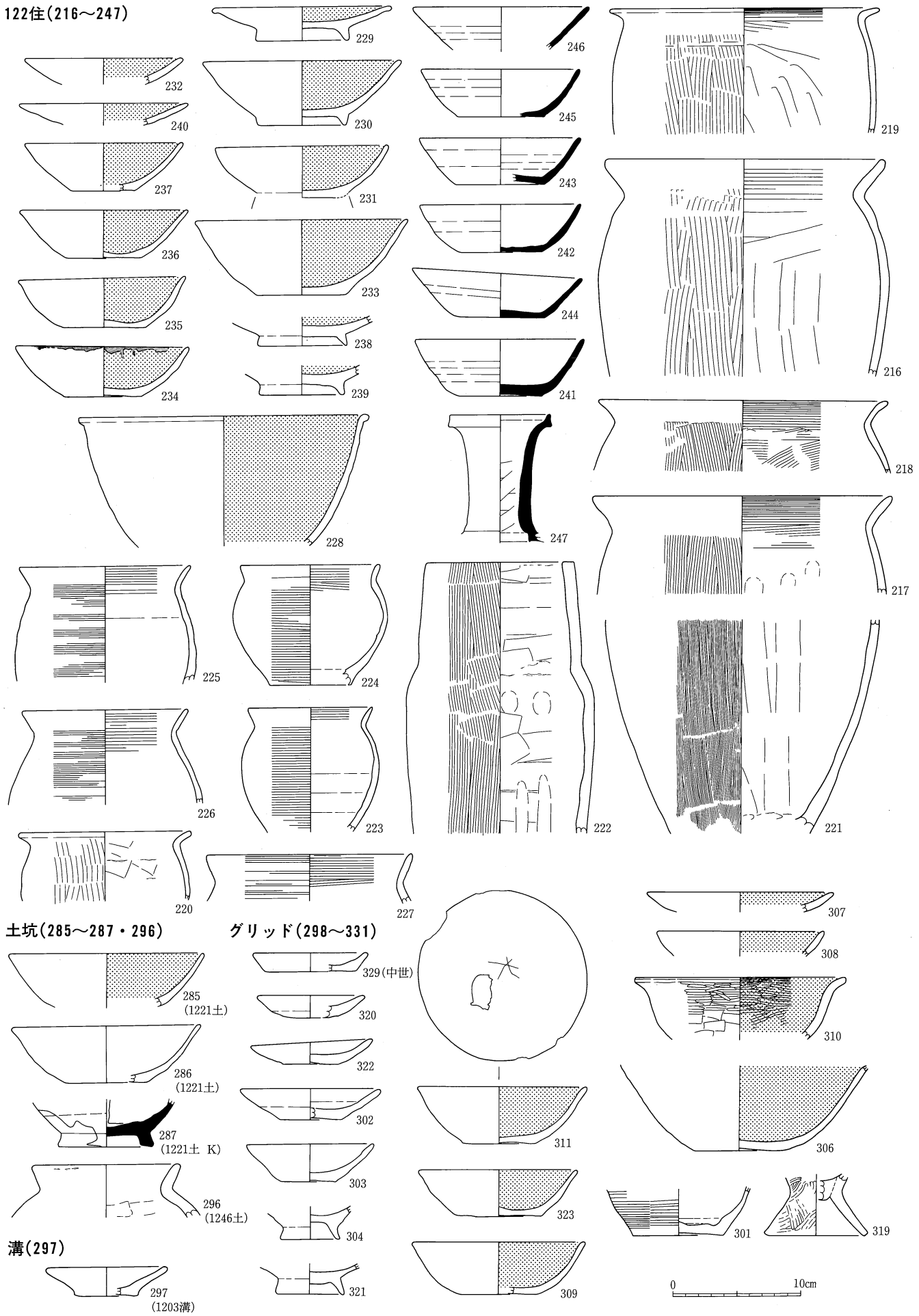
第17図　土器・陶磁器(4)


117住(153～192)
182
177
176
175
174
173
191
190
157
155
154
161
171
180
169
166
165
170
181
156
167
164
168
179
178
172
163
189
192
183
187
184
185
188
153(緑)
186
158
162
160
159
135住(275～277)
275
276(K)
277(K)
127住(260～262)
260
261
262
136住(278)
278
0
10cm

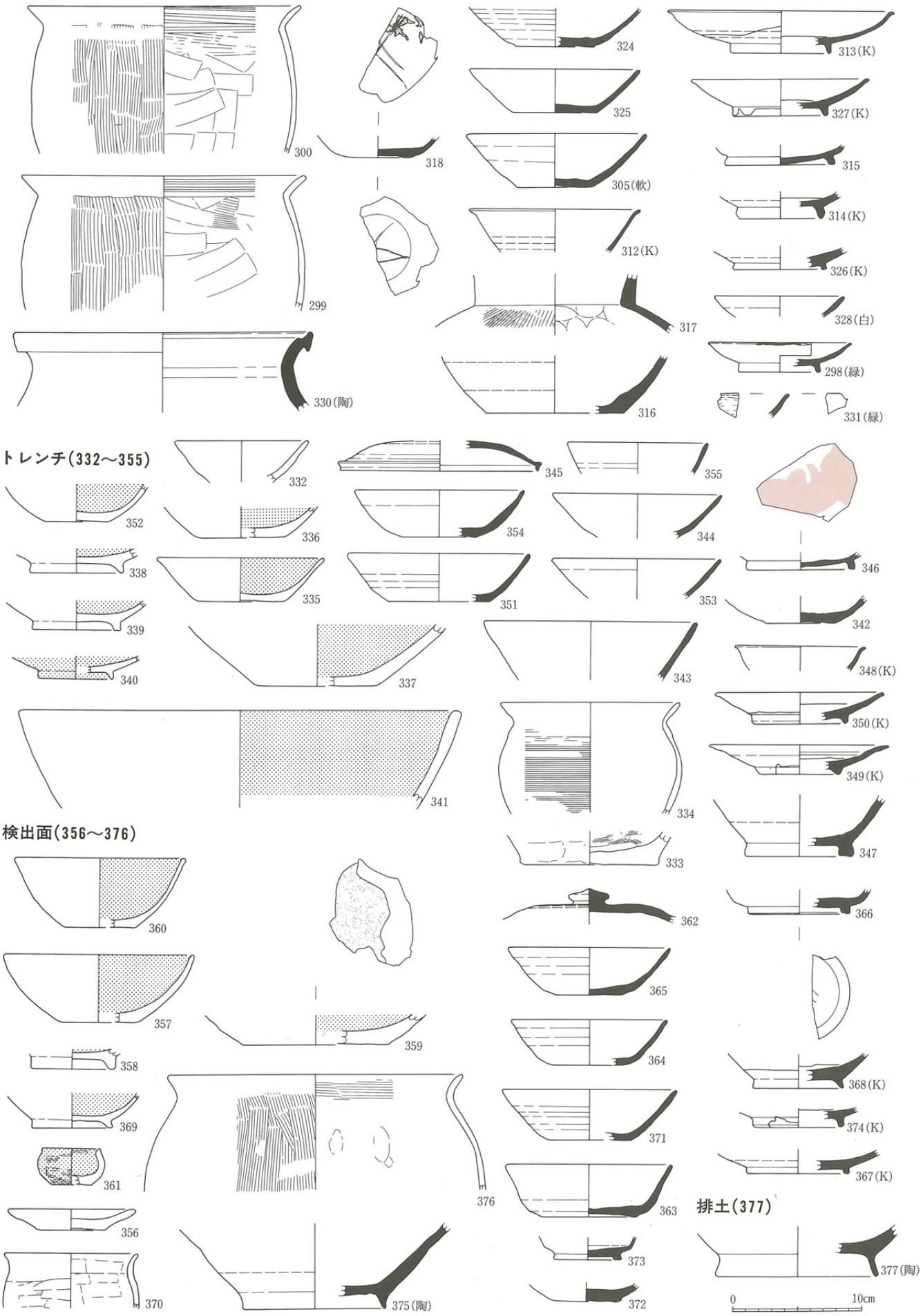
第18図　土器・陶磁器(5)


119住(199～201)
199
200
201
121住(202～215)
205
209
207
202
204
208
203
211
215(K)
213
210
212
206
214
133住(273)
273
129住(265～272)
269
265
123住(248～256)
249
254
271
250
252
267(軟)
251
253
255
268(軟)
270
272(陶)
248
266
土坑(279～284・288～295)
284
(1209土)
289
(1223土　緑)
292
(1243土)
279
(1204土)
293
(1243土 K)
288
(1222土　白)
280
(1204土)
294
(1244土)
281
(1204土)
295
(1244土 K)
283
(1204土)
291
(1228土)
282
(1204土)
256
0
10cm
290
(1226土　陶)

第19図　土器・陶磁器(6)


122住(216～247)
229
246
232
230
245
240
219
237
231
243
236
242
233
244
235
238
234
239
241
216
228
247
218
217
225
224
226
223
222
221
220
227
土坑(285～287・296)
グリッド(298～331)
307
329(中世)
285
(1221土)
320
308
322
286
(1221土)
310
302
287
(1221土 K)
311
306
303
296
(1246土)
304
323
301
319
溝(297)
297
(1203溝)
321
309
0
10cm

第20図　土器・陶磁器(7)


300
318
324
313(K)
325
327(K)
305(軟)
315
314(K)
299
312(K)
326(K)
317
328(白)
298(緑)
330(陶)
316
331(緑)
トレンチ(332～355)
332
345
355
352
336
354
344
338
335
351
353
346
339
342
340
337
343
348(K)
350(K)
341
349(K)
334
347
検出面(356～376)
333
360
362
366
365
357
359
358
364
368(K)
369
371
374(K)
361
376
367(K)
363
排土(377)
356
373
377(陶)
370
375(陶)
372
0
10cm

第21図　土器・陶磁器(8)

2　石器

石器群の概要

県町遺跡第12次調査では、出土した土器の型式と考えられるものから、弥生時代、古代、中世に帰属すると推定される遺構が検出されているようである。遺構検出面、石器認定基準、及び石器回収基準は不明であるものの、恐らくは所謂定形的な石器を中心として、62点の石器群が回収された(註1)。

三次元座標記録率12.9%の本石器群に対し、接合作業及び母岩識別作業を2人日実施したものの、複数個体で構成される母岩別資料は確認し得なかった(註2)。

[補註]

註1　遺構検出面が複数設定されたようであるが、調査区壁面及び遺構切り合い部の断面図取得率が低いようであることから不明な点が多い。また、粗質石材素材剥離系石器群及び、炉や竈等の構築材を主体とすると考えられる粗質石材素材分割剥落系石器群は回収しないという調査方針で本石器群は回収されたようであるが、器種組成では自然礫及び礫片類の組成率は高く、石器認定回収基準についても不明であるといわざるを得ない。

註2　遺物主要諸元は遺物群、ここでは石器群が対象となるが、その回収精度、整理作業精度、及びその質量を、可能な限り簡潔に表示しようと試みているものである。石器を対象として考案したものであるが、その他の遺物においても適用は可能であろう。遺構主要諸元は遺構の質量及び、調査精度の数値化を試みたものである。なお、本調査における遺構主要諸元は、諸般の制約から算出し得なかった。稀少遺構及び希少遺物の有無で決まりがちな遺跡の評価であるが、遺構主要諸元及び遺物主要諸元の蓄積から、調査精度及び遺跡の構成要素である遺構遺物の質量による、より客観的な遺跡の評価が可能になるものと考えられる。

[主要参考文献]

内堀　団　2002「土器・金属器」『堀の内遺跡Ⅲ』松本市教育委員会 pp9～pp13

太田圭郁　2000「石器」『平瀬遺跡Ⅱ』松本市教育委員会 pp93～pp122

2000「石器」『百瀬遺跡Ⅳ』松本市教育委員会 pp44～pp49,57,58

2001「石器」『岡の宮遺跡Ⅰ』松本市教育委員会 pp9～pp14,pp25～29

2002「石器」『堀の内遺跡Ⅲ』松本市教育委員会 pp8

遺構主要諸元

調査区壁面長：調査面積の平方根を4倍して算出した。

断面図取得調査区壁面長：調査区壁面のうち表土より遺構検出面までの断面図が作成された壁面長。

遺構検出面Z座標測点数：遺構範囲外すなわち遺構検出面の標高測点数。

遺構数：検出された遺構の数。

断面図取得遺構数：1本以上断面図が作成された遺構の数。

断面写真撮影遺構数：1枚以上断面写真が撮影された遺構の数。

遺構切り合い部数：遺構が切り合う部分の数。

断面図取得切り合い部数：1本以上断面図が作成された切り合い部の数。

断面写真撮影切り合い部数：1枚以上断面写真が撮影された切り合い部の数。

調査区壁面長:a	断面図取得調査区壁面長:b	b/a	調査区壁面断面図取得率	%
調査面積:c	遺構検出面Z座標測点数:d	d/c	測点分布密度	点/平米
		c/d	測点分布	平米/点
遺構数:e	断面図取得遺構数:f	f/e	遺構断面図取得率	%
	断面写真撮影遺構数:g	g/e	遺構断面写真取得率	%
遺構切り合い部数:h	断面図取得切り合い部数:I	I/h	切り合い部断面図取得率	%
	断面写真撮影切り合い部数:j	j/h	切り合い部断面写真取得率	%

第6表　遺構主要諸元一覧

総回収個体数	62	単独率	100.0%
接合個体数	0	接合率	0.0%
同一母岩個体数	0	同一母岩率	0.0%
母岩別資料構成個体数	0	母岩構成率	0.0%
母岩数(接合母岩数)	0	平均接合個体数	0.0
三次元座標記録個体数	8	三次元座標記録率	12.9%
遺構帰属個体数	46	遺構帰属率	74.2%

第7表　遺物主要諸元一覧

遺構略号	遺構名
SB	住居址
SK	土坑
SP	ピット
SQ	遺物集中箇所
TG	グリッド
TK	検出面
TS	サブトレンチ
TT	トレンチ
TY	排土

第8表　遺構略号一覧

ID	出土遺構1	出土遺構2	重量(g)	石材略号	器種略号	母岩	接合
09	SB104	Hブロック	29.5	QuAn	Ws	単独	-
10	SB104	Iブロック	0.7	Ob	BC	単独	-
11	SB104	Jブロック	1.4	Ph	PP	-	-
15	SB113	NE	72.8	QuAn	Ws	単独	-
26	SB121	覆土	1.7	Ob	RF	単独	-
28	SB123	覆土	5.8	Ob	C	単独	-
32	SK1203	NE	3.6	CrSc	PP	単独	-
34	SK1203	-	2.4	Ob	RF	単独	-
49	TK	W地区	244.0	An	P3	-	-
62	SB129	No.1	20.9	Cr	Bt	単独	-

第9表　実測図掲載個体属性一覧

器種略号	器種名
MS	原石
C	石核
F	剥片
BC	楔状石核
RF	二次加工ある剥片
MF	微細剥離痕ある剥片
PP	磨製鏃形石器
P	礫
PT	礫片
PT1	礫片1類
PTC	礫片複合
P2	礫石器2類
P3	礫石器3類
Ws	砥石状石器
Bt	帯止具形石器

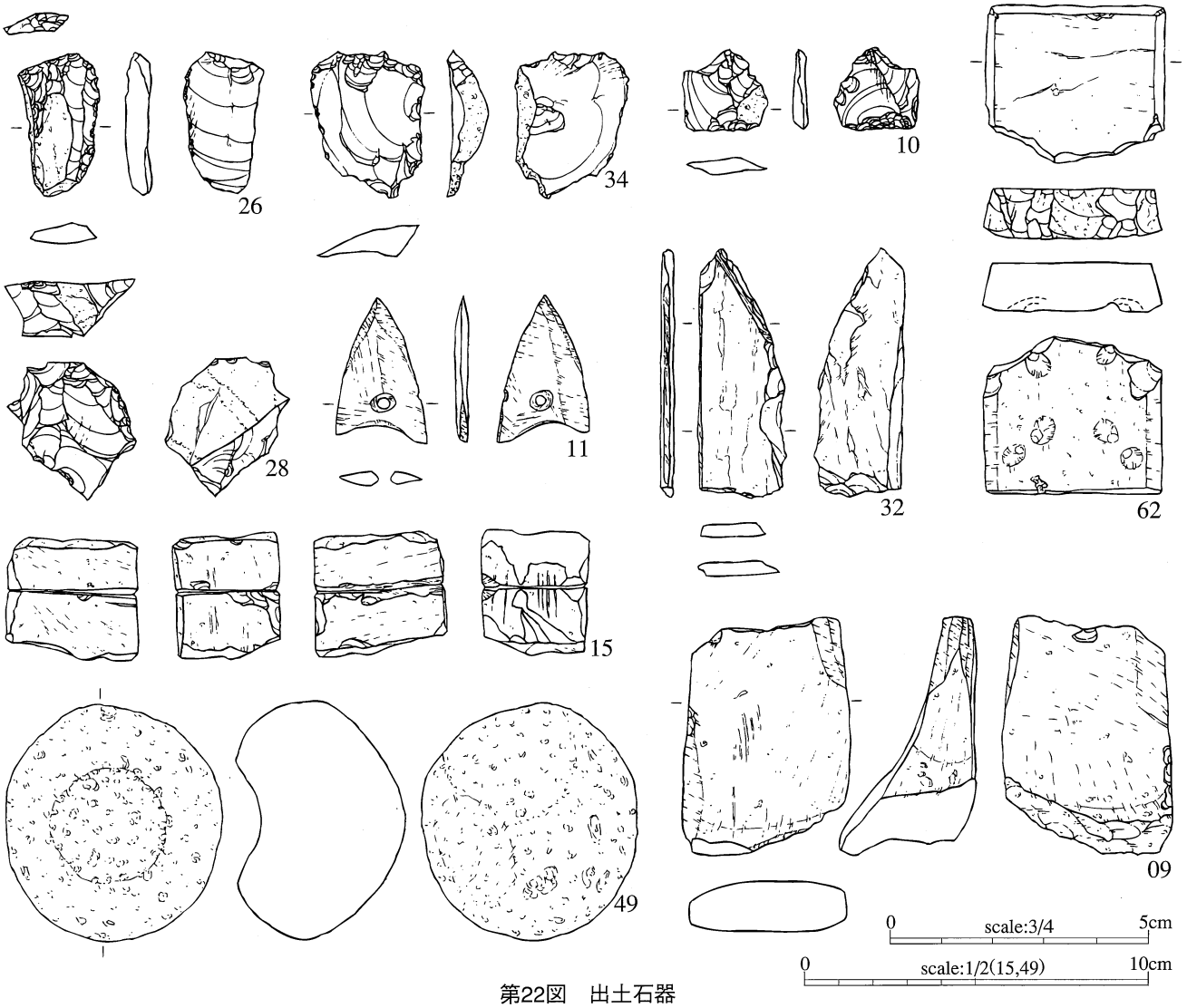
第10表　器種略号一覧

石材略号	石材名
Ob	黒耀岩
QuAn	石英質安山岩
An	安山岩
CrAs	溶質凝灰岩
Di	閃緑岩
GrAp	半花崗岩
Po	ヒン岩
Sa	砂岩
MeTu	変質凝灰岩
Tu	凝灰岩
MeSl	変質粘板岩
Ph	千枚岩
CrSc	結晶片岩
Qu	石英
Cr	水晶

第11表　石材略号一覧

石材略号	MS	C	F	BC	RF	MF	PP	P	PT	PT1	PTC	P2	P3	Ws	Bt	計
Ob	1	1	1	1	3	1										8
QuAn														2		2
An								4	1	1			3			9
CrAs									2							2
Di									1	1						2
GrAp														1		1
Po								3	2							5
Sa									1					3		4
MeTu		4						6	2	4	1	1				18
Tu									1	1		1				3
MeSl		1														1
Ph							1									1
CrSc							1									1
Qu								2	2							4
Cr															1	1
計	1	6	1	1	3	1	2	15	12	7	1	2	3	6	1	62

第12表　石材単位器種組成



第22図　出土石器

遺構1	Ob	QuAn	An	CrAs	Di	GrAp	Po	Sa	MeTu	Tu	MeSl	Ph	CrSc	Qu	Cr	計
SB099								1								1
SB102					1									1		2
SB104	1	1	2				2					1		1		8
SB105									1	1						2
SB107			1													1
SB110				1												1
SB113		1							1							2
SB114			1													1
SB117					1				3							4
SB118								1						1		2
SB119			1													1
SB120									1							1
SB121	1								1							2
SB122							1									1
SB123	3															3
SB126								1								1
SB129															1	1
SK1203	1						1						1			3
SK1204			1													1
SK1223				1												1
SK1229											1					1
SK1230									1							1
SK1234										1						1
SK1243									1							1
SP30									1							1
SP57									1							1
SQ1			1													1
TG	2							1	2							5
TK			2			1	1		3	1						8
TT									2							2
TY														1		1
計	8	2	9	2	2	1	5	4	18	3	1	1	1	4	1	62

第13表　遺構単位石材組成

遺構1	MS	C	F	BC	RF	MF	PP	P	PT	PT1	PTC	P2	P3	Ws	Bt	計
SB099														1		1
SB102								1		1						2
SB104				1			1	5						1		8
SB105		1							1							2
SB107									1							1
SB110									1							1
SB113								1						1		2
SB114													1			1
SB117		1						1	2							4
SB118									1					1		2
SB119										1						1
SB120										1						1
SB121					1					1						2
SB122									1							1
SB123	1	1	1													3
SB126									1							1
SB129															1	1
SK1203					1		1		1							3
SK1204													1			1
SK1223									1							1
SK1229		1														1
SK1230												1				1
SK1234												1				1
SK1243										1						1
SP30										1						1
SP57		1														1
SQ1								1								1
TG					1	1		2						1		5
TK								3	1	1	1		1	1		8
TT		1						1								2
TY									1							1
計	1	6	1	1	3	1	2	15	12	7	1	2	3	6	1	62

第14表　遺構単位器種組成

3　金属器

金属器の概要

県町12次調査では４面あるとされた検出面が不明であるものの、弥生時代から中世に帰属すると考えられる遺構・遺物が検出され、61点の金属器が回収されている。しかし、グリッド回収遺物は帰属層準不明、三次元座標記録による回収も著しく低い状況にあり、遺構帰属個体についても三次元座標記録のある金属器は５点に止まる。

金属器はさびに覆われ単独で出土し、古墳など特殊な遺構内の出土金属品を除いて接合関係は望めない。その接合関係も金属種によっては接合関係を認定し得る可能性はあるが、金属器の腐蝕過程の結果、崩壊した可能性が高い。よって金属器のみでは、遺構間接合・同一個体資料という共時態内における通時的関係の把握はほぼ不可能である(註1)。そのため他の遺物によって実施された遺構間土層対比を援用し、金属器における遺構間の通時的・共時的関係を把握するにとどまる。すべての遺物は調査における層準把握と遺物取り上げ方法などの調査精度の直接的影響を受けるが、金属器の場合は援用すべき遺物の整理作業方法によって良くも悪くも更に大きな影響を受ける(註2)。

本調査地点においては、金属器の回収精度が著しく低く金属器自体が遺構とは遊離し、援用すべき他の遺物でも調査精度・回収精度が著しく低いために、遺構間接合・同一個体資料という共時態内における通時的関係の把握は不可能であるため遺構間土層対比情報もなく、他の遺物とも金属器は遊離している。よって本遺跡においては、層準・検出面等の問題は残されたままで三次元座標記録によって回収された遺物についても通時的・共時的関係は不明であり、位置情報のみ判明したものを図示するにとどめざるを得ない。

[補注]

註１　金属器の中で銭は初鋳年から遺構の年代等を決定される向きもあるが、三次元座標記録と出土層準把握が成されていなければ遺構とは遊離し基準とはなり得ない。本調査で三次元座標記録のある銭の点数は０点である。所謂完形品とされる遺物についても同様である。土器の所謂完形品とされる遺物は、ある型式段階の典型として編年構築課程では重宝がられているが、遺跡内における通時的・共時的関係の把握は検証できない仮説である。三次元座標記録と出土層準把握が成された割れているモノにこそ情報が内包されており、遺構間接合資料から通時的・共時的関係を把握することが重要である。

註２　援用検証には通常土器が用いられるが、現状において土器の接合作業は単なる復元作業の一環としておこなわれているものがほとんどで、資料の提示方法も土器型式が先行した住居址一括提示のみで接合情報も出土層準も不明なものが大多数を占め、金属器の通時的・共時的関係の把握は不可能である。近年、土器による接合資料提示・分析方法も試みられているが、仮説である土器型式を遺跡内における検証作業も成されていないにもかかわらず妄信援用したものばかりで、遺構間接合資料から通時的・共時的関係を把握し遺構間土層対比を実施しているものはなく、現段階では援用検証に用いるには躊躇せざるを得ない。その点発掘調査精度の高い遺跡における石器の基本的な考古学分析から得られた情報からの援用検証は有効であると考えられる。

[参考文献]

阿部芳郎　1998「遺物のライフサイクルと廃棄ブロックの形成過程」『上土棚南遺跡第3次調査』綾瀬市教育委員会pp.127～141

内堀　団　2002「土器・金属器」『堀の内遺跡Ⅲ』松本市教育委員会pp.9～13

太田圭郁　2000「石器」『平瀬遺跡Ⅱ』松本市教育委員会pp.93～122

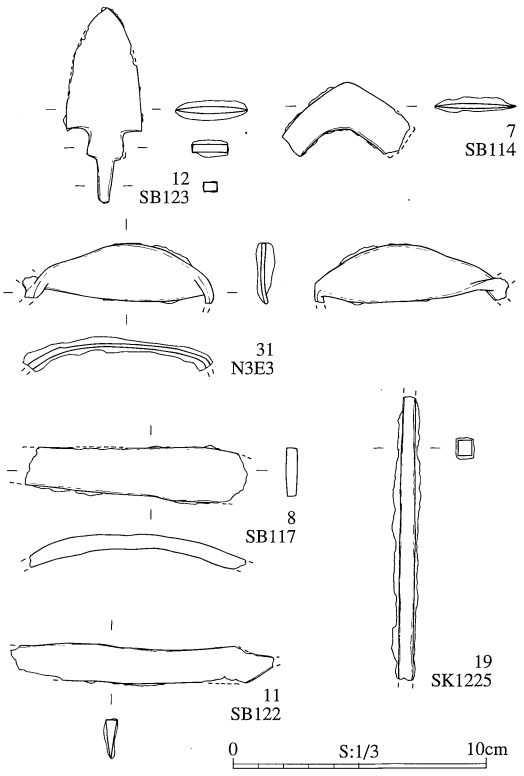
2001「石器」『岡の宮遺跡Ⅰ』松本市教育委員会 pp9～pp14,pp25～29

総回収個体数	61	単独率	100%
三次元座標記録個体数	6	三次元座標記録率	10.3%
遺構帰属個体数	37	遺構帰属率	60.7%

第15表　主要諸元一覧

出土遺構	金属種	釘	丸釘	紡錘車	刀子	鏃	銭	滓	ワイヤー	不明	計
SB104	Fe	1			1			1			3
SB110	Fe									1	1
SB112	Fe									1	1
SB114	Fe									1	1
SB117	Fe			1						2	3
SB122	Fe				1						1
SB123	Fe					1					1
SB130	Cu						1				1
SB135	Fe									1	1
SK1223	Fe	3								6	9
SK1225	Fe									1	1
SK1226	Fe	5								2	7
SK1226	Cu						3				3
SK1228	Fe									1	1
SK1234	Cu						1				1
SK1242	Cu						1				1
TG	Fe	2		1	1			1		7	12
TG	Cu						4				4
TK	Fe	3	1							3	7
TT	Fe		1						1		2
計		14	2	2	3	1	10	2	1	26	61

第16表　遺構金属種別単位所謂器種



第23図　金属器実測図

第４章　調査のまとめ

県町遺跡の調査は今回で12回目を数える。以前からこの付近で平安時代の遺物が出土することは知られており、また昭和54年度以降行われている調査では、前回までに平安時代の遺構は住居址が42軒検出されている。加えてこの遺跡では緑釉陶器の出土が多く、他の概期の遺跡と比べて大きく異なる点であることも知られている。今回の調査では緑釉陶器自体の出土量は多いとはいえない。しかし、第３章で述べたように、緑彩文陶や三足盤といった、生活用品とは異なる特殊な遺物が出土する、という特色がみられる。

この県町遺跡の性格を考えていくについて、まず調査を行った順に従って述べていくことにする。

今回の調査区は、表土を除去したところ、流路と思しき砂礫の範囲と、硬く締まった黄褐色砂質土の範囲と大きく二つに分かれた。この黄褐色土の広がる範囲には、土坑、溝といった遺構が少ないながらも存在している。これらの遺構の覆土は主として灰褐色砂質土であり、また遺物は少ないながらも、常滑産の甕とみられるものなどが検出面より確認されていることから、ここには区画溝を有する中世の遺構が存在していたと考えられるため、この面を第１面として調査を実施した。ただし、これらの存在する面は、近代以降、松本県ヶ丘高校（旧制第二中学）の建設以前に削平され、遺構面としての残存度は良好ではない。宅地などとして利用されていたようで、近代とみられる建物基礎とみられるものもいくつか確認している。

黄褐色砂質土中には、何箇所かで大形の礫を多く出土する場所が存在していた。調査開始時点においては判らなかったが、検出及びグリッド調査の結果、それらがカマドを有する平安時代前期９世紀代の竪穴住居址であり、礫はその覆土中このものであることが明らかになってきた。また、ほぼ同じ面から平安時代後期11～12世紀の住居址も確認された。そこで、それらの存在する範囲を第２面として取り扱い、調査を実施した。また、礫の広がる範囲の中に、方形の掘り込みを確認したため、調査したところ、内部ピット中から、弥生時代中期の土器が数点出土した。わずかながら、薄川の影響を受けずに残った弥生時代の遺構が存在することが判った。

調査区内には、旧体育館の基礎が何本か入り、それを利用して土層観察面（トレンチ扱い）とした。そのうちの中央トレンチの土層を基本土層とした(第24図)。東トレンチ下部、調査区北東部において、黄褐色砂質土面からピットなどの遺構が確認された。これらは、第２面とした面から50～70cm下にあたり、しかも両者の間には礫層があることから、当初はこれが弥生時代の遺構面ではないかと考えた。しかし、調査の結果これらも平安時代前期９世紀代の遺構面であることが判った。結果的にこの面を第４面として扱うことになる。

第２面の下、黄褐色砂質土の面に向けて掘り下げていく過程で、礫層中にいくつか土坑の掘り込まれた面が存在することが確認された。この面を第３面として調査を実施したところ、遺物は少ないながら北宋の渡来銭が出土した。

第３面の砂礫を除去したところ、黄褐色砂質土の比較的安定した面が比較的広い範囲で残存しているのが確認された。そこからは住居址こそ検出されないが、土坑・ピットがいくつか検出されたため、この面を第４面とした。一部のピットは建物址を構成するもので、そのうちのP_1と、他のピット（P64）は、底部に礎石ともいうべき礎盤を有するものであった。この面は比較的安定しているものの、南側と北側には薄川の大規模な流路址があることから、洪水から「生き残った」面であるといえる。事実この面には、南側の流路４からのオーバーフローと思しき浅い流路が何本か流れていたようである。

次に、以上の調査結果を踏まえて、時代ごとに触れていき、簡単に考察してみることにする。

まず弥生時代であるが、この周辺での、第１、２、３、５次調査で住居址などの遺構は確認されている。主として集落の中心は、住居址が多く確認されている２、３次調査の行われたあがたの森公園東部にあるように思われる。５次調査の際に、弥生時代の遺構の存在範囲を、県ヶ丘高校南西隅辺りと捉えているようであるが、今回の調査では、さらに東側からの遺構を検出し、また遺物として、土器の他磨製石鏃なども出土し、これらはあまり磨耗していないことから、住居址は別として、遺構の広がりはもう少し東へ広がることが判った。ただこの辺りでは、第２章第１節で述べたように、薄川の影響を非常に強く受け、大部分は削られてしまい、一部分削られずに残った部分が存在したと考えるのが妥当であろうか。

古墳時代から奈良時代については、今回の調査では遺構・遺物ともほとんどみられない。しかし県ヶ丘高校内の第５次調査では４棟、古墳時代中期末の住居址が確認されている。西北及び南西にある県塚との関連を含め、概期の集落の中心は今回調査地よりは西の方にあるのではないだろうか。

平安時代前期９世紀になると、この辺りには集落が営まれるようになる。今回の調査では９世紀半ばから後半にかけての住居址が21棟発見されている。県ヶ丘高校内で行われた第４～５次調査においては、いずれも平安時代の住居

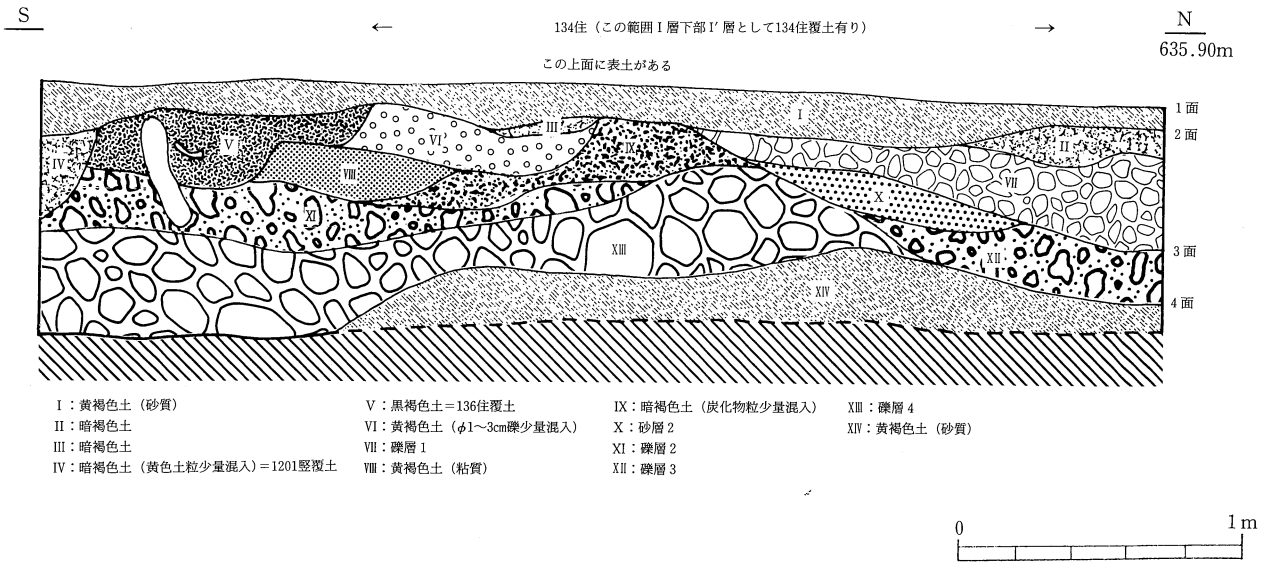
址が40棟と多く確認され、そのうち10棟は平安時代前期に属すると判断されている。また、調査は行われていないが、プール、グランド拡張、家庭科教室棟などの建設の際に、土師器、須恵器、灰釉陶器の他緑釉陶器が出土していることが確認されている。つまり、この県ヶ丘高校の敷地内においては、一部薄川の大規模な流路跡となっている範囲以外においては、平安時代の集落が一面に広がっていたことが想像できる。また出土遺物として、緑彩文陶、緑釉三足盤、水晶製?帯、風字硯といった特殊なものがみられるため、以前に多く出土した緑釉陶器などと合わせて、この地域での大規模な集落として存在していたことは間違いないであろう。

平安時代中期10世紀に属する遺構は今回の調査では確認できない。11世紀以降になると再び集落が営まれるわけだが、この断絶の理由はやはり薄川の氾濫ではないだろうか。今回調査区の北東部分は、恐らく９世紀の段階では一段低かったのではないかと思われる。そこが薄川の洪水の直撃を受けて埋没したのではないかと考えられ、それが１・２と３・４面の間に入る砂礫層であるとみられる。調査区の中心部分は、この洪水の直撃からは免れたのであろうが、一旦集落が途切れる原因であったとは考えられる。その後11～12世紀にこの地に再び集落が営まれるが、今回この範囲で確認した住居址は５棟と少ない。

北東部分の、洪水直撃部分に堆積した砂礫層の上に、土坑が作られるようになったのは、渡来銭の存在から考えると中世とみてよいであろう。その上に、中世にもう一度大規模な洪水が起こり、調査区中心部分とのレベル差はなくなったものであると考えられる。しかし、中世はこうした洪水の常襲地帯であるためか、集落の展開地としてはあまり顧みられない地になったと考えられている。遺構も、第４次調査で溝址が確認されている程度であった。今回の調査では、そうした影響を受けながら、いくつかの遺構を検出し、遺物も得られている。確認された遺構は、中世以後の開発或いは県ヶ丘高校の造成などによって削られてしまったと思われ、残存状態が良好であるとはいえない。しかし、1225土からは北宋からの渡来銭の他、鉄釘が多く出土している。このことはこの辺りにそれらを用いた建物が存在していたことを示す資料となるものである。とすればほぼ等間隔で造られた溝址は、それらを区画する溝であったと考えられるため、1226土でみられた卸皿の存在する時期、15世紀後半には、この辺りになんらかの遺構が存在していたことは確かだといえよう。

以上、調査手順、時代別といった観点から本調査を眺めてきたが、まだ考察しなければならない点は多いように思う。それについては、一読後にご教示頂ければ幸甚に存ずる。この県町遺跡については、現在までの調査地は11次調査を除いて、あがたの森公園、県ヶ丘高校の範囲内に限定されている。今回の調査地は遺跡範囲とすれば東端にあたる。また洪水層の下にも遺構の存在は確認されるため、今後行われるであろう調査によって、そうした点についても、明らかにできるのではないかと思われる。

最後になりましたが、今回の調査に際して多大なご協力をいただいた松本県ヶ丘高校職員をはじめとした関係者の皆様、風土研究会の皆様、そして冬の大雪にもかかわらず作業に従事していただいた皆様方に、この場を借りて厚くお礼申し上げます。



第24図　基本土層（東トレンチ西面、136住周辺部分）

写真図版

調査区遠望（東から）

調査区全景（北が上）

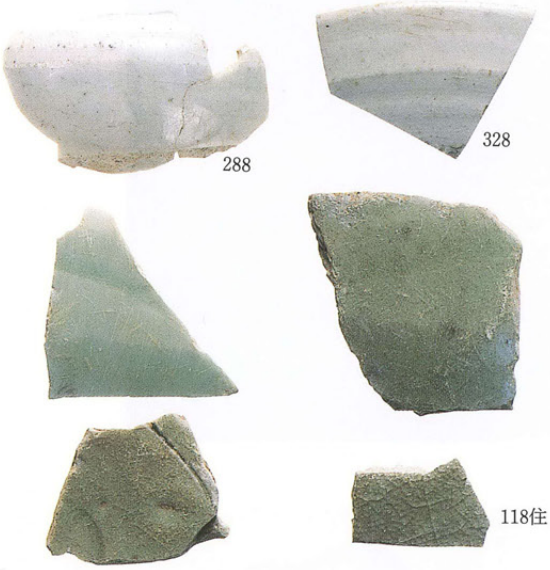
緑彩文陶（内側）104住

三足盤脚部　117住

図版１　調査区域航空写真、特殊遺物(1)

緑釉陶器（皿）グリッド

緑釉陶器（椀）134住



288は土1221、328はII検グリッド（白磁）
その他の遺物はII検検出面で未図化（青磁）

銙帯　129住

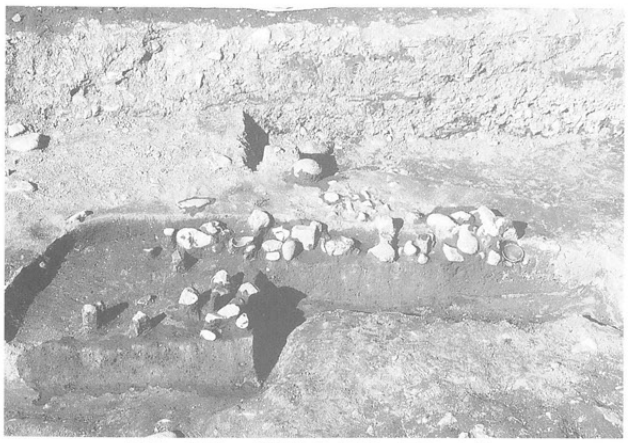
緑釉陶器（杯－内側）土坑1223

緑釉陶器（杯－底部）

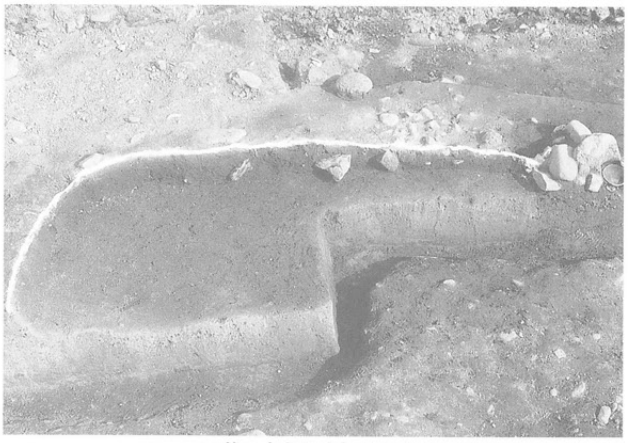
風字硯（内側）114住

風字硯（底部）

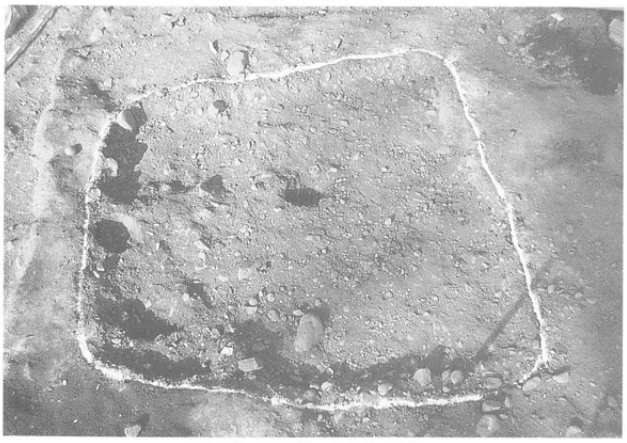
図版 2　特殊遺物 2



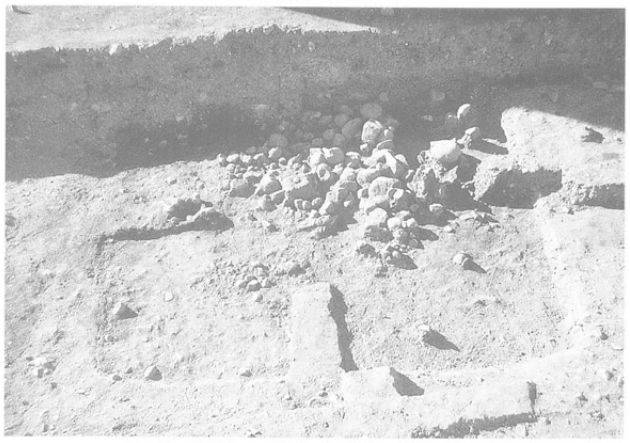
99住 遺物・礫出土状況（南から）



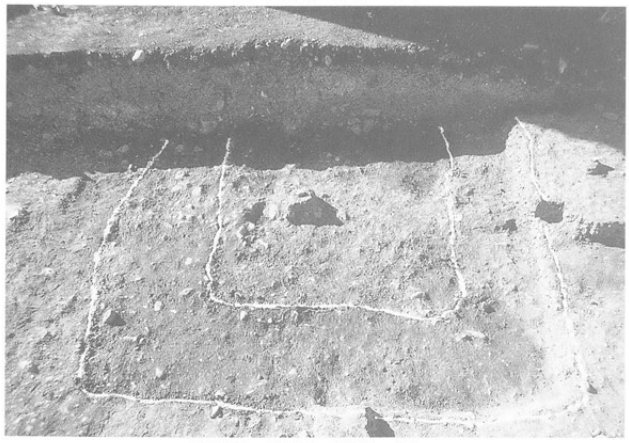
99住 完掘（南から）



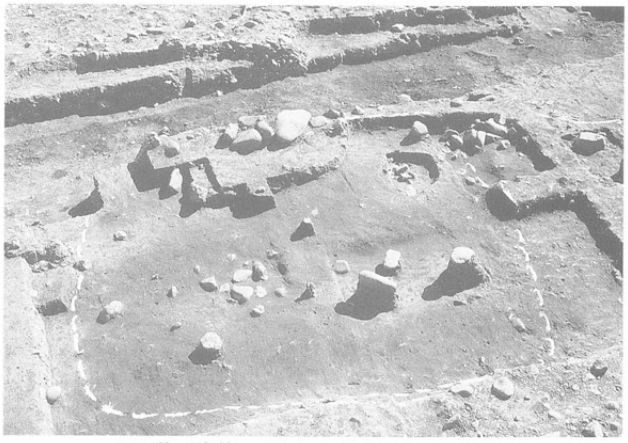
101住 完掘（南から）



102住 遺物・礫出土状況（東から）



102住 完掘（東から）



104住 遺物・礫出土状況（西から）

104住 完掘（西から）

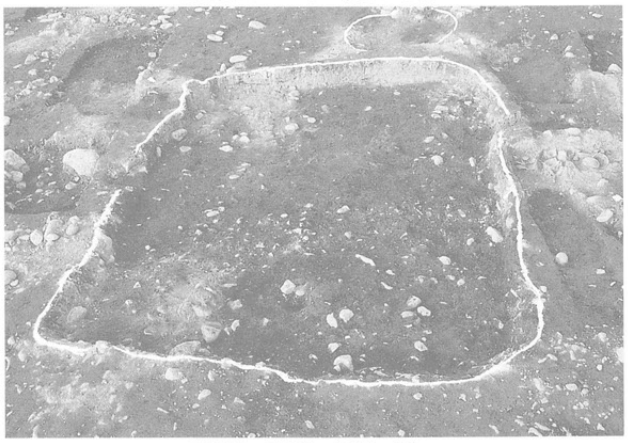
107住 完掘（南から）

図版 3　遺構（住居址）

105住 完掘（東から）

105住 カマド（東から）

109住 遺物・礫出土状況（南から）

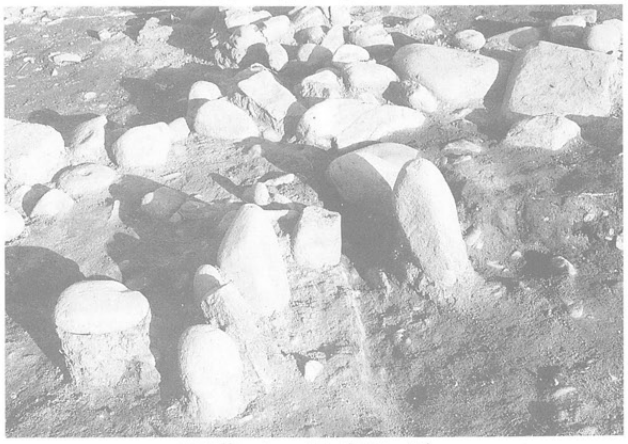


109住 完掘（南から）

109住 カマド（東南から）

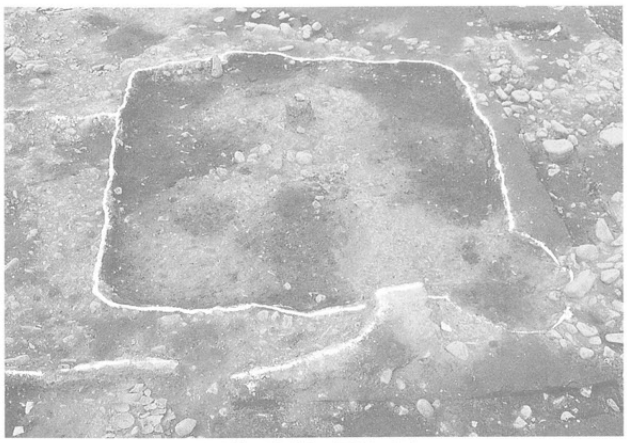
110住 遺物・礫出土状況（西から）

110住 完掘（西から）



110住 カマド（西から）

図版 4　遺構（住居址）



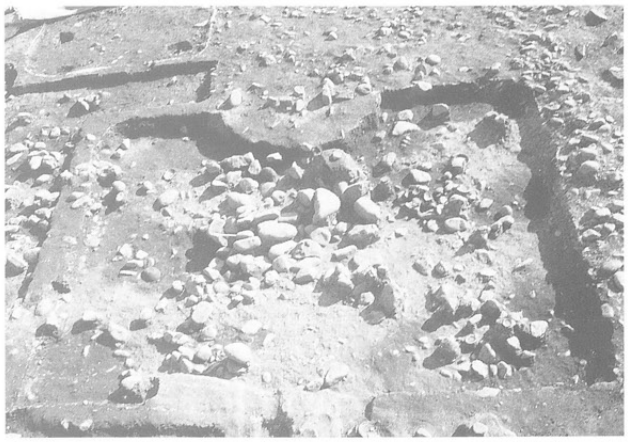
111住 完掘（東から）

113住 遺物・礫出土状況（西から）

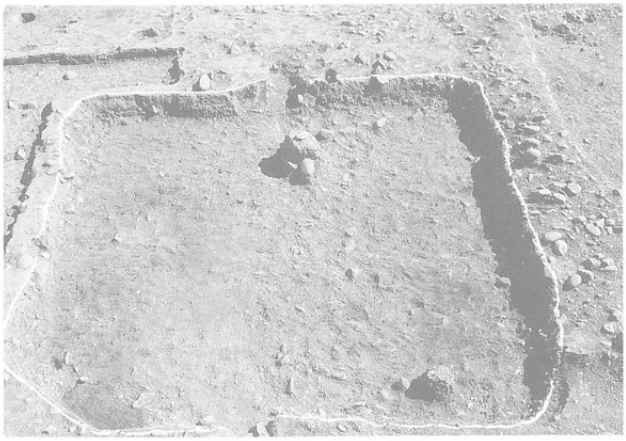
114住 遺物・礫出土状況（西から）

114住 完掘（西から）

114住 カマド（西から）



117住 遺物・礫出土状況（西から）



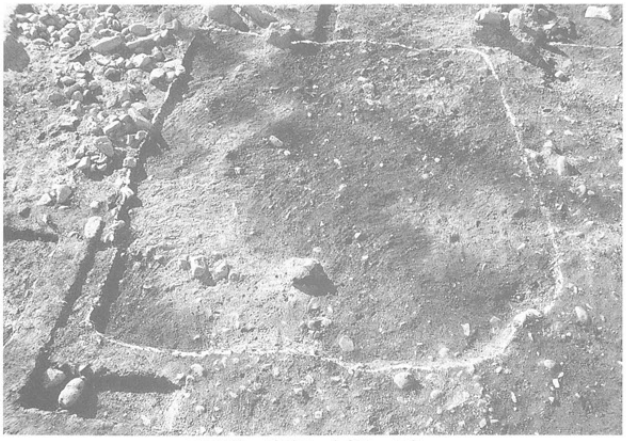
117住 完掘（西から）

117住 カマド（西から）

図版 5　遺構（住居址）

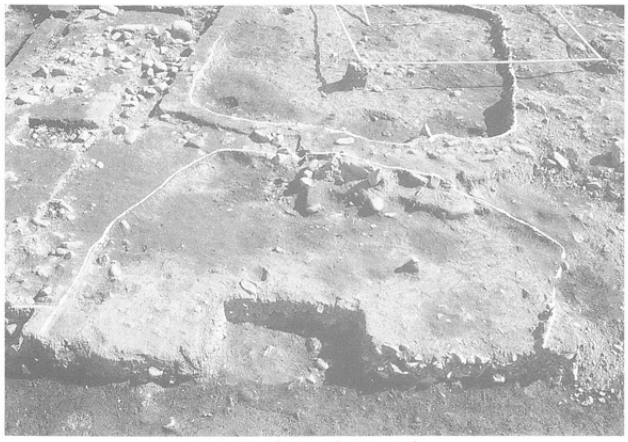
116住 遺物・礫出土状況（東から）

118住 完掘（西から）



119住 完掘（東から）

120住 完掘（南から）



122住 完掘（西から）

122住 カマド（西から）

123住 完掘（東から）

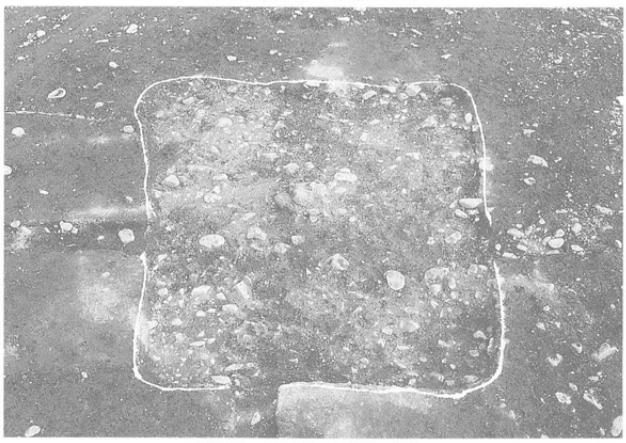
123住 カマド（東から）

図版 6　遺構（住居址）

124・125住 完掘（南から）

126住 完掘（南から）

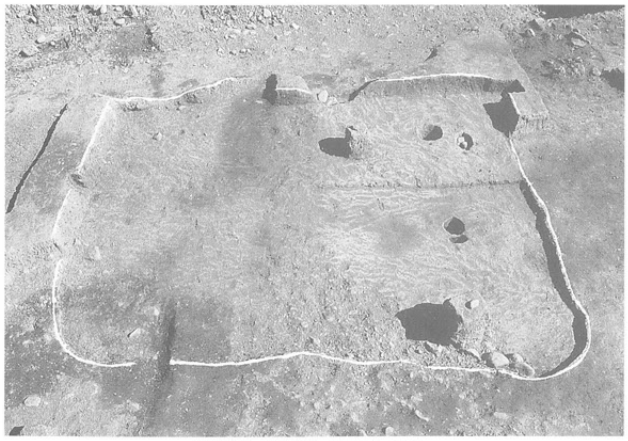
127住 完掘（西から）



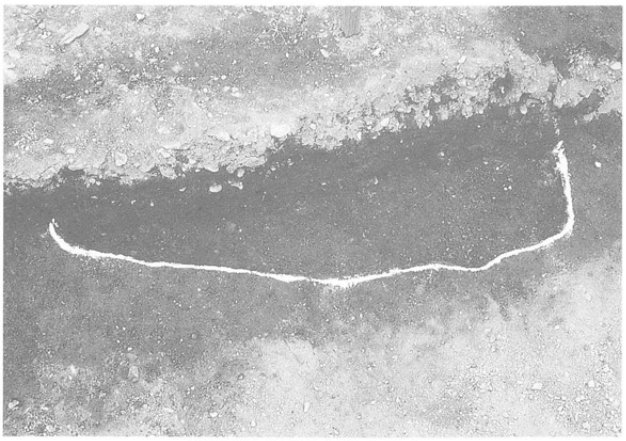
128住 完掘（西から）

128・129住 完掘（西から）

130住 完掘（西から）



131住 完掘（西から）



132住 完掘（北から）

図版 7　遺構（住居址）

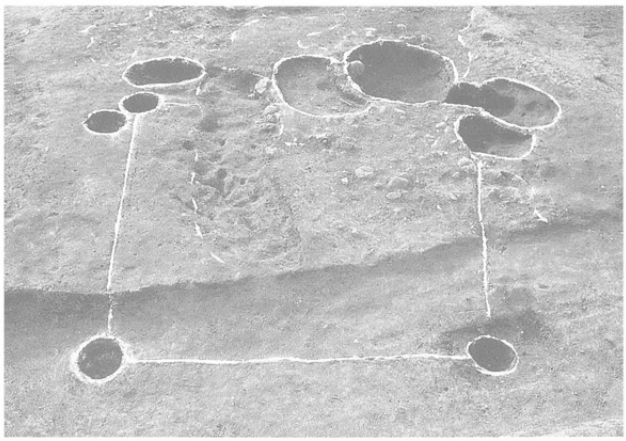
133住 遺物・礫出土状況（北から）

134住 完掘（西から）

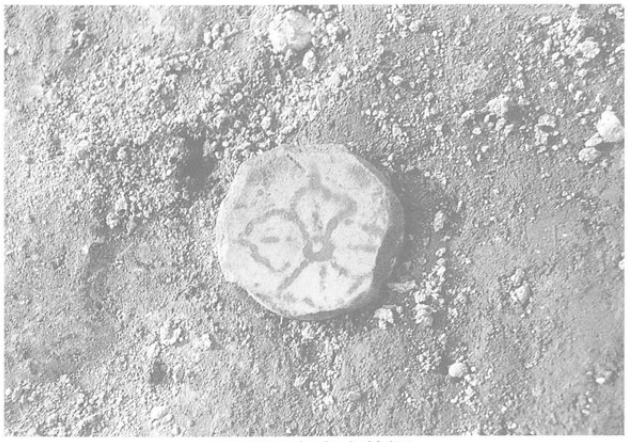
135住 完掘（東から）

136住 カマド（西から）

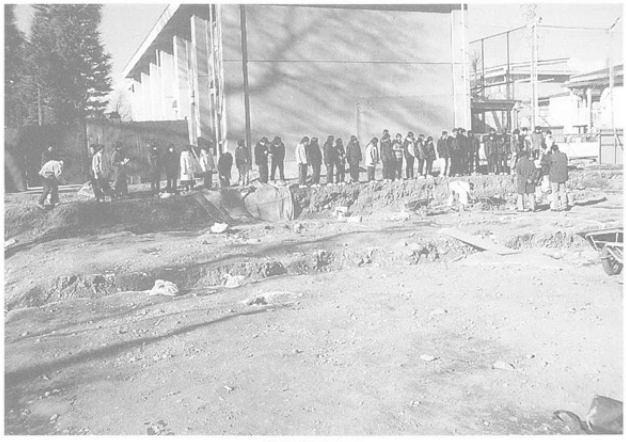
137住 遺物・礫出土状況（西から）



建物址 3（東から）



緑彩文陶出土状況



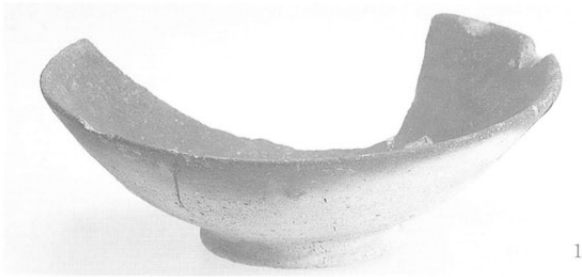
授業風景

図版 8　遺構（住居址・建物址・緑彩花文出土状況）、行事記録

6

9

20



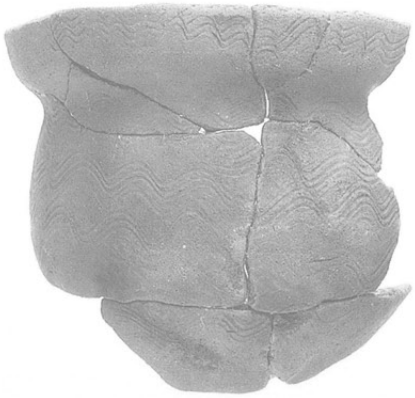
10

11

33

14

15



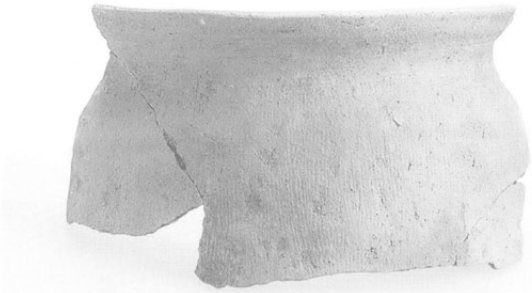
12

実測図未掲載　　101住

13

6：99住　　12、13：101住
9～11：100住　　14～33：102住

図版 9　99、100、101、102住出土土器


37

38

39

35

40

56

65

41

36

35～41：102住
56・65：105住

図版10　102、105住出土土器

87

89

90

73

92

86

97

96

100

101

116

73～97：107住
100、101：109住
116　　：110住

図版11　107、109、110住出土土器

117

124

118

123

119

126

129

140

139

144

117、118：110住　129、139：114住
119～124：111住　140：115住
126：113住　144：116住

図版12　110、111、113、114、115、116住出土土器

148

149

172

166

171

164

173

143

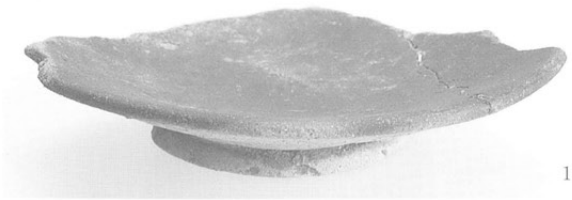
142

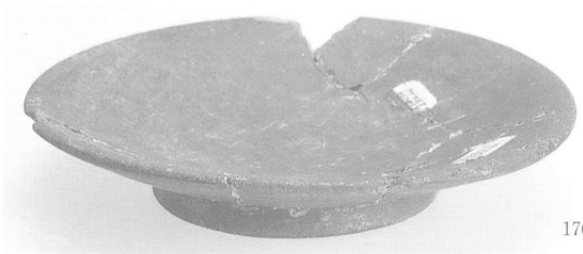
150

174

142～150：116住
164～174：117住

図版13　116、117住出土土器


175


176

181

204

207

208

194

195

229

198

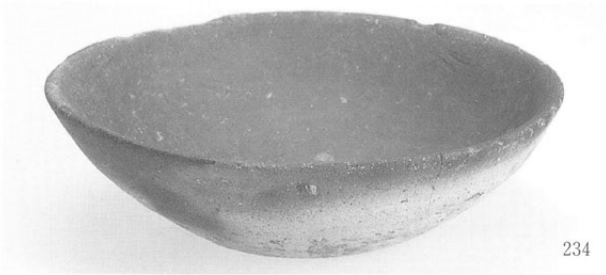
155

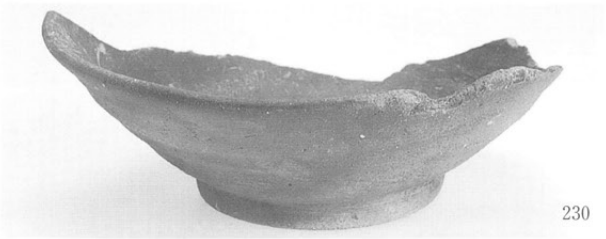
186

200

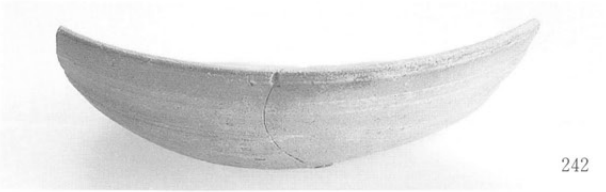
155～186：117住　204～208：121住
194～198：118住　229：122住
200：119住

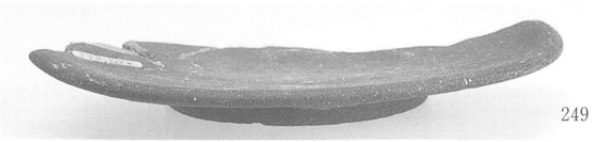
図版14　117、118、119、121、122住出土土器


234


230

241


242

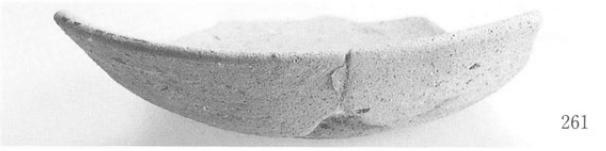

249

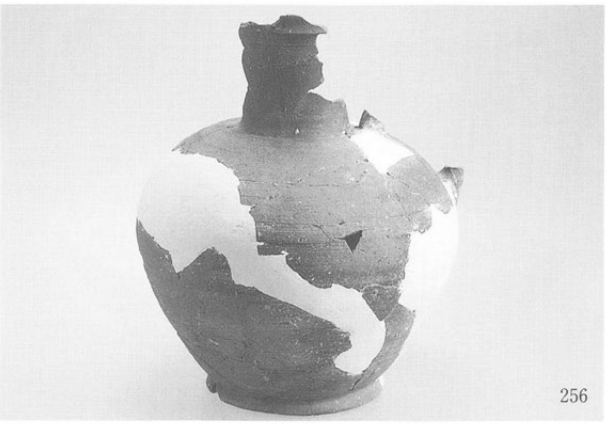
224

216

259

260


261


256

247

216～247：122住
249、256：123住
259：126住
260、261：127住

図版15　122、123、126、127住

264

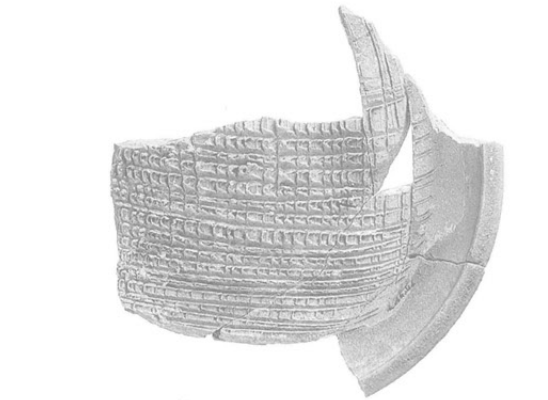
263

270

273

267

268



290

284

303

311

283

287

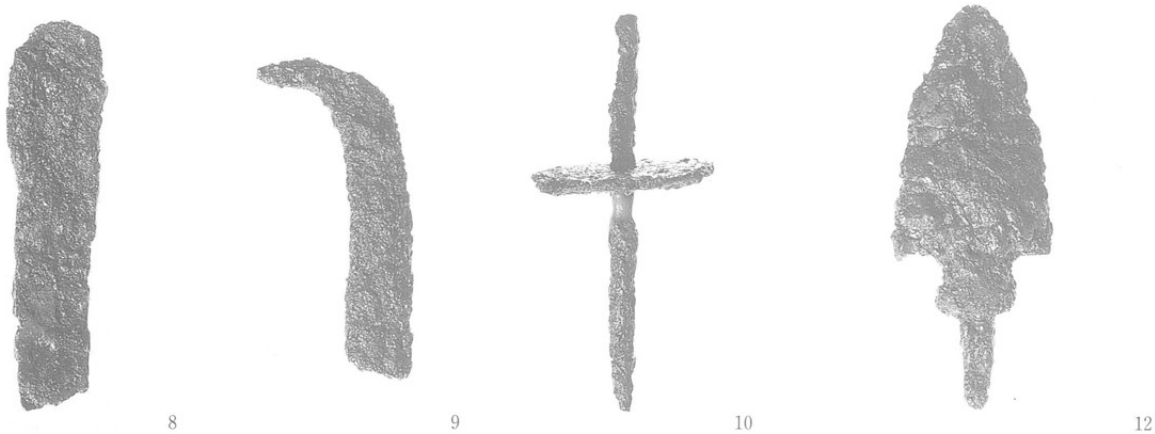
265

263、264：128住
265～270：129住
273：133住

283：土1204
284：土1209
287：土1221
290：土1226

303、311：グリッド

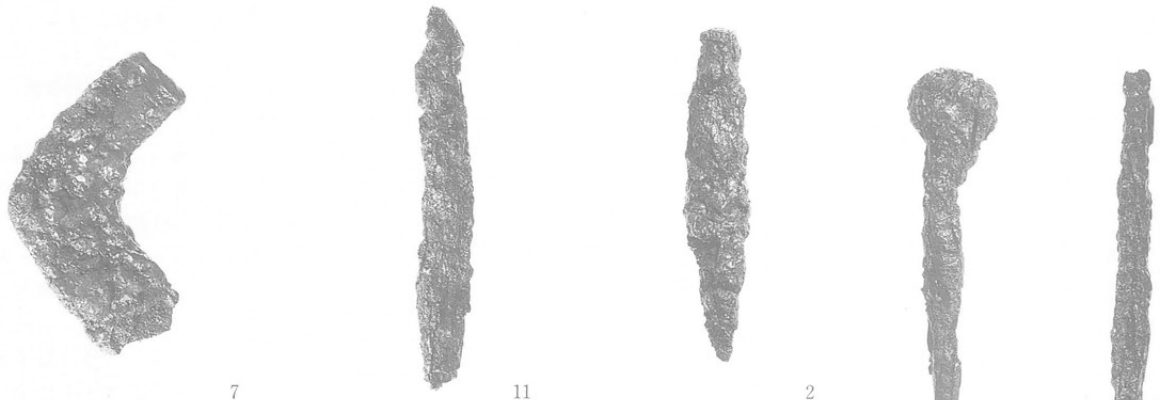
図版16　128、129、133住、土坑、グリッド出土土器



8　9　10　12

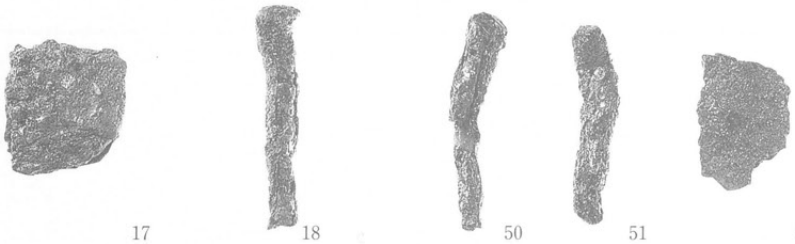
117住出土鉄器　8：不明、9：苧引具か、10：紡錘車

122住出土鉄鏃



7　11　2

住居址出土鉄器　2：104住出土刀子、7：114住出土不明品、11：122住出土刀子

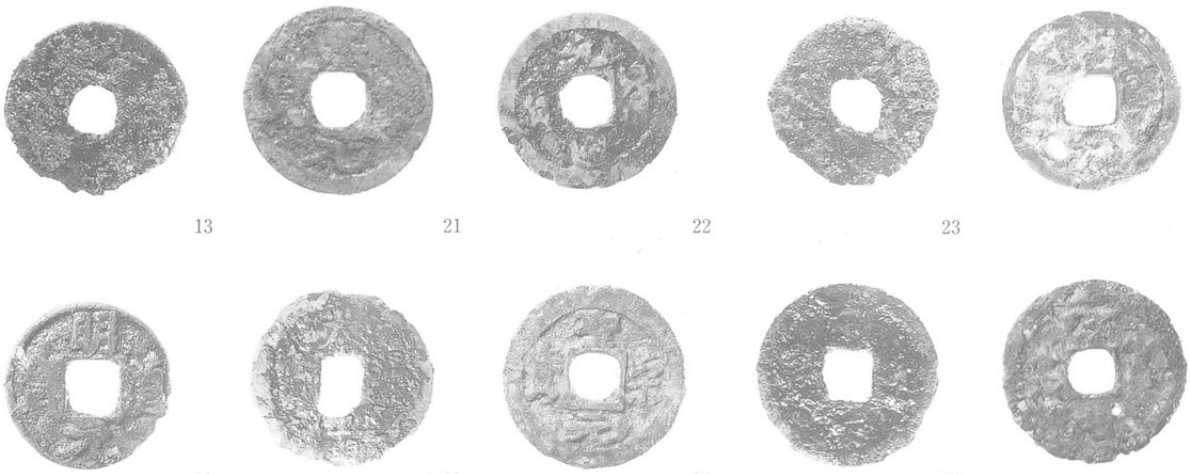


17　18　50　51　52

1223土出土鉄器　17：不明品、18：釘、50：釘、51：釘、52：不明品

16　19

土坑出土鉄器
16：1222土出土不明品
19：1225土出土不明品



13　21　22　23　25

26　30　34　35　48

出土銭貨　13：130住出土熙寧元寶、21：1226土出土熙寧元寶、22：1226土出土元符通寶、23：1226土出土不明銭、25：1234土出土熙寧元寶
26：1242土出土明道元寶、30：グリッド出土太平通寶、34：グリッド出土聖宋元寶、35：グリッド出土皇宋元寶、48：グリッド出土聖宋元寶

図版17　金属器

県町遺跡緊急発掘調査報告書抄録

ふりがな	あがたまちいせき12きんきゅうはっくつちょうさほうこくしょ
書名	県町遺跡XII緊急発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	松本市文化財調査報告
シリーズ番号	№165
編著者名	澤柳秀利・内堀団・太田圭郁・清水究
編集機関	松本市教育委員会（松本市立考古博物館）
所在地	〒390-8620 松本市丸の内３番７号（〒390-0823 松本市大字中山3738番地1・Tel0263-86-4710）
発行年月日	平成15年３月20日（平成14年度）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あがたまち 県町	ながのけんまつもとし 長野県松本市 県２丁目1-1	20202	161	36度 14分 45秒	137度 59分 54秒	20011119～ 20020325	1,200	松本県ヶ丘高校体育館建替えによる

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
県町	集落跡	弥生 古墳 奈良 ～平安 ・ 中世	竪穴住居址　37軒 土坑　49基 ピット　69個 竪穴状遺構　2基 溝址　5条 流路址　4条 集石　3ヶ所	弥生土器 石器（磨製石鏃） 土師器 土器・陶磁器（土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・緑彩文陶・青磁・白磁・常滑焼・陶硯） 金属製品（釘・刀子・紡錘車・苧引具・銭貨・不明品） 石製品（銙帯・磨製石鏃）	薄川の氾濫の影響を強く受けながら存続した平安時代前期の集落址を確認した。緑彩文陶・緑釉三足盤・水晶製銙帯を出土する住居址もみられた。また、一部であるが弥生時代の遺物も出土している。

松本市文化財調査報告　№165

松本市県町遺跡XII

― 緊急発掘調査報告書 ―

発行日　平成15年３月20日

発行者　松本市教育委員会

〒390-8620　長野県松本市丸の内３番７号

印　刷　アサカワ印刷株式会社